

# 蒲田部木原11

— 蒲田部木原遺跡第13次調査報告 —

2024

福岡市教育委員会

# 蒲田部木原11

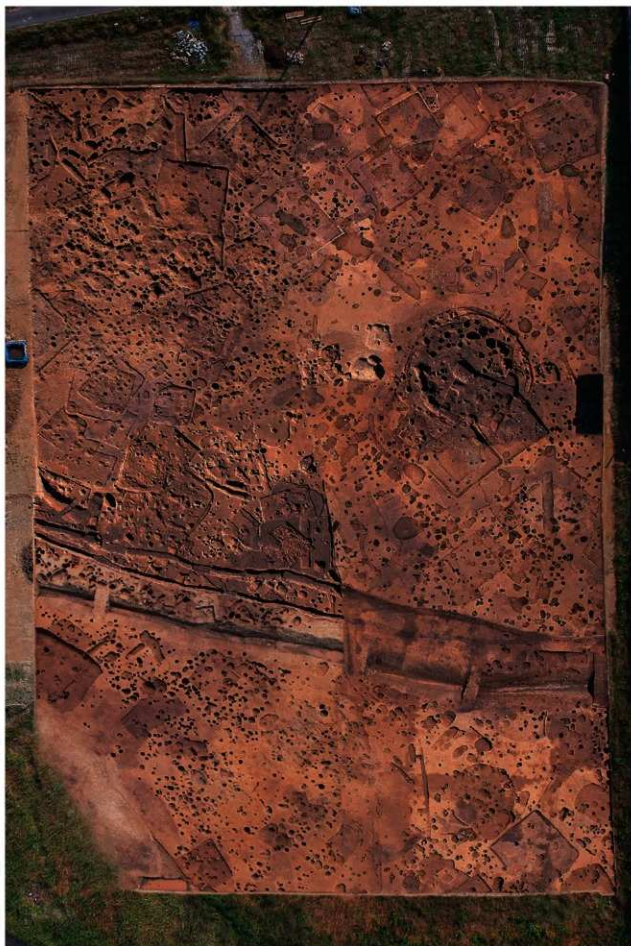
— 蒲田部木原遺跡第13次調査報告 —



遺跡番号 KHH-13  
調査番号 1813

2024

福岡市教育委員会



調査区全景（上空から）



調査区北東側（北から）



SC7260 調査風景（北西から）





調査区北西側（北東から）



SC5362から南東（北西から）



SK4133 (北東から)



SC7046 内 SX7060 焼骨含む (南西から)



SC2007 (東から)



SC5362 (北西から)



SC6930 内 SX6931 (南から)



SK6442 (南西から)



SK6706 床焼土 (南西から)



SK2051 (北東から)



SK4984 炭化米検出 (東から)



SK5901 (南西から)



SK2148 (北から)



SK6282 遺物 (西から)



SC6200 カマド 6251 (南西から)



SC5362 出土遺物 (北から)



SC402 (東から)



SK2421 焼土 (西から)



調査区南西部 検出時 (北から)



SC7260 検出時 (北から)

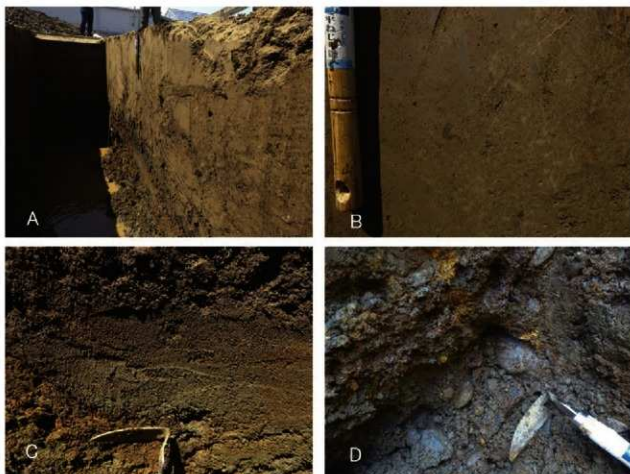


IV区調査風景 (北から)

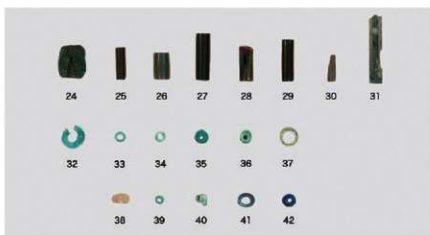


I-1 区遺構検討 (南西から)

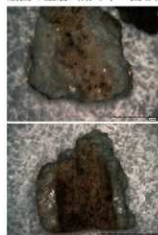




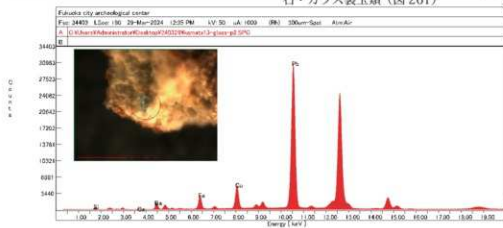
トレンチ壁面の土層 (第4章・図2)



石・ガラス製玉類 (図261)



SP4582 出土ガラス管玉  
デジタルマイクロスコープ画像



SP4582 出土ガラス管玉  
蛍光 X 線分析結果

## 序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市には、歴史的遺産が数多く残されており、それらを保護し、後世に伝えることはわたしたちの重要な責務であります。

しかしながら、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な先人の足跡が失われていくことも事実です。そのため本市では、事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録を残すことで、後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、蒲田部木原遺跡第13次調査について報告するものです。このたびの調査では、弥生時代から古墳時代の集落を確認し、縄文時代以降の多くの遺物が出土しました。

今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、株式会社キョーワ様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大なご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和6年3月22日

福岡市教育委員会  
教育長 石橋 正信



## 例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市東区蒲田三丁目の倉庫建設工事に先立ち、平成 30（2018）・平成 31（2019）年度に実施した蒲田部木原遺跡第 13 次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は民間受託事業として実施した。
3. 本書の遺構実測図は加藤良彦・池田祐司・神啓崇・坂口剛毅・中国将祥・野村俊之が作成した。遺物実測図は、池田祐司・神啓崇・池田晃子・立石真二・棚町陽子・野村美樹・林田憲三・久富美智子・平田春美・吉富千春・山口謙治が作成した。製図は、池田祐司・神啓崇・本田浩二郎・池田晃子・野村美樹・井上加代子・大庭友子・野口聡子が担当した。
4. 本書の遺構写真は池田祐司・神啓崇が撮影した。
5. 本書の遺構実測図中の方位はすべて座標北である。
6. 本書掲載の座標は世界測地系で、標高は 3 級基準点 3-0490 (H=16.757m) を基準とした。
7. 検出遺構は、001 から検出順に通し番号を付けた。
8. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。  
S C 堅穴建物 S D 溝 S K 土坑 S P 柱穴 S X 不明遺構、その他
9. 本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理・公開する予定である。大いに活用していただきたい。
10. 発掘調査および報告書作成にあたり多くの方々のご協力を賜った。地質は下山正一氏（佐賀大学理工学部）、動物遺体・骨角製品は新美倫子氏（名古屋大学博物館）に特論を執筆していただいた。樹種同定は株式会社パレオ・ラボに委託した。玉類は比佐陽一郎氏（奈良大学）に分析していただいた。
11. 本書の執筆は池田祐司、神啓崇、下山正一、新美倫子、小林克也がおこなった。
12. 編集は池田祐司・神啓崇が担当した。

遺跡名	蒲田部木原遺跡	調査回数	13 次	調査略号	KHH-13
調査番号	1813	分布地図図幅名	蒲田	遺跡登録番号	3
申請地面積	9429㎡	調査対象面積	倉庫建設予定範囲 4325.5㎡ および隣接道路セットバック部分	調査面積	4423㎡
調査期間	2018 年 8 月 1 日 - 2019 年 4 月 30 日			事前審査番号	29-2-678
調査地	福岡市東区蒲田三丁目 742、743、744-1、746、747、748-1、749、745-1、3033、2027				

# 目次

第1章	はじめに	
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査体制	1
第2章	遺跡の立地と歴史的環境	2
第3章	発掘調査の記録	4
1.	調査の概要	4
2.	弥生時代	6
(1)	竪穴建物	8
1)	弥生時代前期	8
2)	弥生時代中期	11
3)	弥生時代後期	39
(2)	土坑	55
1)	弥生時代前期	55
2)	弥生時代中期	75
3)	弥生時代後期	115
(3)	溝	116
1)	弥生時代中期	116
3.	古墳時代	124
(1)	竪穴建物	126
1)	弥生時代終末期～古墳時代前期	126
2)	古墳時代中期	163
3)	古墳時代後期	174
(2)	土坑	197
1)	古墳時代前期	197
2)	古墳時代中期	197
3)	古墳時代後期	198
(3)	溝	199
1)	古墳時代後期	199
(4)	その他の遺構	202
1)	古墳時代中期	202
4.	縄文時代	205
5.	その他の遺物	208
第4章	蒲田部木原遺跡 13次調査 土層観察メモ	231
第5章	蒲田部木原遺跡 13次調査出土の動物遺体・骨角製品	233
第6章	蒲田部木原遺跡 13次調査出土炭化材の樹種同定	236
第7章	まとめ	238
	写真図版	241
	蒲田部木原遺跡第13次調査遺構実測図 (1/100)	付図



調査区付近航空写真（昭和30年代）

## 第1章 はじめに

### 1. 調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、東区蒲田三丁目742、743、744-1、746、747、748-1、749、745-1、3033、2027における倉庫建設に伴う埋蔵文化財の照会を平成29(2017)年10月27日付で受理した(29-2-678)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である蒲田部木原遺跡内にあり、周辺で発掘調査を実施しているため、申請地内でも遺構の存在が推測された。これを受け、埋蔵文化財課事前審査係が平成29年11月27・28日に確認調査を実施し、現地表面下20cmで弥生時代から古墳時代の遺構を密に確認した。このため、遺構の保全等に関して申請者と協議したが、予定建築物の構造上、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成30(2018)年7月23日付で株式会社キョーワを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、平成30(2018)年8月1日から平成31(2019)年4月30日まで発掘調査、令和2年度から5年度に資料整理および報告書作成を実施した。

申請地9429㎡のうち、調査対象範囲は工事により埋蔵文化財が影響を受ける倉庫建設予定範囲4325.5㎡および隣接道路セットバック部分で、調査面積は4423㎡である。それ以外の部分は現状保存している。

調査にあたっては、株式会社キョーワ様および近隣の方々からご理解をいただくとともに多大なご協力を賜りました。記して深謝いたします。

### 2. 調査体制

調査主体	福岡市教育委員会		
調査委託	株式会社キョーワ		
〈発掘調査 平成30・31年度〉			
調査総括	福岡市経済観光文化局文化財活用部		
	埋蔵文化財課	課長	大庭 康時
	埋蔵文化財課	調査第1係長	吉武 学
調査庶務	文化財活用課	管理調整係長	藤 克己
	文化財活用課	管理調整係	松原 加奈枝・松尾 智仁
事前審査	埋蔵文化財課	事前審査係長	本田 浩二郎
	埋蔵文化財課	事前審査係	中尾 祐太(平成30年度) 朝岡 俊也(平成31年度)
調査担当	埋蔵文化財課	調査第1係	池田 祐司・加藤 良彦・神 啓崇
〈整理・報告 令和2～5年度〉 下記の所属と氏名は令和5年度			
整理・報告総括	埋蔵文化財課	課長	菅波 正人
整理・報告庶務	文化財活用課	管理調整係長	石川 あゆ子
	文化財活用課	管理調整係	内藤 愛
事前審査	埋蔵文化財課	事前審査係長	田上 勇一郎
	埋蔵文化財課	事前審査係	三浦 萌
整理・報告担当	埋蔵文化財課		池田 祐司・神 啓崇

## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

蒲田部木原遺跡は福岡市の東部、粕屋平野に位置する。多々良川・須恵川・宇美川が形成した沖積地と三郡・若杉山地から連なる台地からなる。遺跡周辺は、物流倉庫建設を中心とする発掘調査が実施され、蒲田部木原遺跡で12次、蒲田水ヶ元遺跡で3次に及ぶ。本調査地点は、蒲田部木原遺跡のなかでも低地部に位置し、沖積段丘面に位置づけられる（第4章参照）。一帯の田面の標高は西側へ下がる。調査時の現況は標高16.0～16.4mの水田で、北側は南西へ流れる水路に面する。この水路は田の区画、字境などから旧河道の痕跡と考えられる。本調査地点北側の田面は30cmほど低く、旧河川の落ちに一致する。調査地点の小字名は古毛である。周辺ではこの河道を挟んで北西に近接する10次、南西に隣接する11次で弥生時代前期から古墳時代後期の集落跡が、北東側100mの水ヶ元3次では縄文時代後期、古墳後期の集落、弥生時代の墓地、東側70mほどの水ヶ元2次では弥生時代中期から終末の集落が確認されている。本調査地点の東側は蒲田水ヶ元遺跡の範囲で、これまで蒲田部木原遺跡との間に南北方向の河道が想定され二つの遺跡を分けていた。しかし、今回確認した遺構分布は東側にさらに伸びることが想定されるため、両遺跡は一連の遺跡ととらえることができよう。

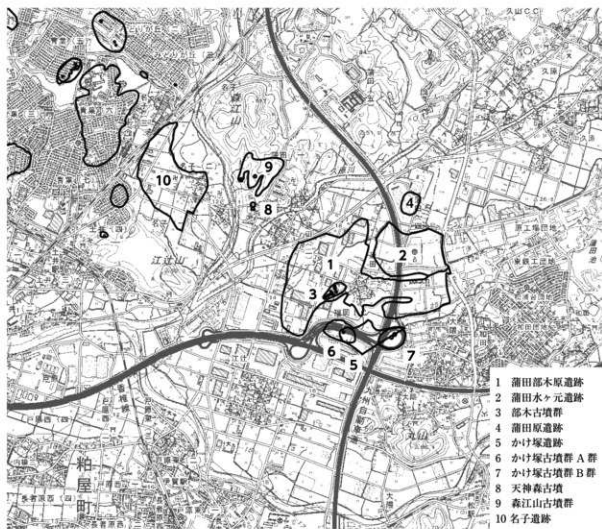


図1 遺跡位置図 (S=1/25000) 国土地理院地図 1/25000 地形図を加工して作成

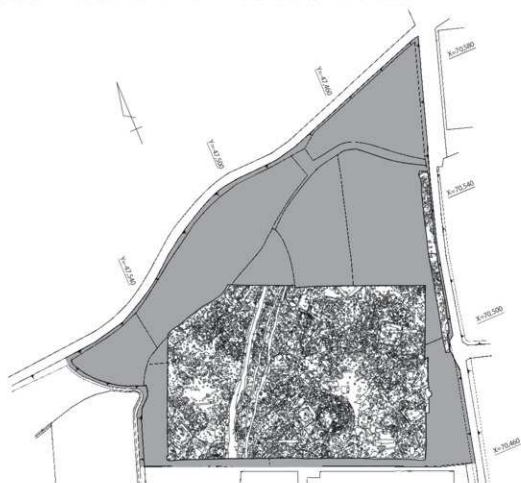
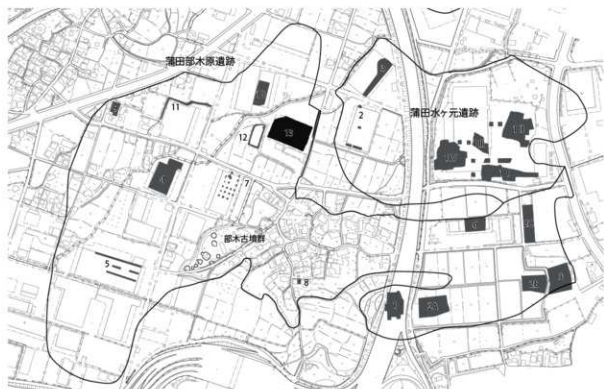


図2 調査地点位置図 (S=1/8000)・調査区位置図 (S=1/1200)

### 第3章 発掘調査の記録

#### 1. 調査の概要

**調査の経過と方法** 調査の対象範囲は、申請地 9429㎡のうちの建物建設範囲 81 × 55 mの長方形の範囲で、調査中に東側の道路拡張部分が増えた。このほかの部分は盛土され保存されている。

調査は 2018(平成 30)年 8月 1日に重機による表土掘削より開始した。遺構面は耕作土、旧耕作土、床土を合わせて 30～40cmほどを除去した黄灰褐色シルト層上面で、下層の砂礫層が露出する箇所もある。遺構面の標高は北東側が高く 16.1 m、西端が低く 15.6 mほどで、耕作等による削平も大きいと考えられるが、地形の傾斜を反映している。調査区北西端は上記の旧河道により遺構が削平を受け、また南東隅に自然流路と思われる落ちがあるが、これら以外は遺構が全域に密に広がる。遺構埋土は主に暗褐色粘質土で、切り合いが著しく暗褐色土が包含層状に広がる箇所が各所で見られた。この面から人力での掘削を行い、平面での遺構検出に努めたが、プランが不明瞭なもの、床面で一部のみを確認したものなども多い。また包含層状の掘削に重機を使用した箇所もある。

掘削は北東側から行い、廃土置場、土捨て場を確保しながら、一定範囲の遺構掘削が進んだ時点で調査範囲を広げ、埋め戻しも随時行った。最後に南西部の調査に至り、2019年 4月 28日に埋め戻しを終え、30日までに撤収した。調査の終わりには、作成した調査概要プリントを現場入口に配置し 100枚以上の利用があった。

調査中は調査範囲をⅠ～Ⅳ区の4区画に分けて調査工程の把握、協議に使用していたが、今回の報告では使用しない。ただし道路拡張部分のⅣ区についてのみ用いる。

**記録** 遺構等の記録は主に遺構実測図と写真で行った。遺構実測にあたっては調査区の形に合わせて 10 m毎に測量杭を設置し、これを基に 1/20で全域の遺構実測を行った。また必要に応じて個別図を作成している。1/20の遺構図は南北 7 m、東西 10 mの単位で図を作成し、この図に対し東端の1列を No. 1～19、その西側の列を 11～19と順に図に番号をつけている(図 4・163)。今回の報告では遺構の位置をこの 1/20 遺構図の番号で示し、本文、表等に No. 1 の様に記した。

測量の標高、座標は 3級基準点 3-0490 (H=16.757m) から導いた値を使用している。

写真はデジタル、フィルムで撮影した。あわせて小型ドローンによる撮影を適宜実施し、遺構写真のほかに検出時等でも有効であった。ドローン使用にあたっては福岡空港高さ制限回答システムで使用可能高さを確認したうえで実施した。また業務委託による中型カメラによる空撮を 5回に分けて実施し、最終的に合成して全景写真を作成した。

遺構番号は遺構の種類に関係なく 1 から付した。調査後に付したのもあわせて 7260 基を数える。

**遺構・遺物** 確認した遺構と遺物は縄文時代後期から古墳時代後期におよぶ。縄文時代では遺構面である黄灰褐色シルトの一部に晩期の遺物が含まれ、2か所でまとまった遺物をみえた。弥生時代は前期から後期の竪穴建物を確認し、前期後半から中期前半は土坑にまとまった土器が出土するものが多い。本調査の特徴として焼土が伴う土坑が多いこと、磨製石器が多いことがあげられる。また中央南側で確認した円形の大型竪穴建物 SC7260 は径 12.5 mほどで目立つ存在である。その後は弥生後期中ごろから竪穴建物が増え、弥生終末から古墳時代前期を最盛期とし、中期、後期に継続する。古墳時代後期にはかまどを持つものが目立ち、調査区を南北に縦断する SD3700 をはじめとする 3本の溝はそれまでの時期にない遺構である。また床面上から滑石を多く出土した SC5362 は規模も大きく堅立つ。遺構は調査中に竪穴建物として取り上げたものが 166 基、土坑としたものは 900 基、このほかに溝や包含層などがある。この中には一部のみを検出した遺構や時期が不明確なものを含む。遺物はコンテ



ナケース 520 箱ほどが出土した。遺構埋土から出土する遺物は弥生中期前半の土器類が最も多く、後世の遺構でも大半をこの時期の遺物が占めることが多い。逆に切り合いを確認できずに後世の遺物が混入していることもあり、時期の認定が難しいことが多い。このほかに、まとまった量ではないが滑石、ガラスの玉類、各種鉄器も出土した。また動物の焼骨が集落遺跡としては多く出土し注目される（5章参照）。

**報告** 報告では遺構とその遺物を弥生時代、古墳時代についてそれぞれ竪穴建物、土坑、溝の遺構の種類ごとに前期、中期、後期に分けて示す。その数は竪穴建物 98 基、土坑 82 基で、取り上げられないものも多い。その内訳は、竪穴建物は、弥生前期 3、中期 33、後期 14、終末～古墳前期 26、中期 8、後期 14。土坑は弥生前期 26、中期 52、後期 12 である。

竪穴建物では平坦な床面、炬、壁溝などを持つものを抽出したが、建物として不確かなものも含む。土坑は一括した遺物の出土があった遺構、焼土の存在など特徴的な遺構から取り上げた。弥生中期までのものがほとんどを占め、それ以降の時期は少数しか取り上げられなかった。これは遺構の数が少ないこともあるが、時期をはっきり認定できる遺物が少なかったことにもよる。また紙面等の関係から取り上げられないものが多い。また単独のピットや掘立柱建物は十分な検討を行っておらず取り上げていない。また今回は弥生時代終末期を古墳時代前期と一つの項目にまとめている。限られた遺物での遺構の時期の判断がしにくいことによる。弥生後期土器の編年については、『元岡・桑原遺跡群 34』（福岡市報 1385 集）を参照している。このほかの時期についても遺構の時期が不確実なものがある。また近接する遺構を一緒に示す際に複数の時期の遺構をまとめて示した。

遺構出土の遺物のうち土器類は、床面等で出土位置を記録したものを優先し、埋土出土を含めて遺構の時期を示すものを中心に取り上げた。中には混じり込み等を示した場合もある。石器は多くが遺構埋土出土で直接は伴わないが、基本的に出土した遺構の項に示した。ただし大陸系磨製石器は、弥生終末期以降の遺構では出土状況から伴うと判断した以外は、後の 5. その他の遺物で示した。

以上の遺構の報告の後に、縄文土器、遺構に伴わない遺物、報告で扱えなかった遺構出土の遺物を材質、器種ごとに報告する。

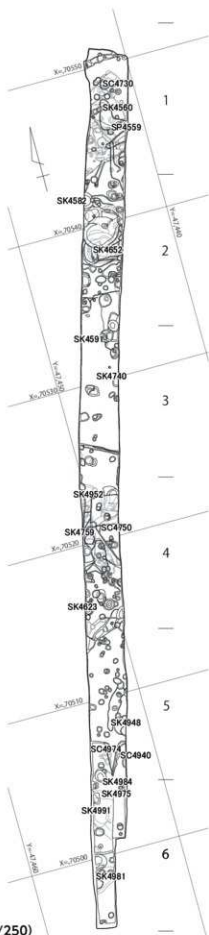


図 3 IV区遺構配置図 (S=1/250)

## 2. 弥生時代

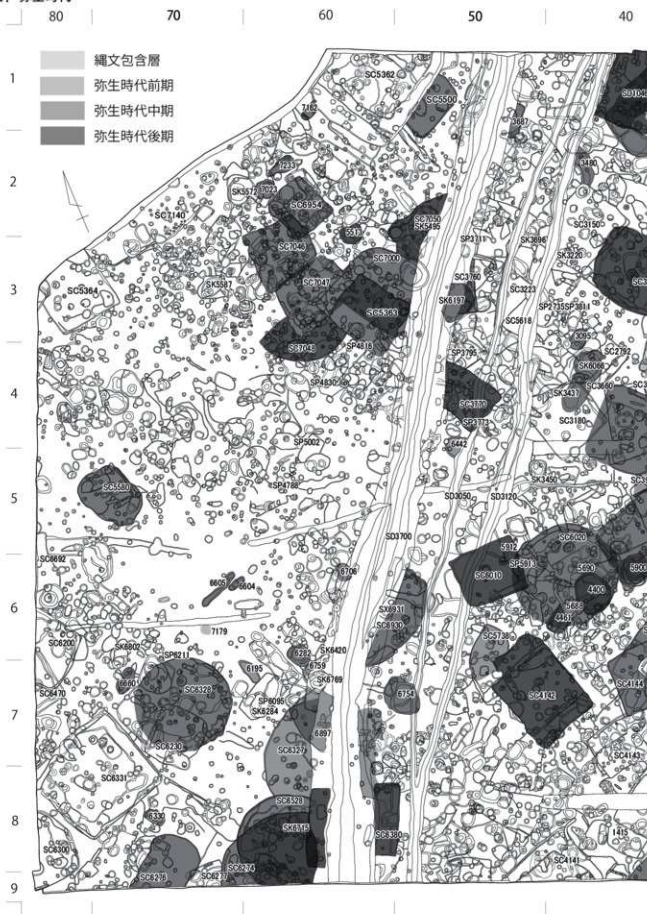
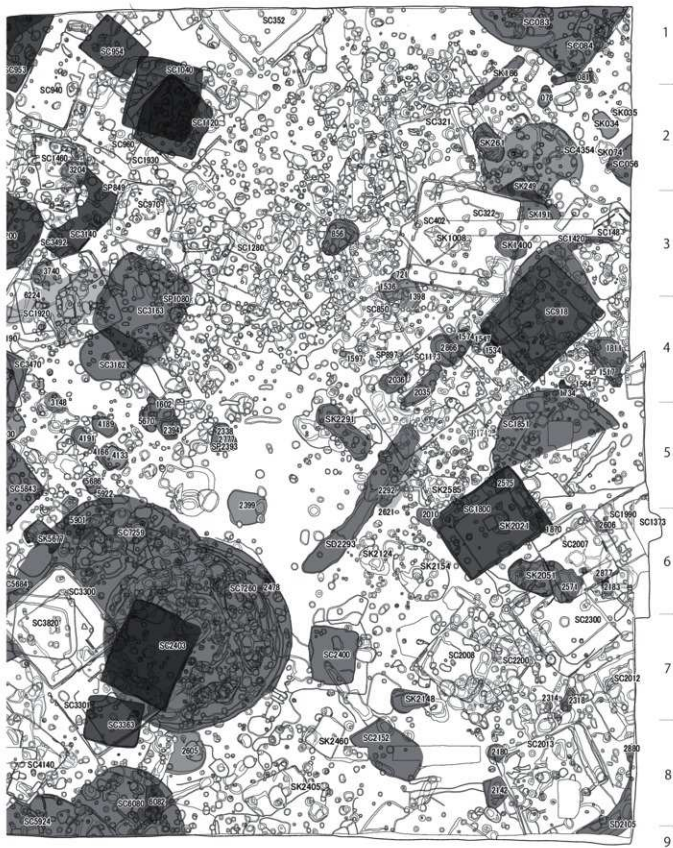


図4 弥生時代遺構

30

20

10



配置図 (S=1/250)

(1) 竪穴建物

1) 弥生時代前期

**SC4354 (図5・6) No.2** 円形の竪穴建物。平面やや扁平で6m×6.7mほどの規模で深さ15cmが残る。埋土は暗灰褐色土で床は淡い黄褐色～茶灰色粘質土または砂礫層。この竪穴は当初の遺構面では確認できず、他の遺構の床や壁に炭化物の広がりが見られた。当初の面では弥生中期の遺構も検出している。この面から重機で20cmほど下げたレベルでプランを確認した。南側はSK249、086、SC322などに切られプランは確認できていない。床面には中央部を中心に炭化材や炭片が多く広がり、SC322のベッド状遺構上にも見られた。また中央部には径15cmほどの焼土面がある。ピットのうち壁から1.2mほどの位置に深さ60cmから70cmのものが8基あり、これらが支柱穴になると考えられる。中央北のSP4361からは支脚2個が出土している。埋土出土の遺物は須玖式が見られず、壺の破片が目立つ。1、2には外反口縁の甕。3は小ぶりのL字、4、5は三角突帯の甕。6は大型壺の底部から胴下部。7、8はSP4361出土の支脚。9はSP4362出土の玄武岩製石斧。ピットからは外反口縁の甕片や壺片があるが少ない。遺物は前期末に収まる。

**SC5738 (図7) No.56** 弧状のプラン1/4を確認した。円形であれば径7.4mほどになる。プラン内にピットや方形の土坑があるが伴うかは不明。竪穴建物の可能性はあるが不確定。遺物は埋土からの小片のみで器形がわかるものは弥生前期後半に収まる。1は外反口縁の甕、2は甕の底部。

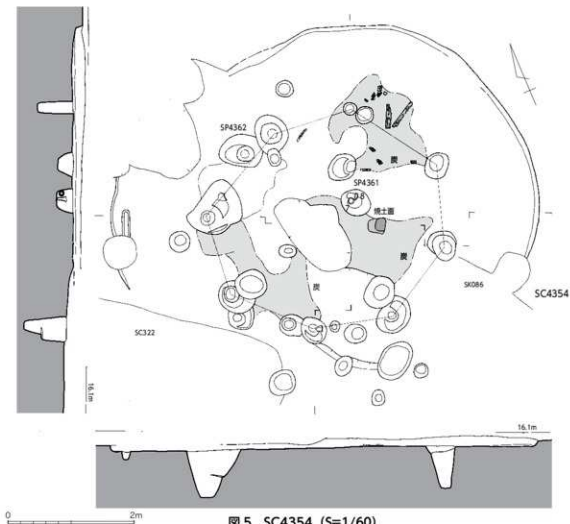


図5 SC4354 (S=1/60)

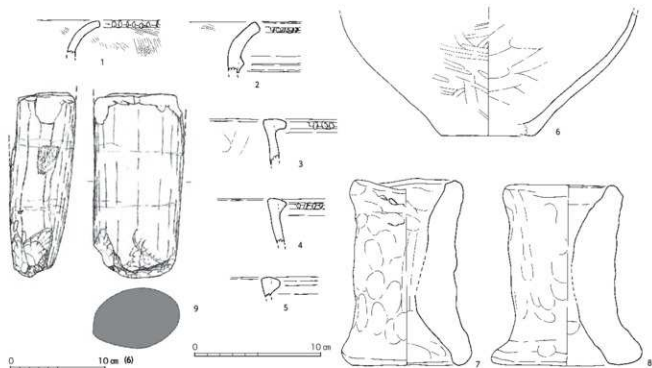


図6 SC4354 出土遺物 (S=1/3・S=1/4)

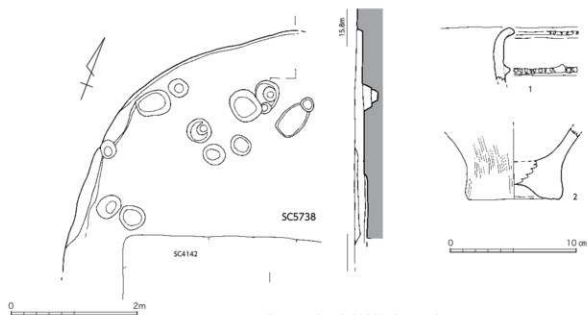


図7 SC5738 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3)

SC6327 (図8) No.67 SD3700、円形のSC6528に切られる弧状のプランを確認した。円形堅穴のプラン1/3弱と考えられる。径8mほどと推定されるが、東側のSD3700の対岸は西側の床と同レベルでありプランの確認はできなかった。深さ20cm弱が残る。壁から2mほどの位置に深さ60cmから70cmのピットがあり、これらが主柱穴になるものと考えられる。遺物は埋土から少ないが出土がある。1から5は莖で外反口縁と小ぶりの三角突帯から逆Lになるものがある。6から8は壺。前期末の遺物の中で5に新しい要素がある。9は扁平片刃石斧で埋土出土。10は石包丁でSP5977出土。11は柱状片刃石斧でSP6778出土。弥生時代前期末から中期初頭。切り合う円形堅穴3基の中で最も下で、遺物も古相である。

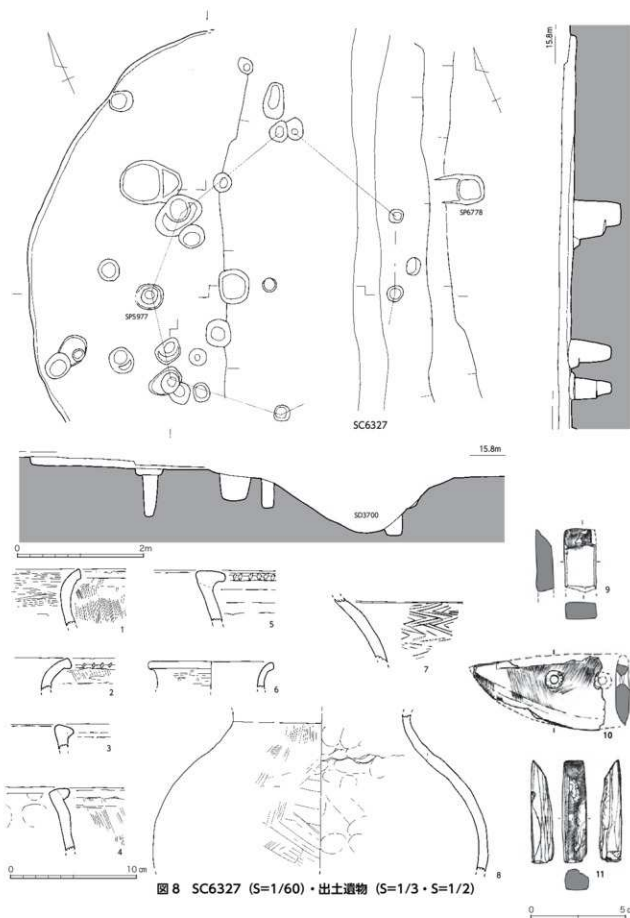


图8 SC6327 (S=1/60) · 出土遗物 (S=1/3 · S=1/2)



## 2) 弥生時代中期

**SC056 (図9・10) No.2** 東壁沿いで調査区外に広がる。コーナー部分のプランは他遺構との切り合いがあり不明確で、平面円形の可能性もある。規模は270×120cm以上で深さ20cm。暗褐色～暗灰褐色粘質土を覆土とする。一部プランに沿った溝があるが続くかは不明。掘方よりやや浮いて焼土がある。焼土の存在から竪穴建物の項に入れた。5、6層中の焼土より高い位置に遺物の出土が目立ち、焼土と同レベルで石包丁9が、焼土から片刃石斧片が出土している。遺物は須玖Ⅰ式の甕が目立ち、城ノ越式、須玖Ⅱ式を含む。1～3は城ノ越から須玖Ⅱ式の甕、4から8はその底部。9は石包丁の未成品で刃の研ぎ出し、穿孔が見られない。まとまった遺物の出土から弥生中期中頃か。

**SC083 (図11) No.1** 調査区北東端で検出した円形の竪穴建物で、北側は調査区外へ広がる。復元径は8.6mほどである。埋土は暗褐色土で、検出面から15cm前後で床面となる。部分的に壁溝を巡らせる。建物中央付近に炭、焼土の広がりがある。SC084を切る。遺物は須玖Ⅰ式の甕が目立つ。薄パンケース1箱分出土。1は甕、2は器台である。

**SC084 (図12) No.1** 調査区北東端で検出した竪穴建物で、短軸長460cmを測る。SC083に切られる。検出面から床面までの深さは20cm前後、埋土はやや淡い茶褐色土である。調査区壁際に炭粒・焼土があり、炉を想定する。主柱穴は不確かである。遺物は須玖Ⅰ式が目立つ。1・2は器台、3～8は甕。9は直口壺の口縁部で、混じりこみか。10はホルンフェルスの石包丁である。

**SC1420 (図13) No.3** 弧状のプラン(1420と1513)を確認し、SC148の床面で確認した溝SDI284がこれに連なり、円形竪穴建物を想定した。壁際には弥生土器の大型片が出土する。プラン内は他の遺構が切り遺構の範囲をとらえ難い。南側のプランは不明である。SC918、SC148の床面およびその間を下げた段階で確認した遺構群が伴う可能性があり図示した。ただし壁際の床より検出レベルが高く別の可能性がある。もしくは壁際がSDI284に見るように溝状に下がることも考えられる。遺構のうちSX1507は中央に焼土がみられ、炉とも考えられる。北側のプランから想定される規模は14mほどになる。遺物は北側の壁際のものを出した。大型の破片も目立つ。1は鋤形口縁の鉢状。2は甕、3は反外口縁の甕。5は打ち欠きの土製円盤。新しい遺物から須玖Ⅰ式期か。

**SC2152 (図14) No.27** 不整形の竪穴の中央に浅い径50cmのくぼみの底が赤変する。竪穴建物のベッド状遺構の内側などの可能性を想定した。東側はトレンチに切られる。西側の一辺は方向がずれるが、別遺構のプランの可能性もあろう。南北長2.6m、幅1.4mほどで深さ17cmほどである。遺物は埋土中に須玖Ⅰ式の破片が多いが、弥生後期のくの字口縁緑の小片もある。石包丁の小片も出土し

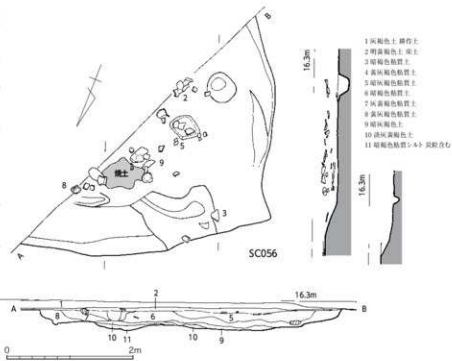


図9 SC056 (S=1/60)



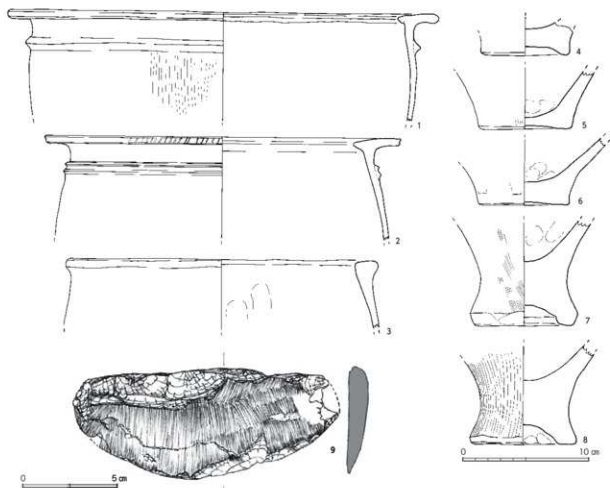


图 10 SC056 出土遗物 (S=1/3 · S=1/2)

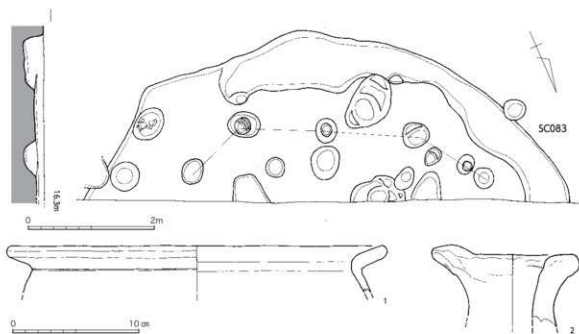


图 11 SC083 (S=1/60) · 出土遗物 (S=1/3)

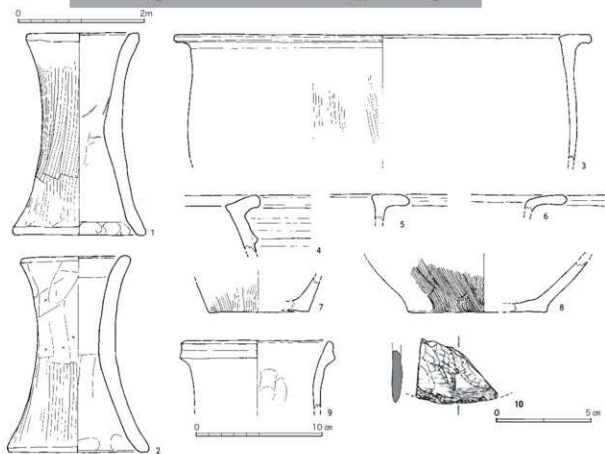
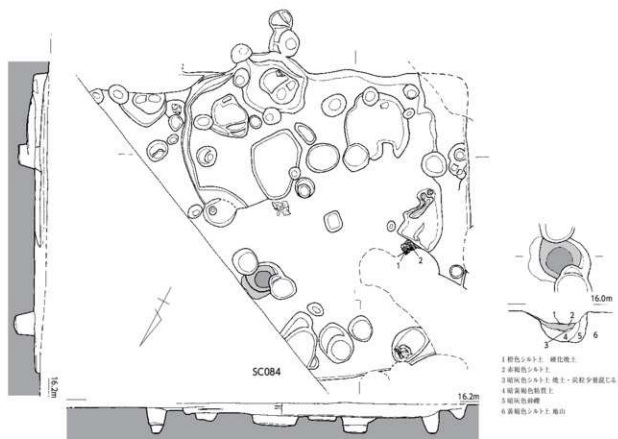


図 12 SC084 (S=1/60)・炉土層 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3・S=1/2)

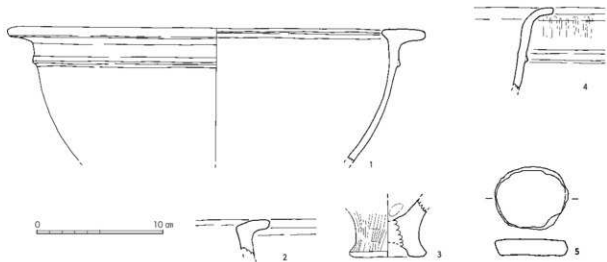
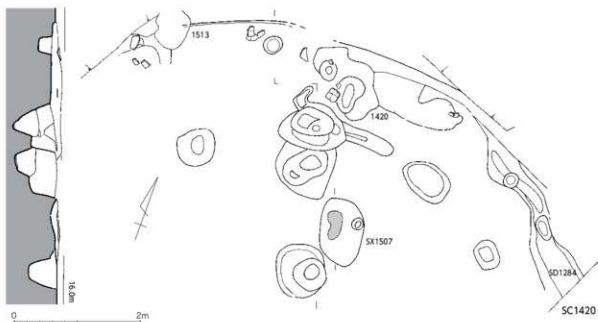


図 13 SC1420 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3)



図 14 SC2152 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3)

ている。1、2は埋土出土の須玖Ⅰ式の甕。弥生時代中期前半。

**SC2400 (図15・16) No.27** 平面長方形プランで、3.8m × 3.1m、深さ20cmを測る。主柱穴や炉は把握できなかったため、堅穴建物かは不確かである。遺物はいずれも床面から10～15cm程度深く。遺構中央付近で大型の砥石、大型石包丁が出土した。個別に取り上げた土器は、須玖Ⅰ式のまとまりと須玖Ⅱ式のまとまりがある。時期が異なるため、それぞれ別の遺構に伴う可能性があるが、プランは捉えられなかった。1は石包丁、2は磨製石剣。いずれも董青石ホルンフェルス製。3から7は甕、8から13、16、17は壺、14、15は小型の壺である。このほか、スラッグ状の塊が出土している。

**SC3162 (図17) No.34** 平面円形で、復元径3.5mを測る。床面までの深さは15～20cm程度である。SC1670に切られる。主柱穴は不確かだが、概ね建物四隅に比較的深い柱穴がある。遺物は、SK3148と番号を重複して付けたため一部混ざってしまったが、SK3148で個別に取り上げた遺物の検討から、SK3148は前期末、SC3162は中期前半に分別できた。1、2は須玖Ⅰ式の甕。

**SC3163 (図18・19) No.33** 長軸長5.6m、短軸長4.9m、深さ3～9cm程度を測る。長方形プランの堅穴建物として捉えたが、東壁がハの字状に広がるため、複数の堅穴建物の切り合いの可能性もある。主柱穴は不確かである。建物内の2箇所に焼土のまとまりがある。遺物は薄パンケース2箱分出土した。1～3は石包丁、4～6は壺の底部、7は甕、8は高坏の口縁である。

**SC3470・3930 (図20) No.44** SC3470は4.6m × 5.2mの方形プランの堅穴建物である。西側はSC3660に切られる。北・東・西壁の三方にベッドがあり、検出面からベッドまでの深さ25cm程度、床面までの深さ40cm程度を測る。北壁・東壁の一部に壁溝が巡る。主柱穴は断面で示したベッド際4隅の柱穴になろう。炉跡は確認できていない。1は須玖式の丹塗壺の口縁、2は甕の口縁である。

SC3930 方形プランで、深さ5～10cmを測る。SC3470ほか複数の遺構に切られて残りはよくないが、検出の段階で壁と壁溝の平面プランを捉えることができた。遺物は小袋1、小片が多く時期決定の根拠を欠く。

**SC3760 (図21) No.53** 長方形プランで、南北軸長3.9m、東西軸長1.3m以上、深さ30cmを測る。西側の大半をSD3700に切られる。東壁中央付近に焼土、北隅に炭がある。遺物は床面からやや浮いた状態で面的に広がる。1～3は壺、4～8は甕である。薄パンケース2箱分出土した。

**SC4144 (図22) No.46** 方形の堅穴でSC3300に東半を切られる。南北4m、東西4.8mほどの規模が想定され、深さ10cmが残る。床面にはビットなどの遺構が少なく、炉も見られない。堅穴建物かは不確かである。埋土からは弥生時代前期から中期の土器片が出土した。1から4は須玖Ⅰ式の甕。5は高坏片か。6、7は甕の底部。遺物からは弥生中期。

**SC4730 (図23・24) No.Ⅳ 1** 方形の堅穴で、北壁際に幅80～100cmのベッド状の高まりがある。ベッド状までの深さは10cm、床面までは30cm程度を測る。明確な主柱穴や炉跡は確認できず、堅穴建物かは不確かである。遺物は薄パンケース1箱出土した。小片が多いが、鋤形口縁、如意形口縁の破片が散漫にみられる。1～4は甕、5は投弾、6は董青石ホルンフェルスの石包丁。

**SC5363 (図25・26) No.63** 平面プラン方形の堅穴で4.25 × 3.8m規模で深さ10cmほどが残る。南西隅はSK5388に切れ、またSD3700への落ちで立ち上がり不明。床面でビットを確認したが主柱穴ははっきりしない。南壁際中央に径1mほどの土坑SK5590があり、大型の砥石と土器類が出土した。平面径120cmの円形で最大深さ25cmを測る。東隅のSP5510にも大型砥石がある。遺物は小片がほとんどで、須玖Ⅰ式が主体で城ノ越式、須玖Ⅱ古段階のものが見られる。1、2は甕、3から5は壺、6は高坏の脚、7から9は底部、10は器台。11から13は投弾。14は頁岩製の扁平片刃石斧の未成品で刃の研ぎ出しがなされていない。弥生中期中頃。

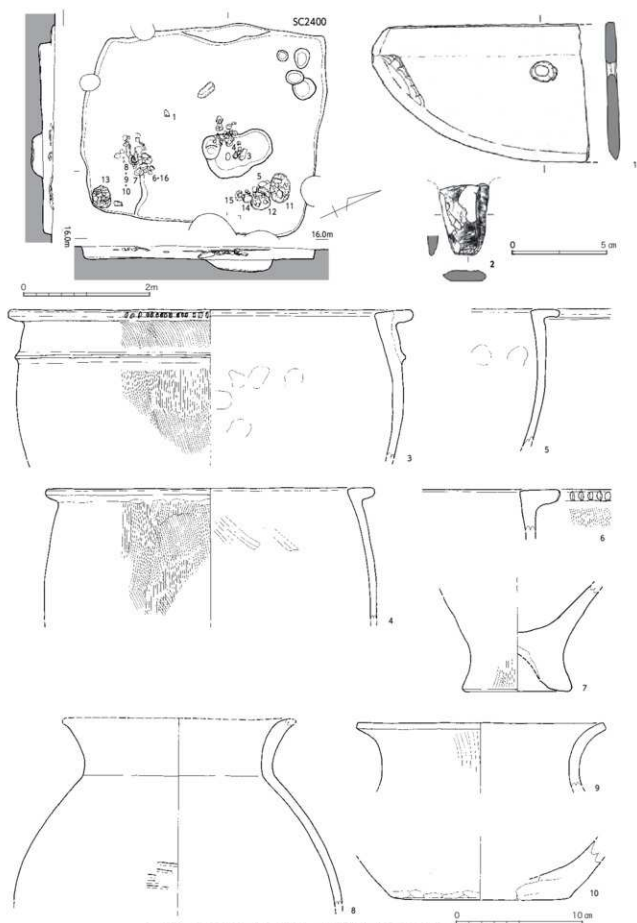


图 15 SC2400 (S=1/60) · 出土遗物 (1) (S=1/2 · 1/3)

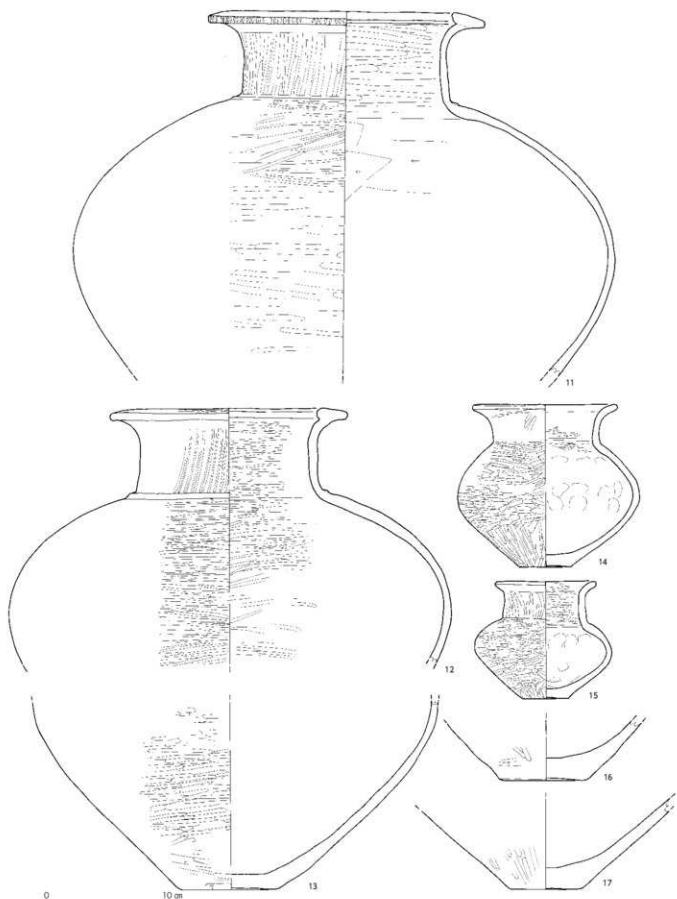


图 16 SC2400 出土遺物 (2) (S=1/3)

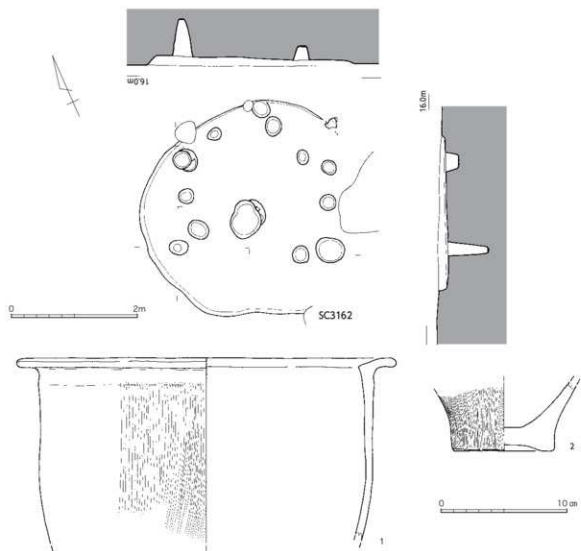


図 17 SC3162 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3)

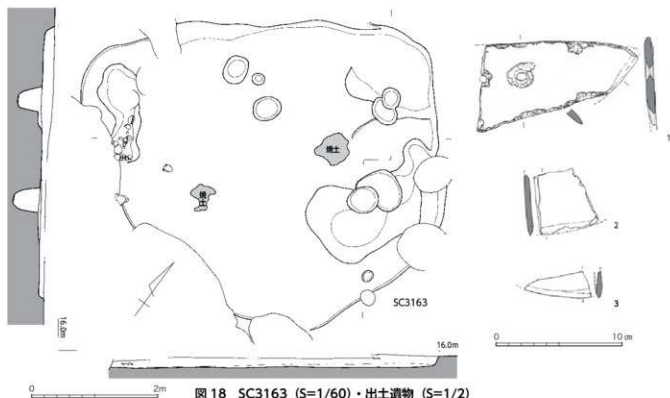


図 18 SC3163 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/2)



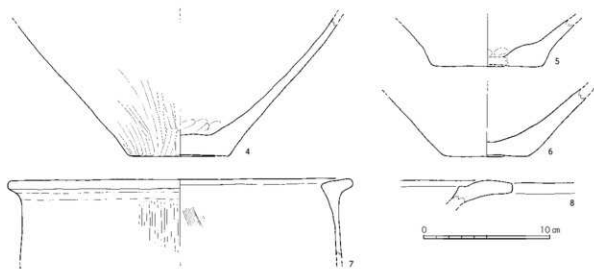


图 19 SC3163 出土遗物 (S=1/3)

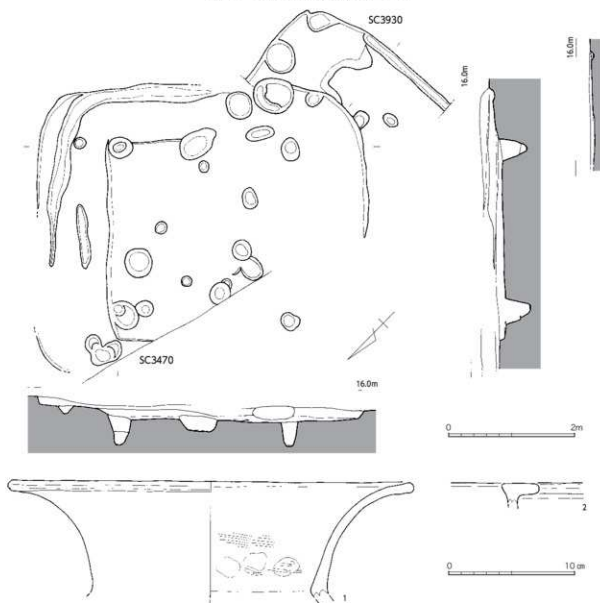


图 20 SC3470 · SC3930 (S=1/60) · SC3470 出土遗物 (S=1/3)

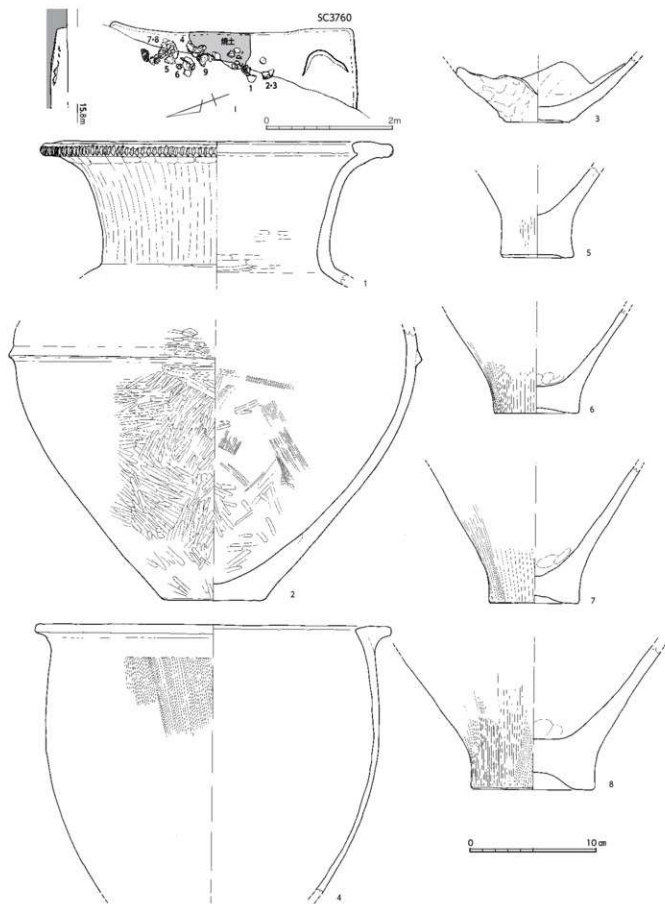


图 21 SC3760 (S=1/60) · 出土遺物 (S=1/3)

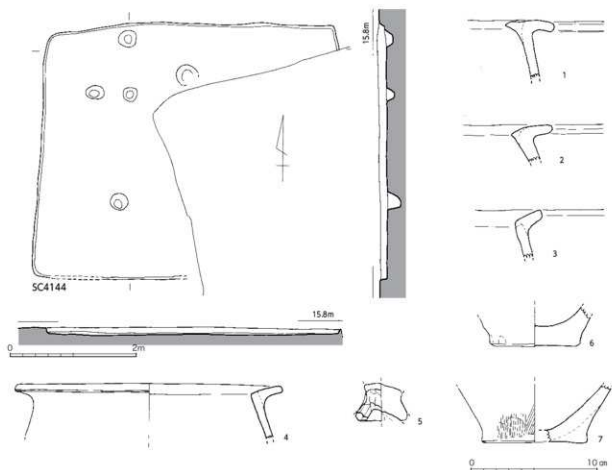


图 22 SC4144 (S=1/60) · 出土遺物 (S=1/3)

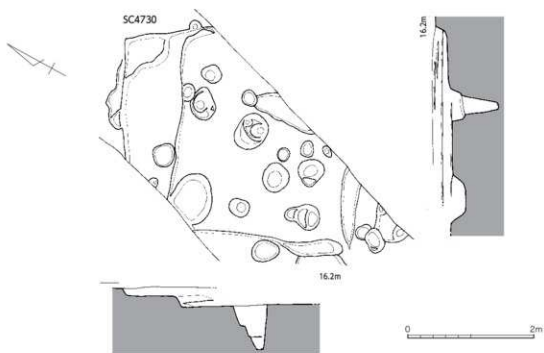


图 23 SC4730 (S=1/60)

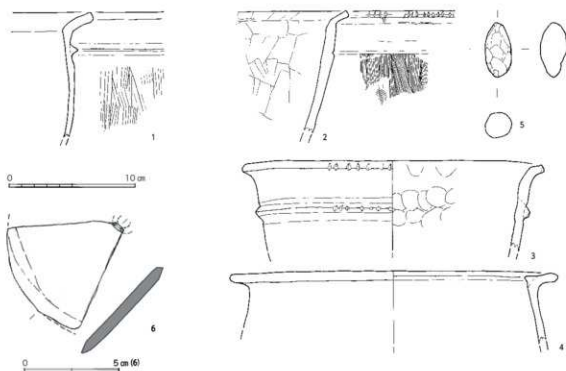


图 24 SC4730 出土遗物 (S=1/2 · 1/3)

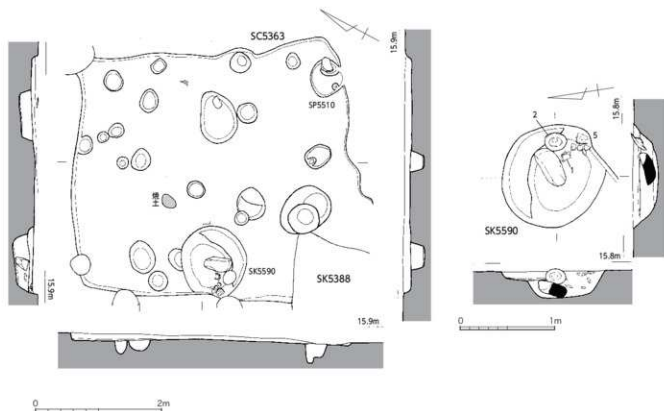


图 25 SC5363 (S=1/60) · SK5590 (S=1/40)

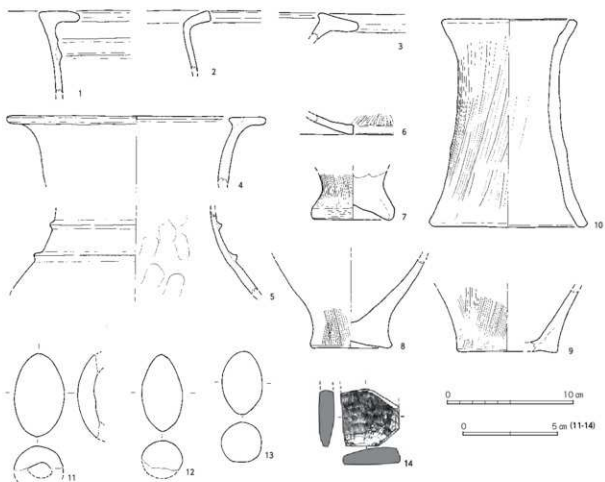


图 26 SC5363 出土遺物 (S=1/3・S=1/2)

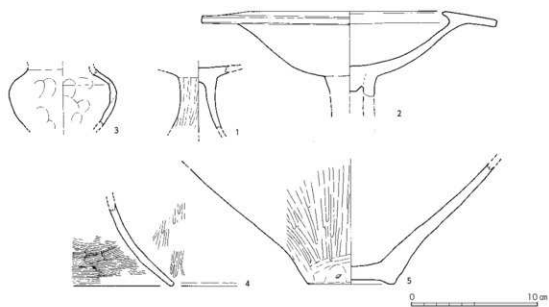


图 27 SK5590 出土遺物 (S=1/3)

**SC5500 (図 28) No.51** 調査区北西側で検出した方形竪穴建物で、南北軸長 4 m、深さ 20cm 程度を測る。建物の半分を SC5362 に切られる。建物中央付近に焼土の広がりがあり、灰跡と思われる。主柱穴は不確かである。1 は器台、2～5 は甕、6 は葦青石ホルンフェルス製の石包丁である。

**SC5580 (図 29) No.75** 検出プランは不整形、東側に壁溝と貼床が一部残り、中央に灰跡を想定しうる焼土がある。主柱穴は不確かである。遺物は大き袋 1 つ分出土。小片が多いが、甕の平底底部、鋤形口縁が認められる。1 は甕の口縁である。

**SC5843 (図 30) No.45** 方形のプランと灰を確認した。南、東側の壁は直線的ではっきりしているが、北側は東から 2 m で直に屈曲し別遺構の重なり可能性がある。西側は SK6005、SK5900 との切り合いもあり不明確だが、北半にみられる落ちを西壁と想定した。この際には壁溝状がみられる。灰は径 90cm ほどの円形で、炭を含んだ黒褐色粘質土が溜り、浅い床の一部が赤変する。床面にピットはあるが浅く主柱穴は不明。遺物は埋土から弥生前期から中期の小片が出土した。1、2 は外反口縁の甕、3 から 7 は前期末から中期の甕、8 は鋤形口縁の壺。9、10 は甕の底部で前期、中期のもの。11 は外面指抑え、内面横方向のなでの鉢状で胎土は前期的である。12 は扁平片刃石斧で石包丁の再生品と考えられる。遺構の時期は弥生中期前半以降で、竪穴遺構の重なり可能性がある。

**SC5924 (図 31) No.38** 調査区中央南端で検出した大型の円形竪穴建物。主柱穴は不詳。東側の SK5935 は住居に伴う掘り込み（掘方や屋内土坑）か。プランが概ねあう。6092 は SD5932 の延長上にあるので、建物壁面のプランを捉えたものである可能性が高い。

**SC6020 (図 32) No.45** 平面円形プランで、復元径 7m 程度を測る。検出面が床面で、壁溝と主柱穴が一部残るため認識できた。

**SC6080 (図 33) No.38** 調査区中央南端で検出した円形竪穴建物である。南西側 1/4 は SC5924 に切られる。復元径 8 m 以上の大型。下面遺構の検出で壁面・壁溝のプランを捉えて判明した。

**SC6274 (図 34) No.68** 南壁外へ広がる弧状のプラン 1/4 ほどを確認した。SD3700 などに切られ円形の SC6528 を切る。円形竪穴建物と考えられ径 9 m ほどが想定される。深さ 20cm が残る。床面で検出したピットのうち壁から 1.2 m から 1.5 m ほどの位置に深さ 50cm から 70cm のものが見られ主柱穴と考えられる。遺物は少ない。1、2 は北壁近くで出土した須玖 I 式の壺と器台である。主柱穴としたピットでは須玖 I 式と外反口縁の甕がみられる。3 は小豆色泥岩の石鎌、4 は石斧でいずれも丁寧な磨研仕上げ。5 は SP6267 出土の葦青石ホルンフェルスの石包丁。弥生時代中期前半。

**SC6276 (図 35) No.78** 不整形円形プランで、南北軸長 3.3m、東西軸長 4.8 m 以上、深さ 10～15cm を測る。建物中央付近に径 60～80cm、厚さ 5cm 程度の炭の広がりがあり、その中央に強く焼けて硬化した焼土が認められる。灰を想定する。床面で、図化した甕や壺が出土した。1 は壺、2～6 は甕、7 は支脚、8 は磨製石鎌である。遺物はバンケース 4 箱分出土。

**SC6328 (図 36) No.77** 円形の竪穴建物で SC6230 に切られる。西側 1/4 は方形プランの遺構との切り合いがあり、プランを確認できていない。径 6.1 m ほどで深さ 13cm が残る。南側の壁沿いには幅 0.8 から 1 m ほどの浅い溝状のくぼみがあり、その中には浅いピット状、筋状のくぼみが多い。中央には 1 m 大の隅丸不整形の土坑がある。ピットは 10cm から 20cm ほどの浅いものが多い。その中で 50cm から 70cm のものが壁から 1 m 前後の位置にあるが南東側で欠いている。遺物は埋土中から須玖 II 式を主体とする土器が出土し、7 のように中期までのものがある。遺構内の溝状のくぼみ SD6457 は須玖式 I 期に収まる。図示した他に高坏、支脚などがあり底部が目立つ。遺構の切り合いが多く混じりもあると考えられる。遺物は中期末までであるが、遺構は中期前半以降でとらえておきたい。10 は埋土出土、11 は SP6396 出土の石包丁。12 は SK6424 出土の紡錘車。

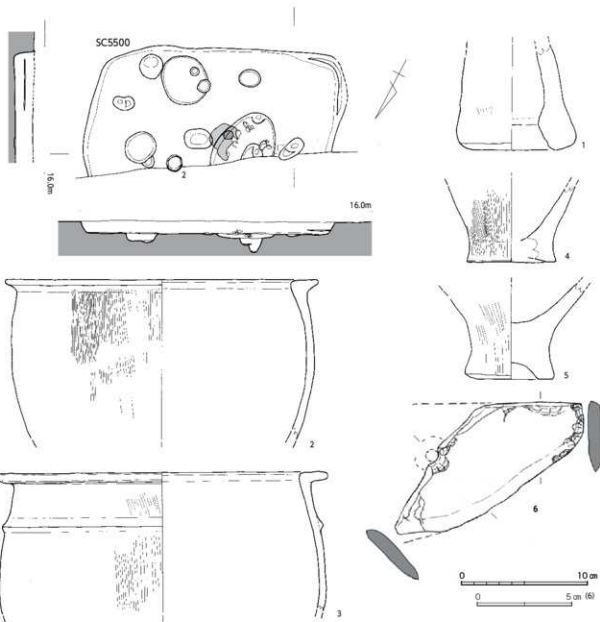


图 28 SC5500 (S=1/60) · 出土遺物 (S=1/3 · S=1/2)

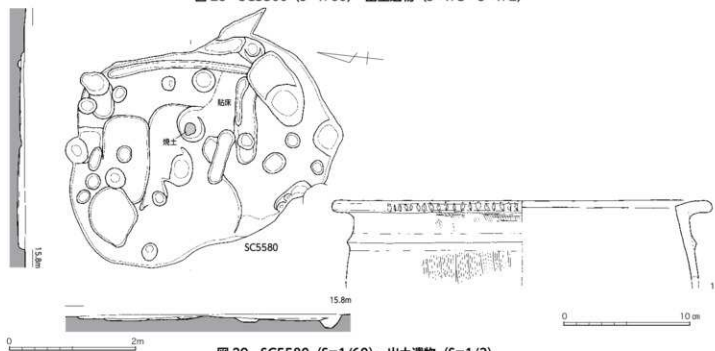


图 29 SC5580 (S=1/60) · 出土遺物 (S=1/3)

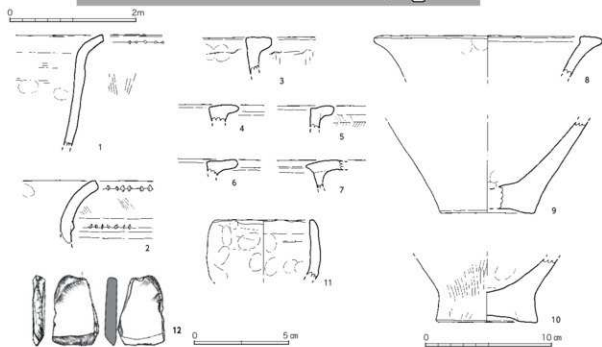
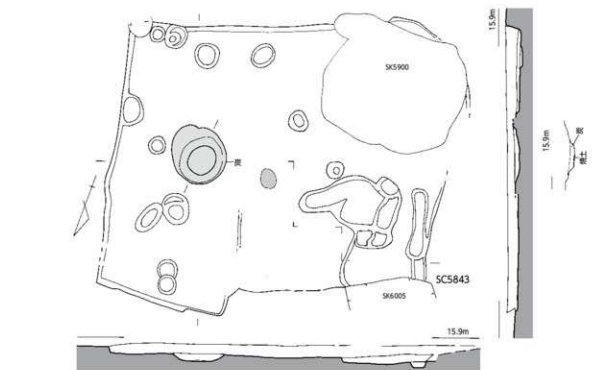


图 30 SC5843 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3・S=1/2)

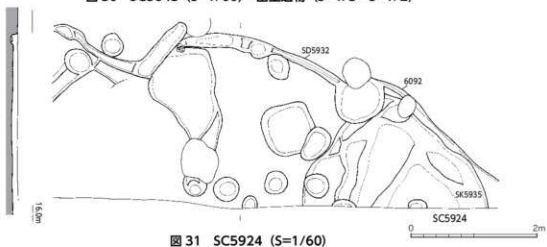


图 31 SC5924 (S=1/60)



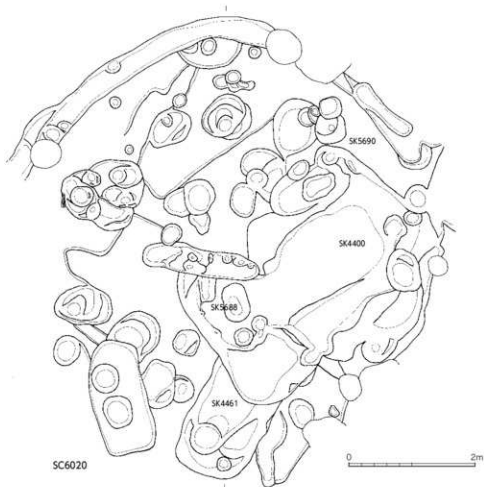
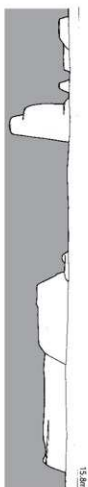


图 32 SC6020 (S=1/60)

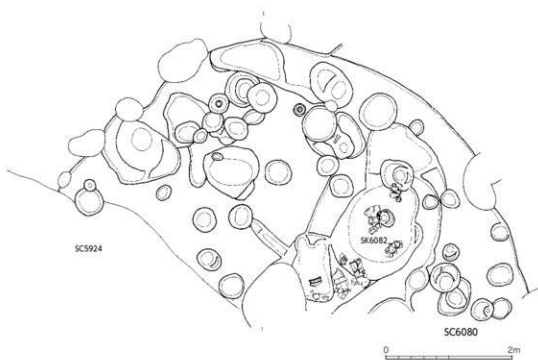


图 33 SC6080 (S=1/60)

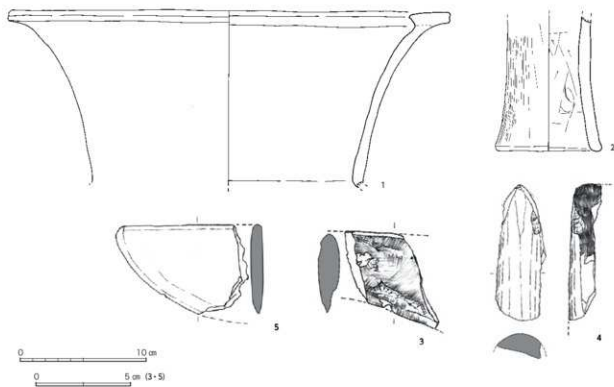
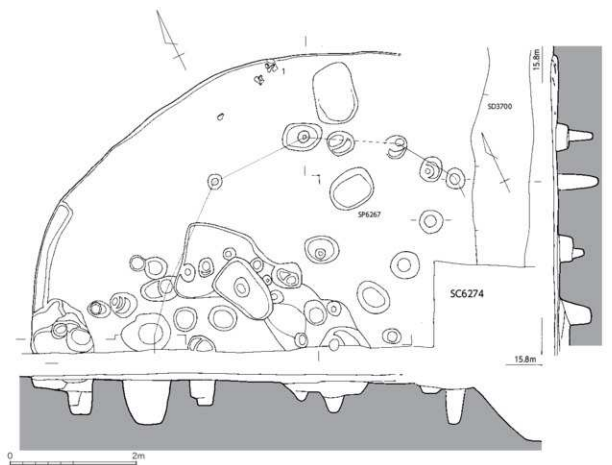


图 34 SC6274 (S=1/60) · 出土遺物 (S=1/3 · S=1/2)

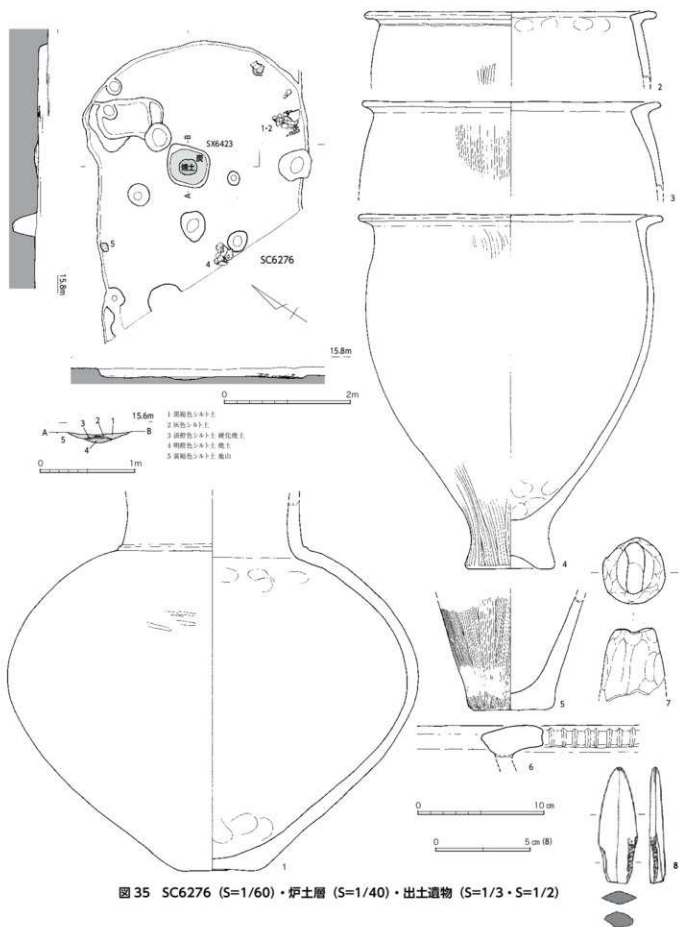


図 35 SC6276 (S=1/60)・炉土層 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3・S=1/2)

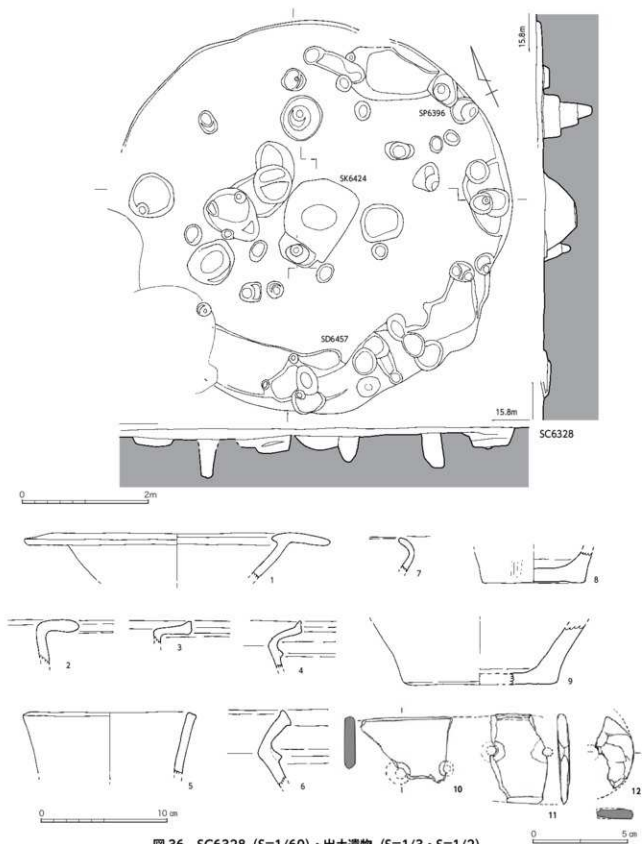


図 36 SC6328 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3・S=1/2)

SC6528 (図37) No. 68 SD3700、SC6274に切られる弧状のプラン1/2弱を確認した。円形の  
 竪穴建物と考えられ、径6.7mほどが想定される。深さ20cmが残る。床面はSC6274より5～10cm  
 ほど深い。床面で検出したピットのうち壁から1mから1.5mほどの位置に深さ50cmから70cmのも  
 のが見られ主柱穴と考えられる。遺物は埋土から少量出土した。1は小ぶりの逆L字口縁の甕、2  
 は器台。主柱穴となるピットからはわずかだが外反口縁の甕が出土している。3は瑯青石ホルンフ  
 エルスの石剣。埋土からは頁岩製扁平刃石斧片もある。遺物からは弥生中期初頭からやや新しい  
 時期が想定される。

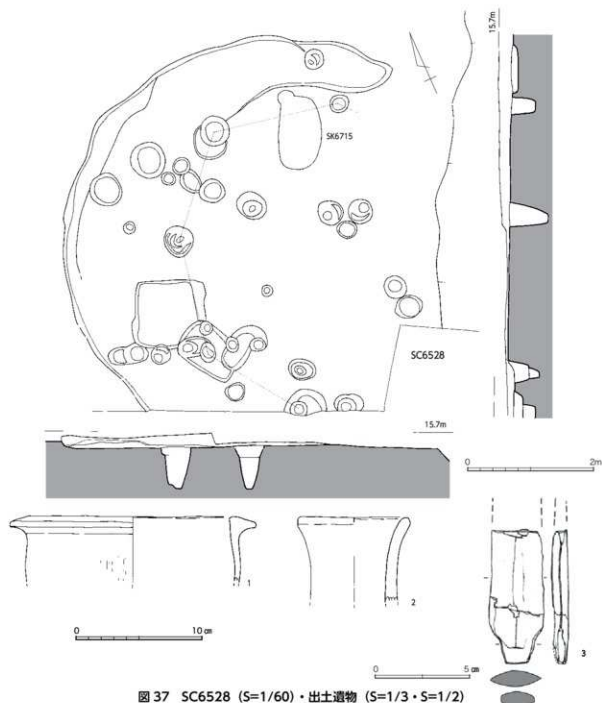


図37 SC6528 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3・S=1/2)

**SC6930 (図 38) No.56** 弧状のプランと炉 SX6931 から円形竪穴建物を想定したが支柱穴がみられず、長方形土坑等とも考えられる。西側は SD3700 に切られる。炉は径 1 m 弱、深さ 20 cm ほどのくぼみに炭化物を主とするシルト質土が溜りに焼土塊がみられる。また焼けた動物遺体 24 点が出土している。遺物は埋土から小片が出土した。1 から 5 は甕で 6、7 は底部。8 は石包丁、9 は頁岩製の挟入片刃石斧片。想定される時期は中期初頭から前半。

**SC6954 (図 39) No.62** 調査区北西端で検出した、一辺 3 ~ 3.4 m の方形竪穴である。支柱穴や炉は不明瞭で、竪穴建物かは不確かである。上面で検出した SC5642 と同一遺構で、重複して番号をつけている。掘方はコの字状に壁面に溝を巡らせる。1 は須玖式の壺口縁部。

**SC7000 (図 40・41) No.63** 調査区北西側で検出した大型の方形竪穴建物で、一辺 6 m を測る。東半分は他の遺構に切られており残存していない。建物中央付近、北側、南側に焼土、炭粒のまとも

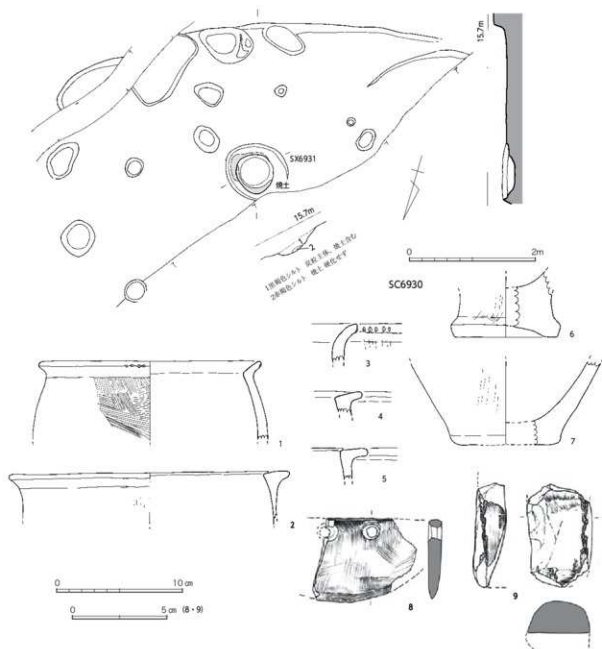


図 38 SC6930 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/6・1/3・1/2)

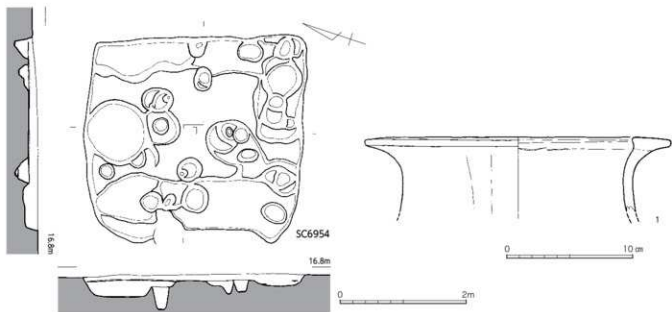


图 39 SC6954 (S=1/60) · 出土遺物 (S=1/3)

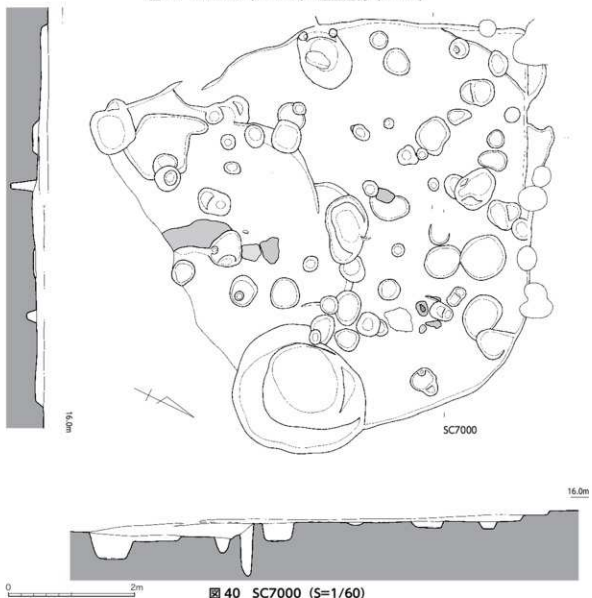


图 40 SC7000 (S=1/60)

りがある。中央の焼土は、炉跡かもしれない。支柱穴は不確かである。埋土から陸獣破片5点が出土した。1・2は甕の口縁、3～5は壺、6・7は器台、8は磨製石鎌か石剣の鋒。

**SC7046 (図42) No.63** 調査区北西付近で検出した、一辺3.8～4.1mの方形竪穴建物である。検出面から床面までの深さは20cmで、建物中央に炉を配する。炉SX7060から動物遺体6点が出土した。支柱穴は不確かである。1・2はL字形口縁の甕、3は底部。

**SC7047 (図43) No.63** 調査区北西側で検出した方形竪穴である。壁面の一部に溝を巡らせる。SC7000に切られており、残りはよくない。プランにやや歪みがあり、支柱穴も不明瞭で、竪穴建物かは不確かである。

**SC7048 (図44) No.63** 調査区北西側、下面で検出した円形の竪穴建物である。南側の壁面1/4程度が残る。建物中央にあたる箇所に焼土、炭粒の広がりがあり(SX7201・7112)、炉跡を推定できる。炉跡を中心とし、壁面までの長さから想定される建物の大きさは半径4m前後である。支柱穴は、配置と深さをふまえば、SP7202、SP7138で、4本支柱穴と思われる。1は甕の底部。

**SC7050 (図45) No.52** 調査区北西側で検出した方形竪穴で、深さ30cmを測る。SD3700に切られる。炉跡や支柱穴は不明瞭で、竪穴建物かは不確かである。

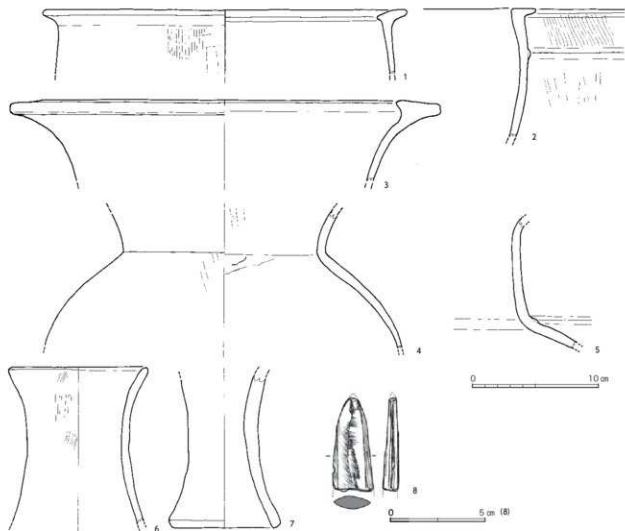


図41 SC7000 出土遺物 (S=1/3・S=1/2)



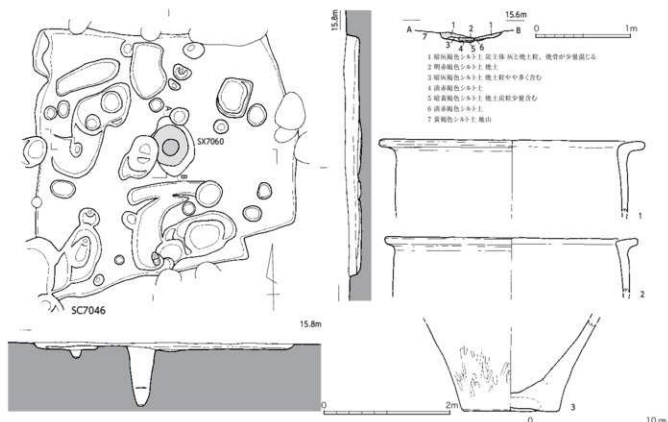


图 42 SC7046 (S=1/60)・炉土層 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

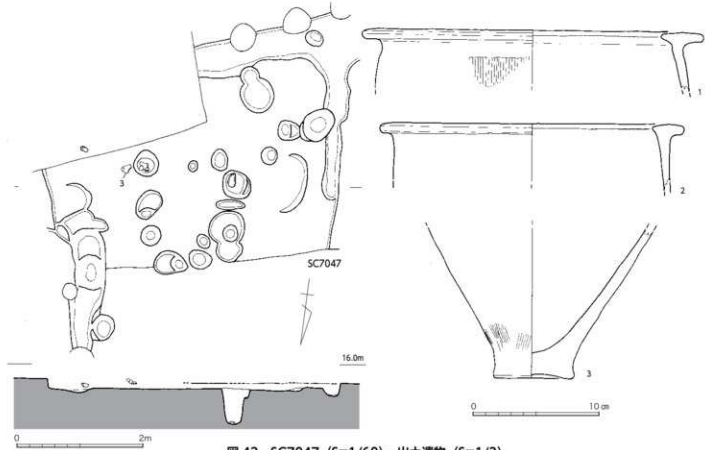
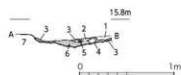
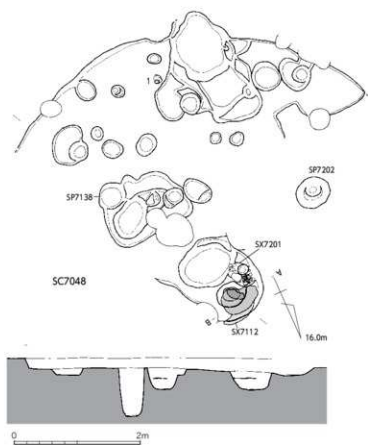


图 43 SC7047 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3)



- 1 埋藏層色(S=1)土
- 2 埋藏層色(S=4)土・灰土層
- 3 埋藏層色(S=9)土・灰土層、灰土層層に於ける
- 4 埋藏層色(S=9)土・灰土層、灰土層に於ける(少量含む)
- 5 埋藏層色(S=9)土・硬化した地上
- 6 埋藏層色(S=9)土・少量埋藏層を含む
- 7 埋藏層色(S=9)土・地山



図 44 SC7048 (S=1/60)・炉 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

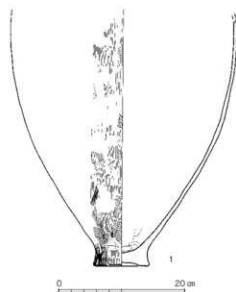
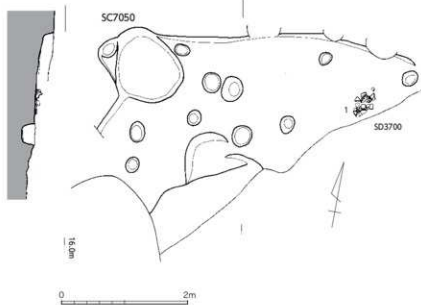


図 45 SC7050 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/6)

**SC7259 (図46) No. 35** 弧状の溝 SD5672 から円形堅穴建物を想定した。溝は最大で幅60cmほどで深さ10cm前後。円形にめぐる溝であれば径9mが想定され、その1/4弱が残る。溝の内側0.5～1mには深さ60～70cmほどのピットがあり、円形プランの中央では床面が焼けて赤変しており、主柱穴と炉が想定できる。プランの南側はSC3300に切られ、円形のSC7260には切られると考えられるが不確か。南側をめぐるピットはSC3300と7260床面に可能性のあるものが見られるが、どれが該当するか不確か。遺物は溝とピットから少量出土し須玖Ⅰ式～Ⅱ式に収まる。1はSD5672出土の鋤形口縁、2、3はSP3305出土で、2は赤色顔料を塗った甕、3は甕の底部。

**SC7260 (図47・48) No.26** 径12.5mほどの円形プランの堅穴建物で、本調査で検出した中でも目立つ存在である。南西側はSC2403、3300、3301に切られ柱穴群の下部のみが残る。暗褐色シルト質土を埋土とするプランを確認したが、床面までの深さは8cm前後と浅い。東半は円形プランが残るが、北西側は外縁部プランがやや内側に入り削平を受けていると考えられる。また検出面の中央から東には焼土、古墳時代中期の土器が広がり、SX2421として取り上げた。

床面東半では浅い溝2条がプラン外縁に沿ってみられる。プランに沿った1.2から2m内側には径60～80cmの大型のピットがあり、主柱穴であろうが切り合いもあり建て替えも想定される。その他にもピットは多く、一時期の柱を区別し難いが大略2m間隔の柱穴がめぐりそうである。中央には径5m、深さ5～10cmほどの平面円形の堅穴SK3415があり、さらに内側には径1.8m、深さ40cmほどの隅丸方形の土坑SK3335がある。SK3415はSC7260の内部遺構と考えられるが、両者とも判断つげがたい。ほかに溝と大型柱穴の間の床面では径20ほどの焼土面が見られた。遺構に伴うものか不確かである。床面下では外縁プランとSK3415の間に深さ60から70cmの大型土坑群が連なるようにめぐる。この土坑群は大型柱穴の掘方と重なるものとずれるものがあり、東側、北西側では溝状をなす。底にはピットが見られ、柱穴にかかわる掘方の集合と推定されるが、検討できていない。

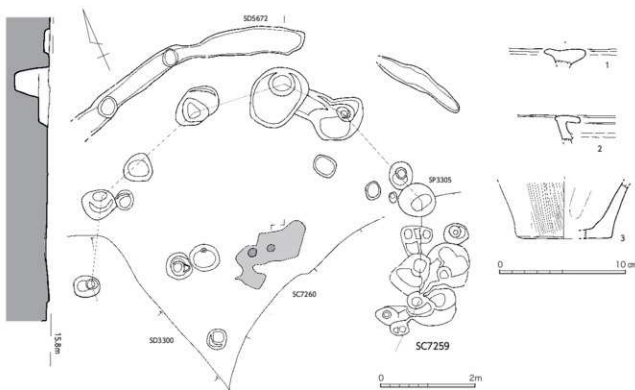


図46 SC7259 (S=1/80)・出土遺物 (S=1/3)

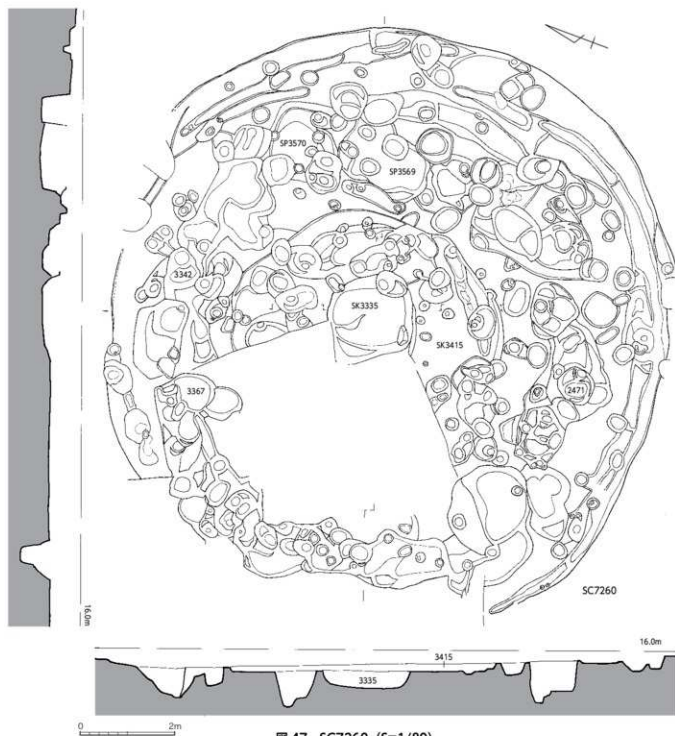


図 47 SC7260 (S=1/80)

遺物は床面までの埋土にはSX2421の土師器を多く含むため、柱穴の遺物を示した。出土量は多くない。1から8は大型ピット、9から12はSK3415出土で中期前半に収まる。13はSK3335出土の底部で、前末中初前後の壺か。堅穴建物の時期は中期前半と考える。石器は16、20が堅穴の埋土出土で、ほかはピットの埋土出土である。他に埋土から鉄斧(図264-7、表3)が出土した。

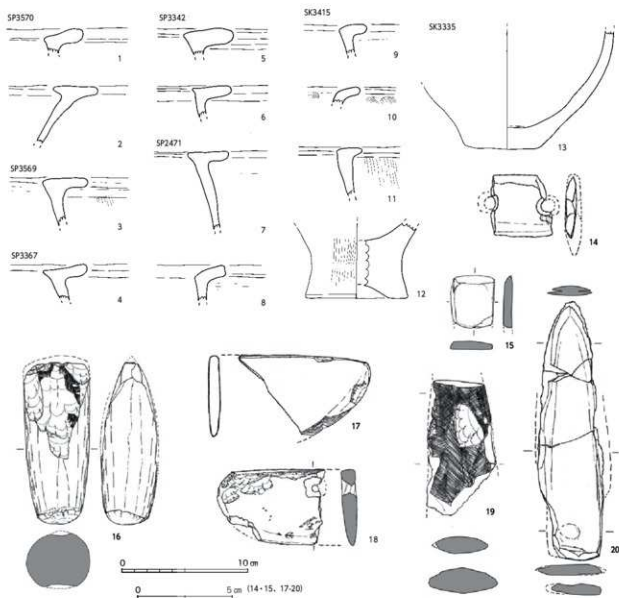


図 48 SC7260 出土遺物 (S=1/3・S=1/2)

### 3) 弥生時代後期

**SC918 (図 49・51) No.3** 方形の竪穴建物で東西に長く、3方にベッド状遺構を持つ。南側は削平されているが側溝 SD1023 が南端と考える。全体の規模は 6.75 m × 5.5 m、ベッド状内は 4.5 m × 4.3 m ほどで深さ 15cm ほどが残り、ベッド状と床はの高低差は 10cm ほどである。中央に径 50cm ほどのくぼみがあり壁の一部と周囲が赤変し灰と考えられる。主柱穴は東西の 2 穴と考える。壁際には西側と北側西寄り、南側に壁溝を確認した。ベッド状内の床面の灰周辺では硬化した部分を確認した。南壁中央内側には 80cm 大のピットがある。入口に伴うものか。ベッド内の四隅や北西隅、南東隅に大型のピットがあるが伴うものかは不明。遺物は埋土中から多く出土したが須玖 I、II の小片がほとんどで、その中から後期を中心に図示した。他に粘土塊 3 点などがある。1 から 4 はくの字口縁の甕で 5 が底部。6、7 は複合口縁の壺、8、9 は高坏、11 は小型の鉢、12 は手捏の小型品。13 は中期の瓢型土器だが床面で 1/2 が出土した。14 は葦青石ホルンフェルスの石包丁ですり減りが著しい。他に磨製石鏃、花崗岩製の台石がある。弥生後期中頃。

**SC953 (図 50・52) No.41** 調査区北壁中央で検出した方形竪穴建物である。検出面から床面ま

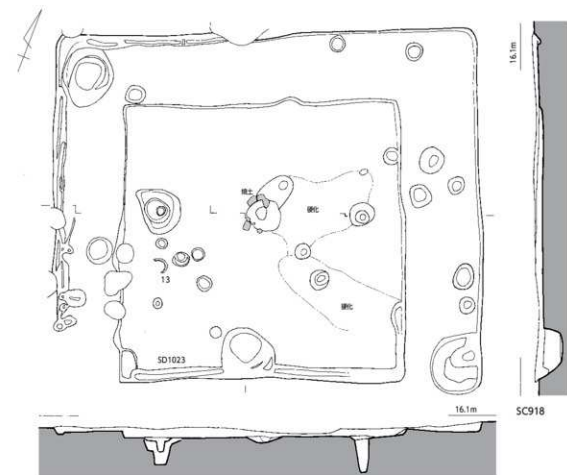


図 49 SC918 (S=1/60)

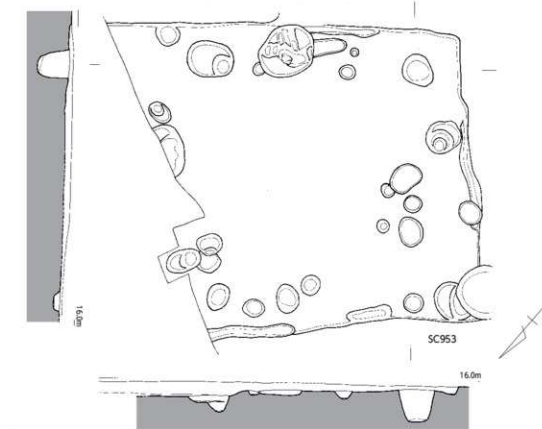


図 50 SC953 (S=1/60)

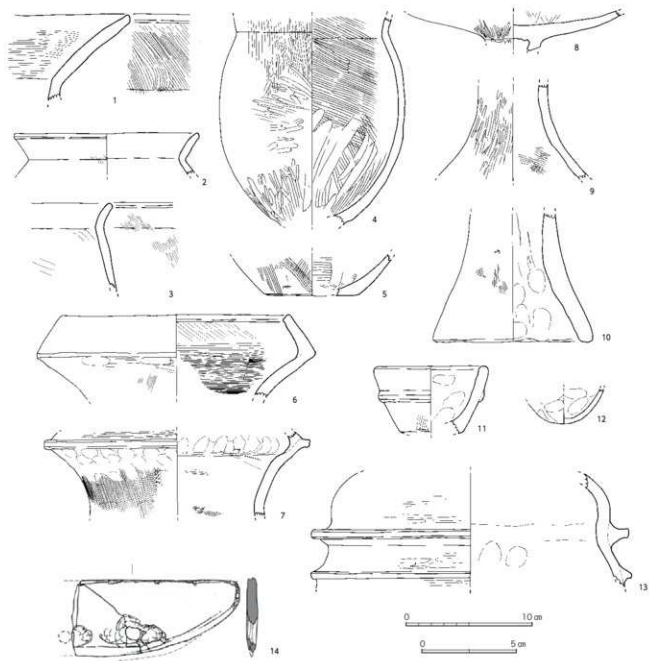


图 51 SC918 出土遗物 (S=1/3 · S=1/2)

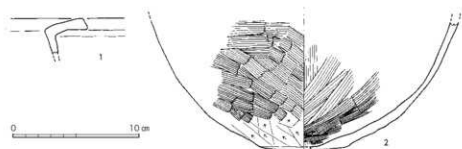


图 52 SC953 出土遗物 (S=1/3)

での深さは10cm程度である。西壁は他遺構に切られて残らない。主柱穴や炉は不明確である。東・南壁の一部に壁溝を配する。1はくの字口縁の甕、2は壺の底部で凸レンズ状を呈する。このほか、ガラス玉(図261-41)が出土。弥生後期後半。

**SC954 (図53・54) No.31** 調査区北壁際中央で検出した方形竪穴建物である。検出面から床面までの深さは5～10cm程度を測る。北東壁付近を中心に炭と焼土が面的に広がる。建物南西側は他遺構に切られ、かつ検出面がほぼ床面であることから、プランを捉えることができていない。1～4は複合口縁壺、5～8は甕である。遺物は薄パンケース1/2箱出土した。下大隅式期。

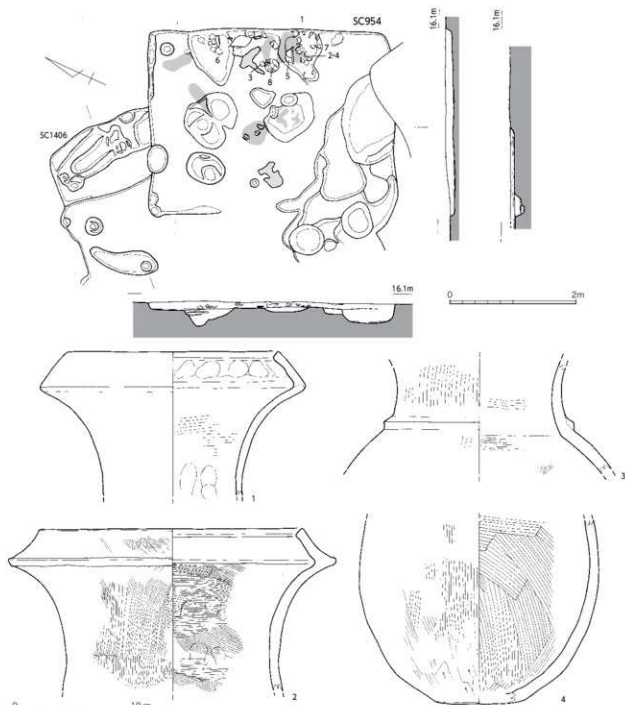


図53 SC954 (S=1/60)・出土遺物(1) (S=1/3)



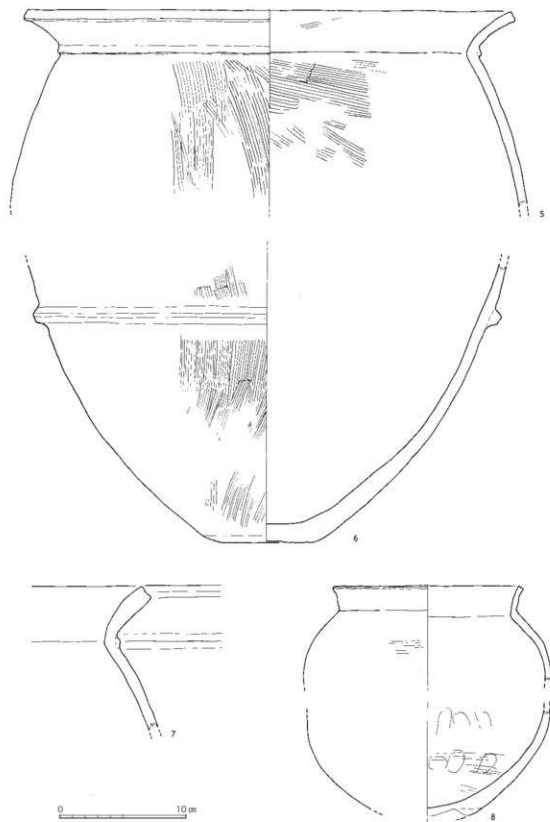


图 54 SC954 出土遺物 (2) (S=1/3)

**SC1040 (図 55) No.31** 一辺 5.8 ~ 6m を測る方形竪穴建物を想定したが、建物内に複数の竪穴建物の切り合いがあり、判断が難しい。壁のラインをふまえれば、少なくとも 2 棟以上の切り合いとわかる。

**SC1120 (図 55) No.32** SC960 ほか複数の竪穴建物の切り合いで判断が難しい。断面で示した 2 本主柱穴、中央に炉を配する方形プランを推定した。一辺 4.4 ~ 4.8 m を測る。北東側の壁は残っていない。北壁隅、西・東壁に壁溝を配する。炉は焼土・炭粒を含む灰褐色シルト土で、厚さ 5mm 程度である。建物内北西の一部に焼土が広がる。遺物は薄パンケース 1/2 箱分出土した。埋土の遺物は鋤型口縁など中期の遺物がいくつかみられるが、時期を特定しにくい小片が多い。床面付近出土遺物には、複合口縁の破片がある。

**SC1800 (図 56・57) No.15** 平面長方形の竪穴建物で 6.5 × 4.9 m の規模。東南隅で SC2007 に切られ、北西隅は SP1780 に切られる。南辺以外の 3 方に幅 90cm ほどのベッド状を持ち、4 方に壁溝がめ

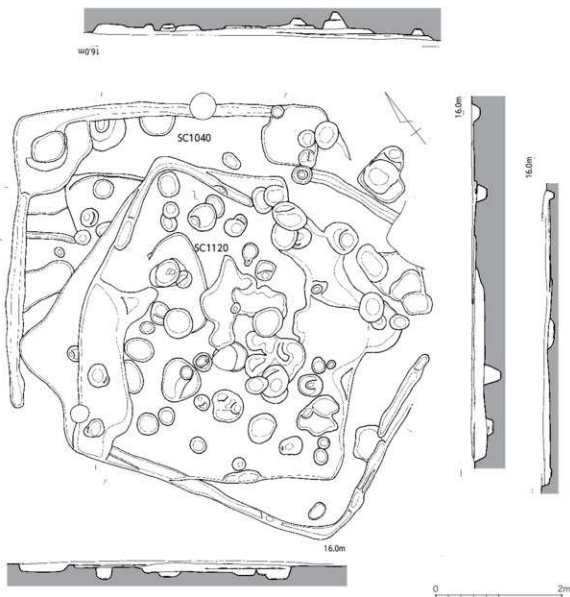


図 55 SC1040・SC1120 (S=1/60)

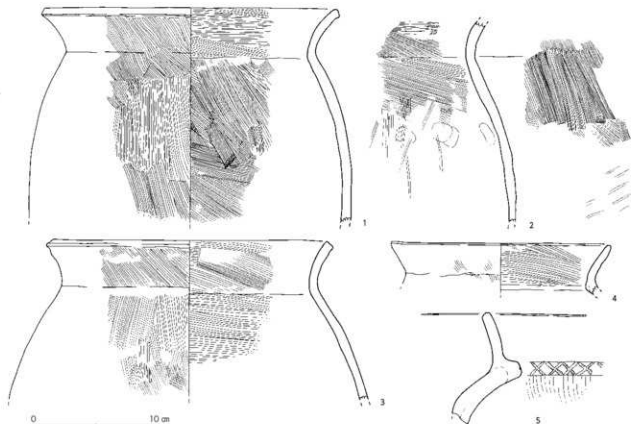
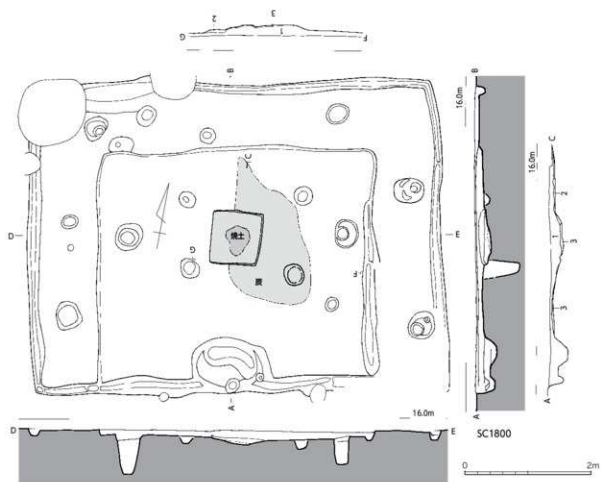


图 56 SC1800 (S=1/60) · 出土遺物 (1) (S=1/3)

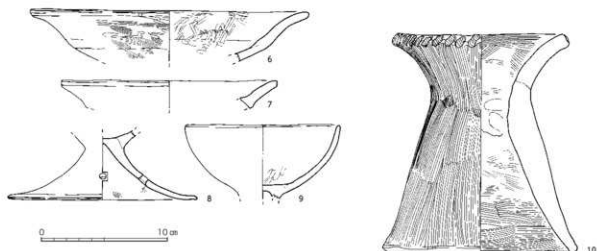


図 57 SC1800 出土遺物 (2) (S=1/3)

ぐる。ベッド状までは1~5cmが残り、ベッドと床面との比高差は7~10cmほどである。ベッドは盛り土によると考えられる。ベッド内側は東辺に側溝がある。東西断面に示した2穴が主柱穴と考えられる。南壁沿い中央には内側が深い土坑があり入口か。床面には中央から東よりに炭化物が広がり厚いところで3cmほどである。中央部には一辺80cmの正方形の浅い掘りこみに炭化物が広がり、その中央下には40×50cmの範囲に焼土面がみられる。正方形の区画が明瞭で、一部炭化材で区切った様な跡がある。囲炉裏状を呈す。断面の東側はやや下がるが、下層遺構の堆積の影響で後にくぼんだ可能性もあろう。正方形区画の周りには丁度対応するように4つのピットがあり、炉に伴うものか。

埋土中の遺物は弥生中期のものが多く、床面近くに後期の土器がみられる。1から4はくの字口縁の甕で屈曲がやや不明瞭。5は二重口縁の壺片、6、7は高坏か。8は鉢等の脚、9は台付鉢。10は器台。この他に小型の粘土塊5個、前期甕が少量ある。弥生後期中頃から後半。

**SC2403 (図 58・59) No.37** 方形の堅穴建物。大型円形堅穴建物SC7260の西側を切り、南西をSC3301、西をSC3300に切られる。東隅はSK3335と重なり切り合い、プランを確認できなかった。SK3335は平面1.7m×1.7mほどの丸みをおびた方形の土坑で深さ40cmほどが残り、少量の弥生土器片中に前末中初の壺が1点出土している。南側は南西隅が残り、壁溝状の溝、明瞭ではないものの直線的な落ちがみられプランを確認できる。その規模6.1m×4.8mほどで床面までの深さ30cm。北東壁、南西壁沿いには幅1mほどのベッド状遺構を設け、北東壁側の中央部は1mほど途切れる。南西側は掘り過ぎでプランが不明瞭なまま図示している。中央には95cm大の土坑があるが炭化物の集中や焼土面は見られない。北側ベッド際に幅40cmほどの焼土の広がりがある。南東、北西の壁際には壁溝が見られる。北西壁中央には壁際に平面105cm×80cm大の土坑SK3336があり、25cmほど浮いて甕の胴部2が出土した。西壁のプランより少し外に出るため別遺構の可能性もあるが、遺物の時期は近くSC2403の施設として示した。床面のピットは断面を示したSP3332が深めだが、4穴であれば他は深さ20~30cmで浅めである。2穴であれば北東壁際中央と、床より下で検出したSP3329、3526が深く対応する。埋土出土遺物は弥生中期の甕が多いが、床面直上出土で後期の土器が見られ図示した。北側のベッド状裾付近床面で石包丁4個5~8が出土し注意される。1は複合口縁壺で外面は刷毛目の下に叩き痕がみられる。破片からの復元。2はSK3336出土の大型品の胴部下半でレンズ底。3は壺。4は粘土塊で礫を多く含む。西側ベッドから不明棒状鉄器、埋土から管玉(図261-28)が出土している。床面の土器から弥生時代後期中頃。

**SC3140 (図 60) No.33** 平面長方形の堅穴建物で、北側は SC1670 ほか複数の遺構に切られて不明瞭である。東西長 5.7m を測る。東西両壁にベッドがあり、ベッドまでの深さ 10cm 前後、床面までの深さ 20cm 前後を測る。南壁中央に出入口施設用と思われる土坑、その両側に壁溝がみられる。建物中央には炉があり、径 30cm 程度の焼土を確認した。断面で示したベッド際の柱穴 2 つが主柱穴に相当すると考える。ベッドをもつ長方形堅穴建物 SC1173 や SC1800 と方向が共通する。遺物は薄パンケース 1 箱分出土した。小片が多く時期決定の根拠を欠くが、建物の構造や方向をふまえれば、SC1800 などと同時期の弥生後期後半が想定される。

**SC3200 (図 61) No.43** 隅丸方形プランで南北軸長 5.4 m 以上を測る。北側を SC3150 に切られる。付近は複数の遺構が切り合い、プランの把握が難しかったため、付近全体を 3052 の番号をつけて段下げしている。西壁と南壁は壁溝が二重に巡る。北・東壁はプランを捉えきれなかった。主柱穴は不確かである。建物中央付近に床面と同じレベルで炭と焼土の広がりが見られることから、炉跡の可能性もある。また、建物中央北寄りにも、床面より 10cm 前後浮いた焼土のまとまりが 2 か所ある。上層 (段下げ) でシカ、イノシシの焼骨片が出土した。遺物は薄パンケース半分程度で、城ノ越から須玖Ⅱ式の土器を含む。

**SC3363 (図 62) No.38** 方形の堅穴で南西隅部以外は SC3301 の床面で検出した。平面 3.77 m × 3.1 m、深さは最大で 38cm が残る。南半の壁沿いには溝がめぐる。床面の中央から南側には炭化物が薄く広がり、一部木材が残る。中央の土坑 SK3586 は炭、灰を主体とする黒灰色シルト土が埋土で焼土粒を少量含む。床の変色は見られない。深めのピットはあるが主柱穴としては不確か。遺物は埋土から弥生前期から中期の遺物を主とする。北半部で複合口縁片など数点の後期の土器があるが SC3301 からの混入の可能性もあり時期は決めがたい。南壁際で鉄斧 (図 263-1) が出土している。弥生中期～後期。

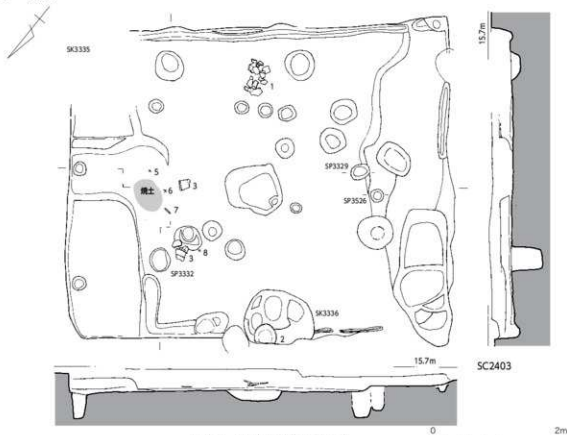


図 58 SC2403 (S=1/60)

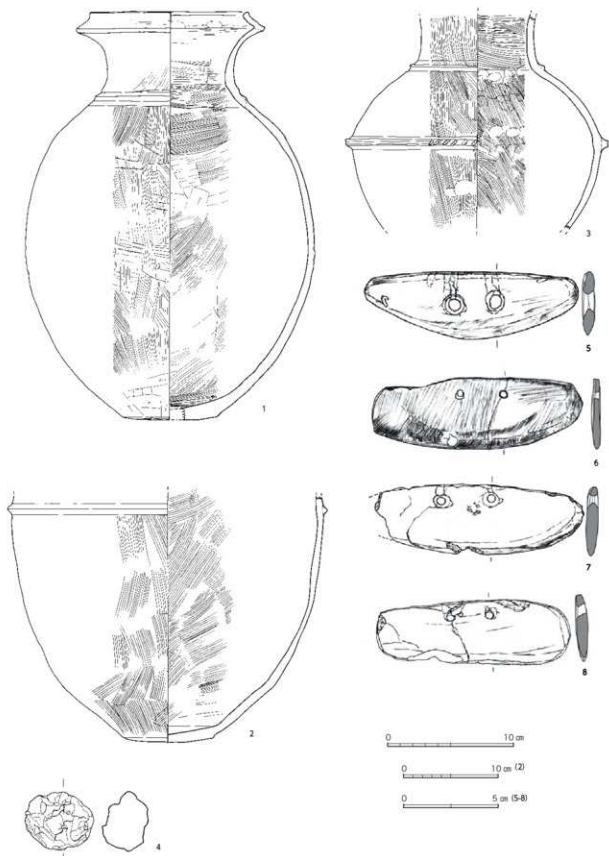


图 59 SC2403 出土遺物 (S=1/3 · 1/4 · 1/2)

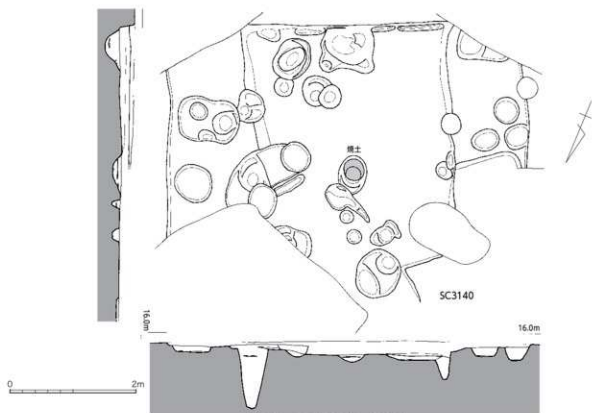


図 60 SC3140 (S=1/60)

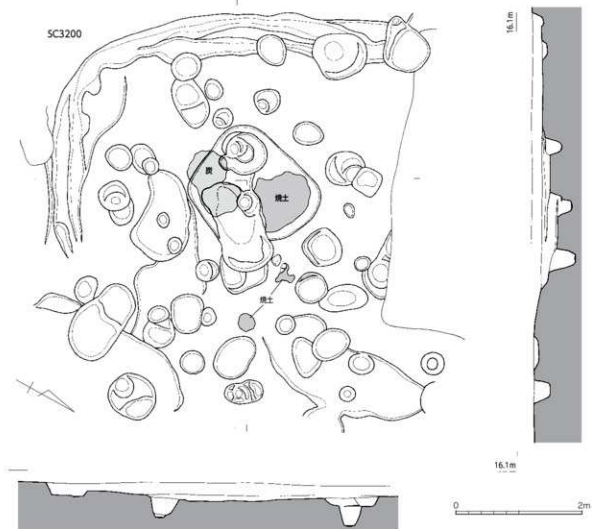


図 61 SC3200 (S=1/60)

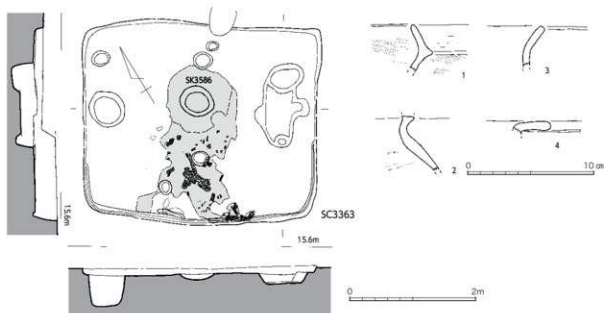


図 62 SC3363 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3)

**SC3770 (図 63) No.54** 長方形プランで、東西軸長 3.3m、南北軸長 4.4m 以上、深さ 5 ~ 15cm を測る。SD3050、SD3700 に切られる。プランと規模をふまえれば堅穴建物の可能性もあるが、主柱穴やが跡は不確かである。遺物は薄パンケース 2 箱分出土した。1 ~ 4 は甕、5 は鉢である。弥生後期前半から中頃。

**SC4142 (図 64・66) No.47** 方形の堅穴建物で平面 4.5 × 4.4 m、深さ 15cm が残る。三方の壁際の一部に溝がみられるが一周しない。中央部には炉と考えられる円形土坑 SX4246、4231 があり、いずれも底から浮いた状態で焼土が広がる。このほかに埋土中に焼土が広がる箇所があった。床面で検出したピットでは北西壁と南東壁沿い中央の SP4252 と 4254 が揃って深く、主柱穴と考えられる。またこの両壁の外側は壁に平行して幅約 1m ほど浅い方形のくぼみがあり、北東壁の延長とプランが揃う。この部分は本堅穴のベッド状遺構の痕跡と考えられ、2 本の主柱穴とも配置が整合的である。床面に接して弥生後期の甕が出土している。埋土出土土器は須玖式が主で城ノ越式も目立つ。その中から後期の遺物と床面の遺物を示す。1 は中央部出土のく字口縁の鉢。2 から 6 は埋土出土。2、3 はく字口縁の甕、4 は直口の器面が荒れる。5 はレンズ底の底部、6 は同じく甕。7 は北東側でつぶれて径の 1/4 が出土したレンズ底の大型の甕。8 は中央部出土の甕。床面出土土器から後期中頃。

**SC6010 (図 65・67) No.56** 長軸長 6.5 m、短軸長 4.8 m の長方形の堅穴建物。SD3120 に切られる。コの字状のベッド状遺構、主柱穴 2 本をもつ。西側主柱穴は SD3120 に切られる。主柱穴の間、建物中央に炉を配する。建物南東側は壁溝が残る。調査時点では、ベッド上のプラン、ベッド下のプランを別の遺構と誤認し、4147、6870、6862 の遺構番号を付して遺物を取り上げていた。いずれも同じ堅穴建物であるため、6010 で報告する。1 は下大隈の甕で、床面で出土した。

**SC6380 (図 68) No.58** 方形の堅穴建物で中央を SD3700 が縦断する。南北 5.2 m、東西 6.1 m ほどの規模で深さ 10cm が残る。東壁は南側が短く、ベッドなどがあった可能性もあろう。東壁沿いには幅 40cm ほどのやや幅広の溝がみられる。主柱穴は SD3700 斜面で検出したピットが深めで、4 本柱か。遺物は少なく埋土から須玖式の破片が出土している。その中で図示したやや丸みをおびた底部が遺構の時期に近いと考えられる。弥生時代後期前半以降。



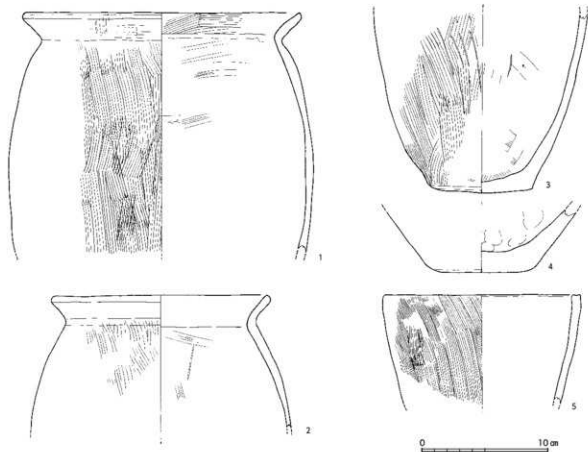
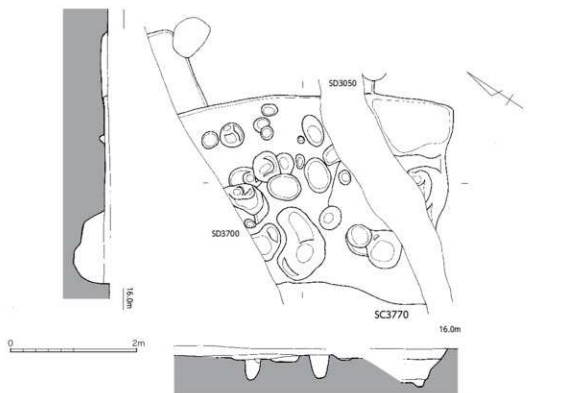


图 63 SC3770 (1/60)・出土遺物 (S=1/3)

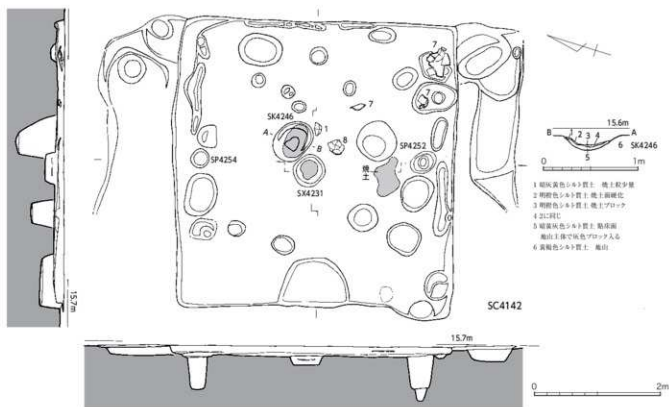


図 64 SC4142 (S=1/60)・炉土層 (S=1/40)

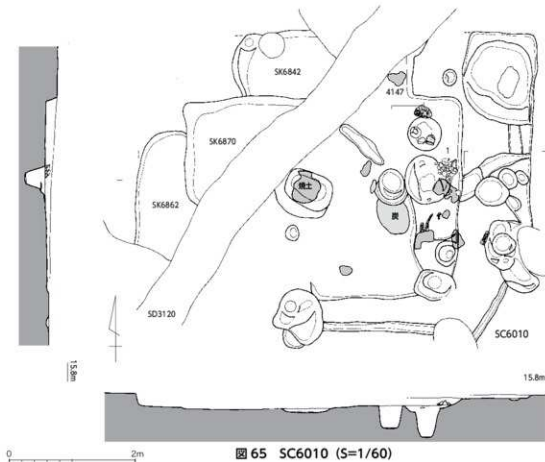


図 65 SC6010 (S=1/60)

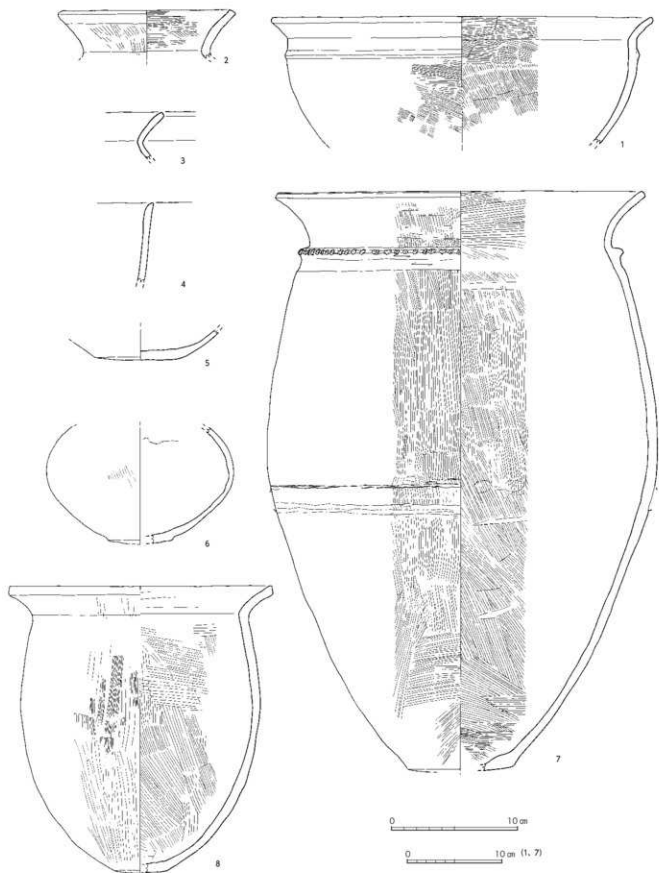


图 66 SC4142 出土遺物 (S=1/3 · S=1/4)

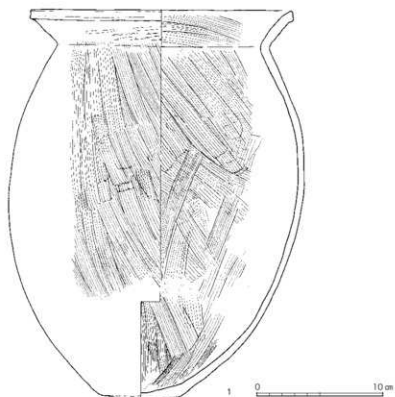


图 67 SC6010 出土遺物 (S=1/3)

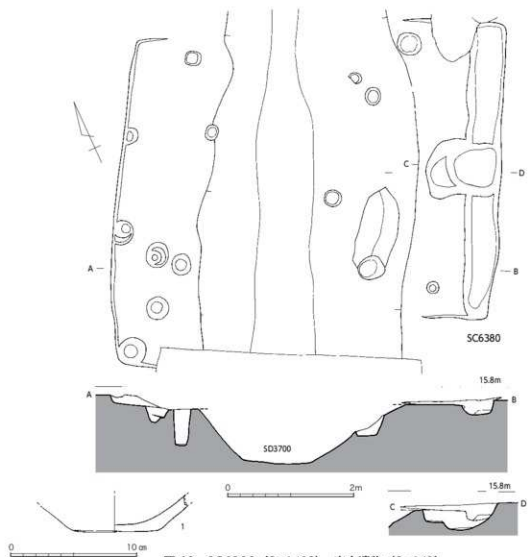


图 68 SC6380 (S=1/60) · 出土遺物 (S=1/3)

## (2) 土坑

### 1) 弥生時代前期

**SK034 (図 69) No.2** 平面 195 × 95cm の長方形で、深さ 22cm。埋土は暗褐色土で明橙色の粒～小ブロックを含む。コンテナ 1 箱土器片が出土し、下部で目立つ。甕は外反口縁 2 と小さなし字状を呈す 3、4 がある。前期末か。粘土塊が 15 点ほどあり、大きなもので 7 × 4 cm ほど。スサ圧痕がつくものもある。

**SK721 (図 70) No.13** 隅丸長方形の土坑で 120cm × 80cm、深さ 40cm が残る。西側を SC322 に切られる。埋土は上部が暗褐色～黒褐色土で底から 15cm 浮いたレベルに前期後半の土器片がまともって出土し、その下に薄く焼土の広がりが見られた。1 は口唇部上下端に刻目を施し、頸部外面は研磨後に刻線で縦方向に 2 本、そこから横方向に多くの横線を短く描く。内面には貼り付け突帯がめぐる。2 は無軸羽状文の壺。3 から 5 は鉢状。

**SK1398・SK1536 (図 71) No.13** 1398 は SC322 南の包含層 1386 の掘削後に確認した竪穴で方形区画の一面が残り、壁際に壁溝が見られ竪穴建物の可能性があるが南西にプランが確認できなかった。深さは 20cm。

SK1536 は SK1398 の床面で確認した竪穴で、深さ 10cm ほどの段下に平面楕円形で 160 × 130cm、深さ 40cm ほどを測る。壁はすり鉢状で西壁際上部に 1 個体の甕がつぶれた状態で出土した。1 は外反口縁の甕で底部を欠く。

**SK1597 (図 72) No.24** 長楕円形の土坑で長さ 115cm、幅 45cm ほどで、深さ西側で 14cm、東側の深い部分で 34cm が残る。西側で壺の大型片が出土した。東側は別遺構の可能性もある。1 は 1/5 からの作図。外面は全面研磨で下に刷毛目が見られる。前期後半。

**SK1734・SK1564 (図 73) No.4** SK1734 は SK1564 に切られるビットで上部で前期土器の壺片 2 から 4 が出土した。2 は刷毛目ののち研磨、3 は有軸羽状文を刻す。1/3、1/4 からの復元。前期後半。SK1564 SC1851 を切るビット状の遺構で掘方上部に遺物がまともって出土した。底は 3 基のビットがあり、その切り合いの可能性もある。1 は弥生後期の甕で各位置で 1/2 から 1/4 が残る。

**SK1870 (図 74) No. 6** SC1800、2007 に切られる。平面不整長方形で 190cm × 110cm、深さ 62cm

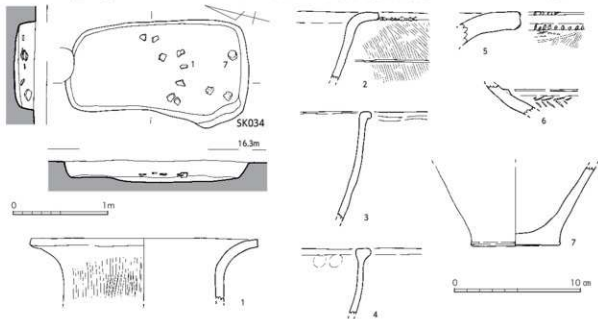


図 69 SK034 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

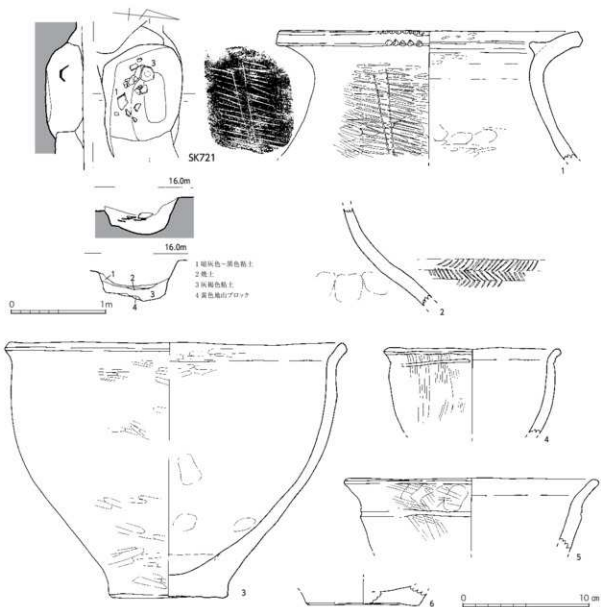


图 70 SK721 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

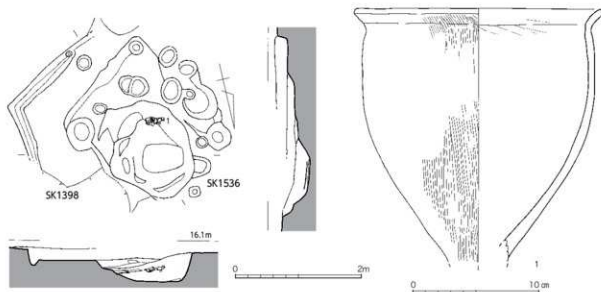


图 71 SK1398・1536 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3)

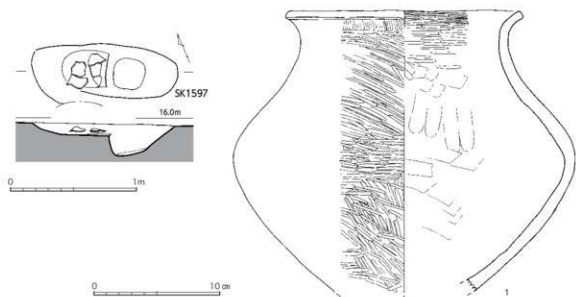


图 72 SK1597 (S=1/30) · 出土遺物 (S=1/3)

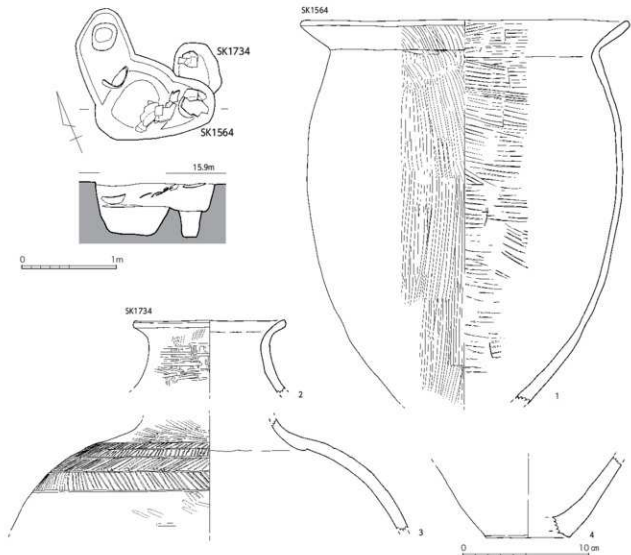


图 73 SK1564 · SK1734 (S=1/40) · 出土遺物 (S=1/3)

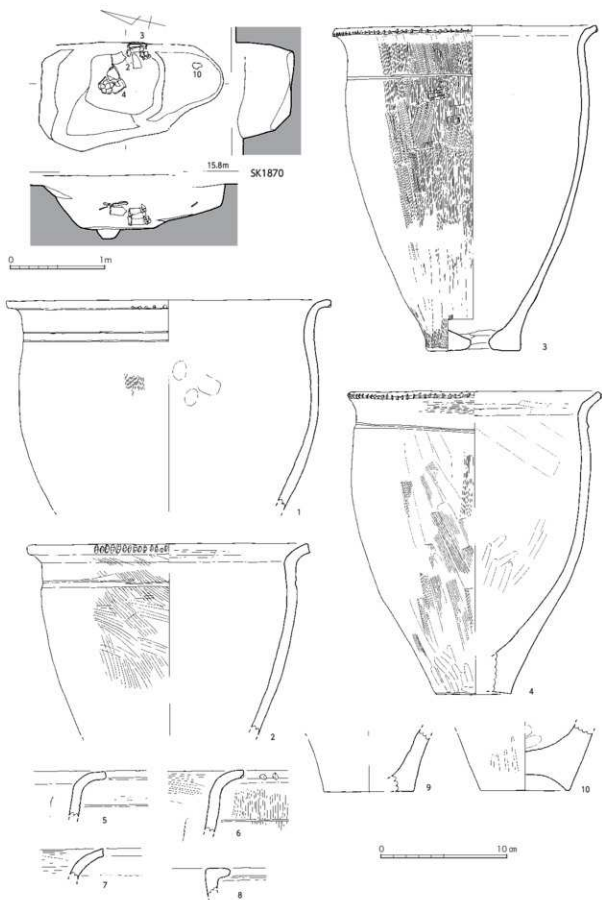


图 74 SK1870 (S=1/40) · 出土遺物 (S=1/3)



が残る。埋土下部は床上10cmほどで薄い炭化物層が広がる。その上は灰茶褐色の粘質土で炭粒、焼土粒を含み、下は淡灰褐色粘質土で床面にも一部炭化物がみられる。炭化物層のやや上で甕4がつぶれた状態で出土し、下では東壁に床から張り付いた状態で甕2、3が出土した。1から4は甕。3は底に焼成後の穿孔がある。1、5～9は埋土出土。埋土の8は混じりか。ほかに須玖1片がある。

**SK2314 (図 75) No.7** 楕円形のピットで西側をピットに切られる。60×40cmほどの大きさで深さ50cmが残る。外反口縁の甕1個体が横倒して出土した。1は口縁下部に刻目を施し口縁下に突帯を持つ。径の2/3が残る。周囲には前期の遺物が出土するピットがみられる。

**SK2399 (図 76) No.25** 隅丸方形の竪穴で平面260×235cm、深さ10～20cmを測る。西寄りに炉があり竪穴建物とも考えられる。炉は50×60cmの範囲がくぼみ、焼土がたまる。炉上端より低い東側は掘り過ぎの可能性がある。外反口縁の甕1から4が出土した。1は口唇部全面刻みで刷毛目が細かい。4は口唇部を面取りする。前期。

**SK2575 (図 77) No.15** 浅いくぼみ状に土器片が出土した。焼土が混ざる。深さ11cm。南側は遺構面に途切れ、またピットに切られる。プランは不明確だが、縦長の楕円形が想定され、長さ190cm、

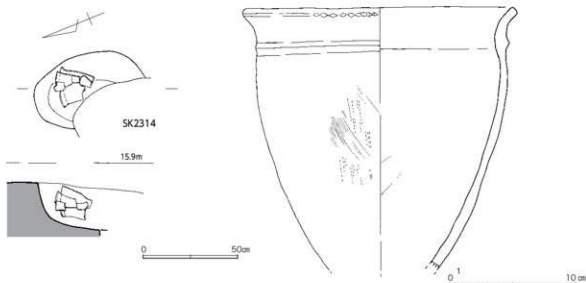


図 75 SK2314 (S=1/20)・出土遺物 (S=1/3)

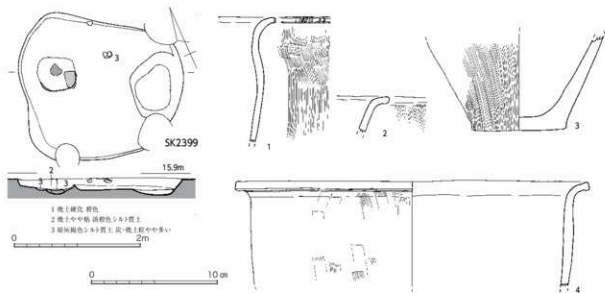


図 76 SK2399 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3)

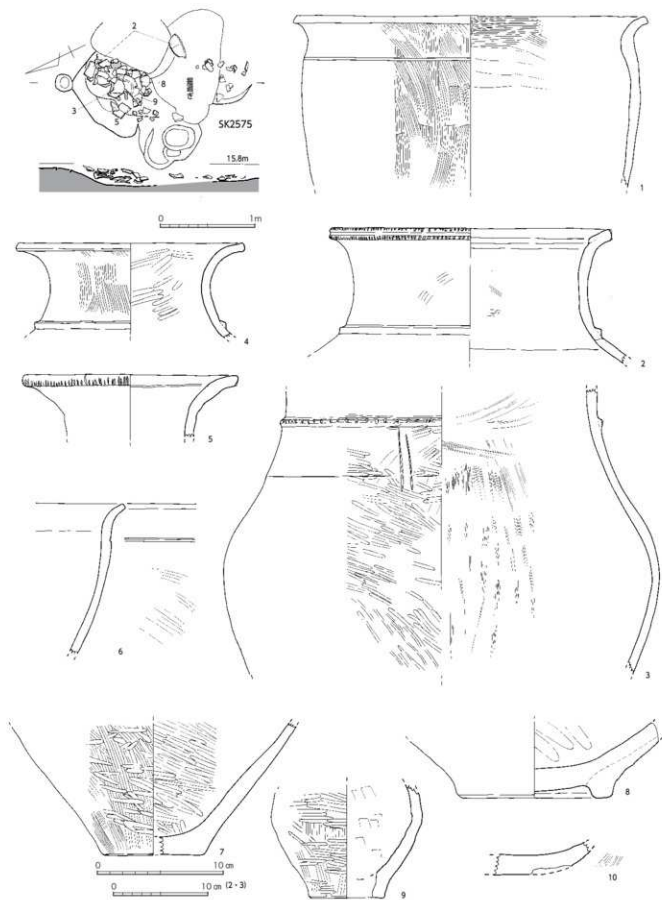


图 77 SK2575 (S=1/40) · 出土遗物 (S=1/4 · S=1/3)

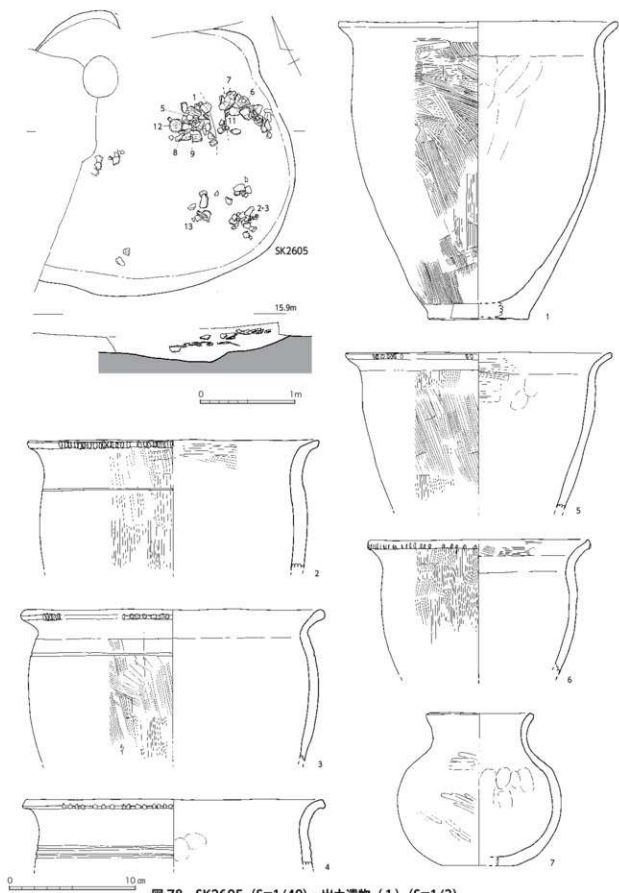


图 78 SK2605 (S=1/40)・出土遺物 (1) (S=1/3)

幅80cmが残る。1、4、7、10は北側土器群の下からの出土。6は南側の出土。1、6は外反口縁の甕。2、3は大型の壺、4、5、9は壺で7、8、9は壺の底部。壺が集まる遺構は少ない。

**SK2605 (図78・79) No.38** 径3mほどの方形に近い円形プランで深い箇所40cm残る。断面部分以外は掘り過ぎており下端は不明で、くぼみ状の底が想定される。東側に床から10cmほど浮くものの傾斜に沿って遺物が出土した。1～6、8～13と外反口縁の甕が多い。7は小型壺で1/5からの復元で器面の荒れが著しい。14は無軸羽状文の壺片、15は研磨調整の鉢。16は丁寧な研磨調整の石剣。また、動物遺体片、地山から縄文期の石斧(図267-53)が出土。前期後半。

**SK3148 (図80) No.34** 不整長方形の土坑で長さ195cm、幅110cm、深さ65cmを測る。北、東壁は直に立つが、他は段があり、底は東よりにある。南東側はピットに切られ、別遺構との切りあいでプランを確認できていない。中位で土器の大型片がまとまって出土し、その下の床から15cmほど上で薄い炭化材がいくつか見られ、周辺に焼土粒が多い。1から4は甕。5、6は同一個体と考えられる壺で無軸羽状文を施す。7は大型壺。8は緑色片岩を楕円形に成形し外縁が摩耗する。石錘として

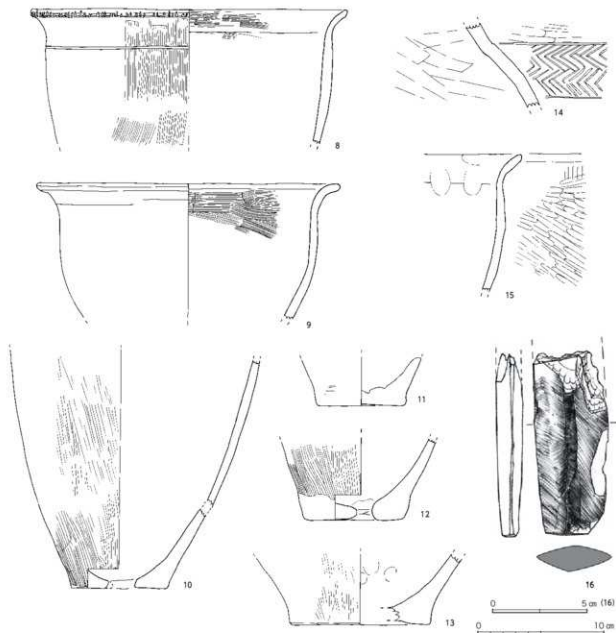


図79 SK2605出土遺物(2) (S=1/3・S=1/2)

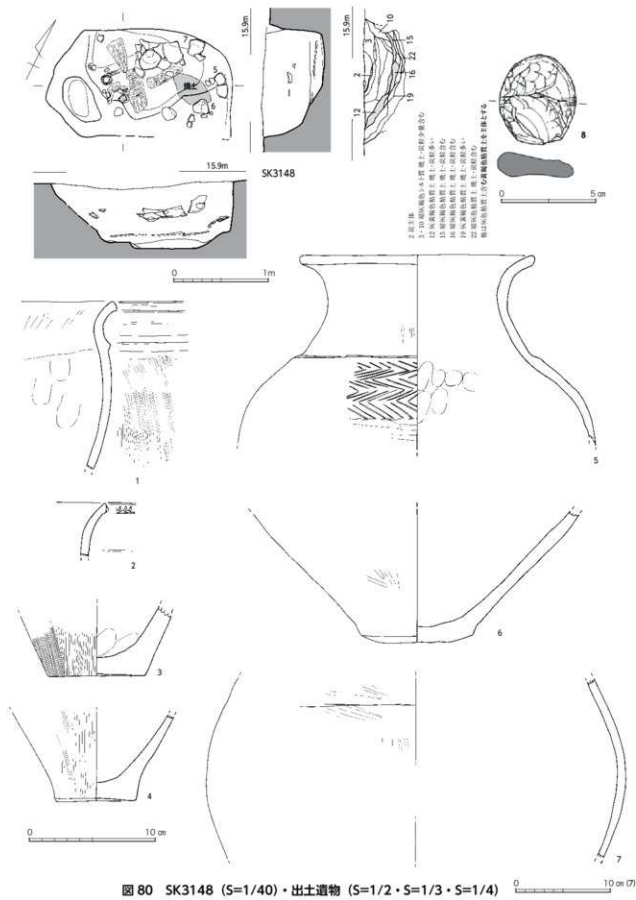


圖 80 SK3148 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/2・S=1/3・S=1/4)

使用か。前期後半。

**SK3204 (図 81) No.32** SC1460 の下面で検出した平面隅丸方形の土坑で、長さ 160cm、幅 95cm、深さ 25cm を測る。床面から 2 個体以上の外反口縁の甕が出土した。

**SK3740 (図 82) No.43** 略平面円形の竪穴で南北 130cm、東西 150cm、深さ 80cm が残る。土層確認トレンチが縦断し南側プランを失う。断面フラスコ状をなし底は南北 140 +、東西 165cm で貯蔵穴とされる遺構である。埋土は黄茶褐色粘質土を主体とし、炭粒、一部焼土を含むが際立ったものではない。遺物が少ない。1 は外反口縁の甕。2 は粘土塊で一面は平らである。

**SK4133 (図 83) No.35** 平面長方形で 160 × 110cm、深さ 40cm を測り、上部は須玖 1 式甕片を含む SK4166 に切られる。床面に接して壺 1 が斜めに、甕 3 が横倒して出土した。床面には中央北西に一部焼土と炭化物のまとまりが見られ、この上に薄く炭化物が広がる。さらに赤茶色の焼土がほぼ全面に広がり厚いところでは 13cm ほどである。この焼土は横転した甕 3 の内部にも堆積しており、2 次堆積である。上部の黄褐色土も焼土、炭化物の粒を多く含む。竪穴の壁面に赤変部は見られない。1 は壺で口縁部を欠く以外に割れていない。頸部下に 2 本の沈線と無軸羽状文を施す。2 は焼土堆積後に

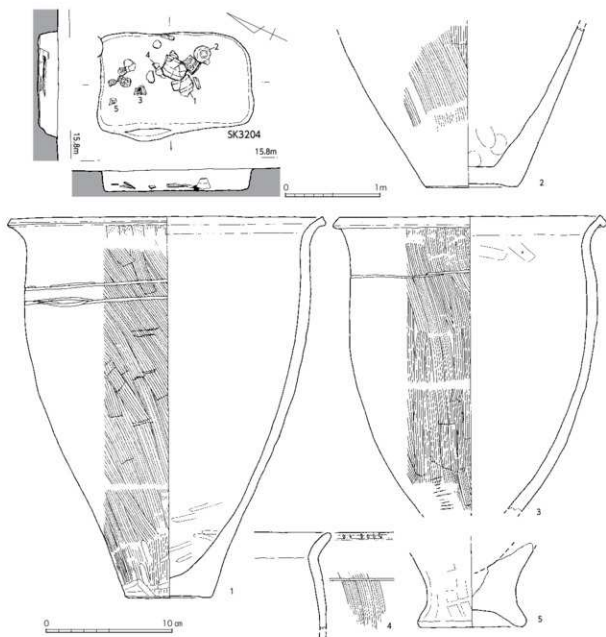


図 81 SK3204 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

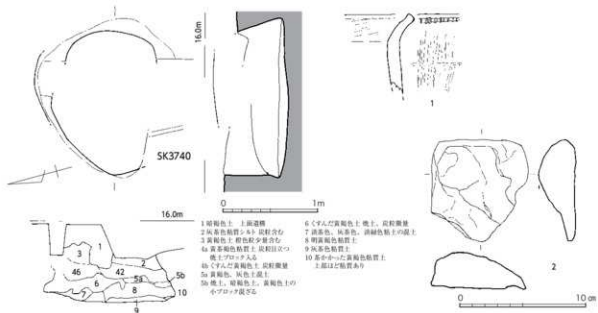


図 82 SK3740 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

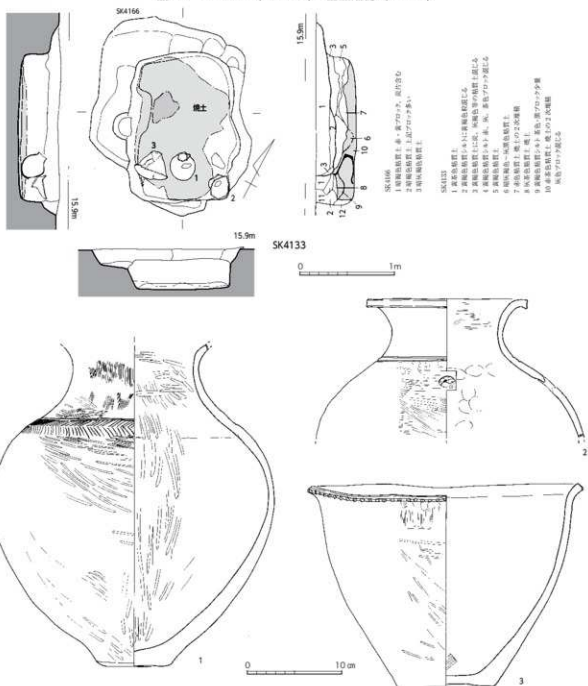


図 83 SK4133 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)

逆さに入れられた壺で胴部以下を欠く。肩部に焼成後の穿孔がある。

**SK4981 (図 84) IV 6** 平面長楕円形で、南北軸長 120cm、東西軸長 175cm以上、深さ 50cmを測る。埋土は 5cm 程度の厚さの炭層が複数レンズ状に堆積し、床面には焼土ブロック主体の暗赤褐色粘質土が堆積する。遺物は下層～床面を中心に甕がまとまって出土した。

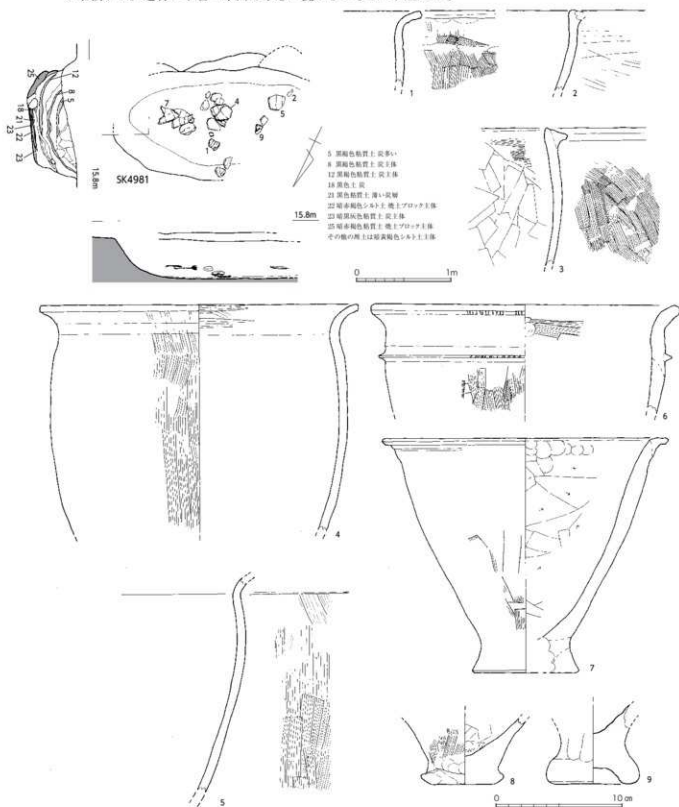


図 84 SK4981 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)



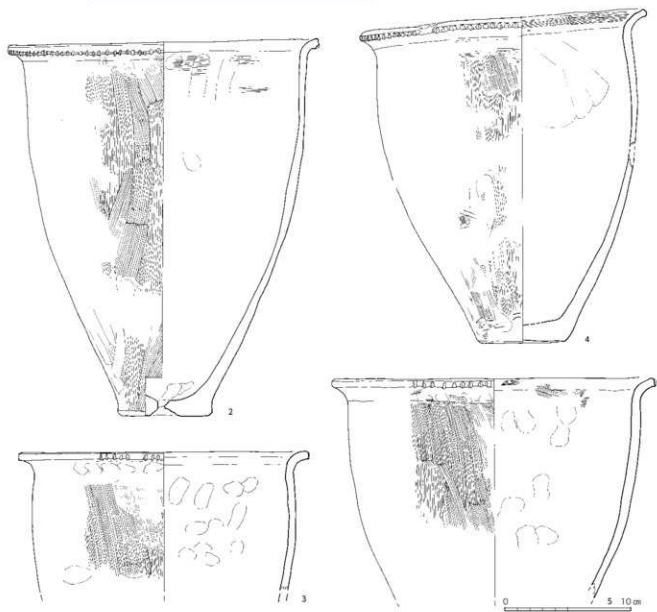
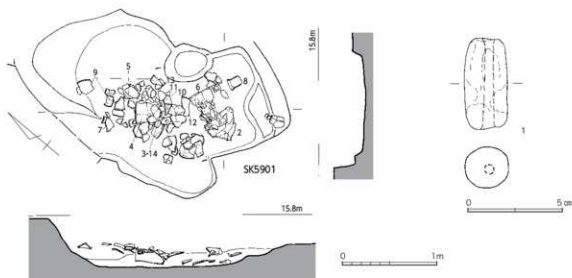


图 85 SK5901 (S=1/40)・出土遺物 (1) (S=1/3)

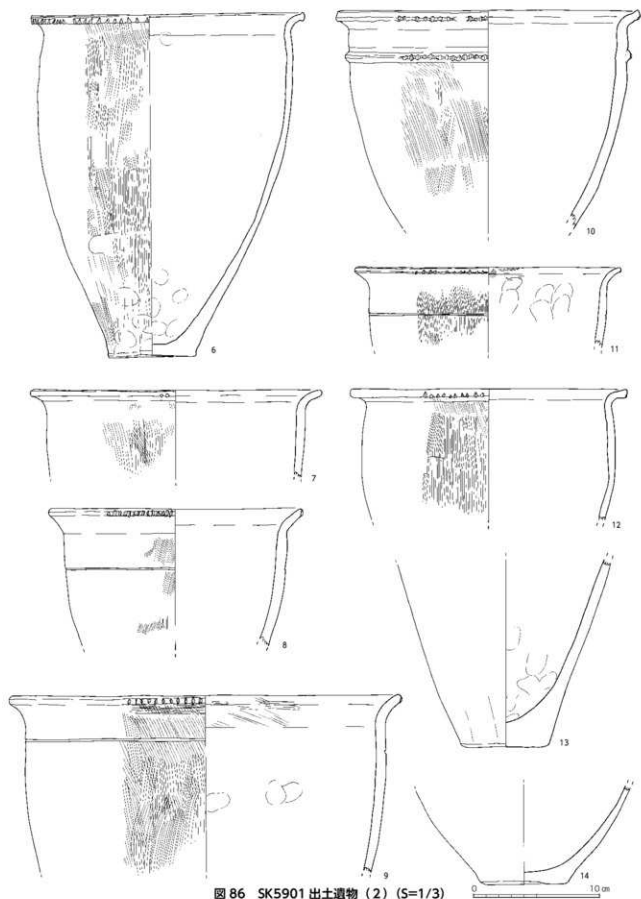


图 86 SK5901 出土遺物 (2) (S=1/3)

**SK5901 (図 85・86) No.35** 不整形の土坑で東側に広がる広いプランを想定したが、西側に潰れた状態の遺物が集中し、長方形のプランも想定できる。その場合南北 200cm、東西 100cmほどで深さ 50cmが残る。この下部から床面に少なくとも 6 個体が全体を、ほかに 10 個体前後の一部がつぶれた状態にある。ほぼすべて甕である。埋土は黄茶褐粘質土で特に焼土、炭化物の集中はみられない。1 は環状土錘で長さ 49cm、幅 2.3cm、孔径 5mm ほどで 26.3g。1 から 13 は外反する甕で 1 の底に焼成後の穿孔がある。14 は壺の底部。

**SK5922 (図 87) No. 35** 長楕円形の土坑で床より浮いた位置に甕 1、2 がつぶれた状態で出土した。長さ 165cm、幅 90cm、深さ 20cm ほどで、北端は SK5686 と重なる。1 は底に焼成後の穿孔をほどこす。2 は胴下部を欠く。5 の断面三角の口縁が新しい要素だが混じりか。6 は無軸羽状文を線刻する壺片。7 は焼成後の穿孔がある。前期後半から前期末。

**SK6082 (図 88・89) No.38** SC6080 の下面で検出した不整形の土坑で、南北軸長 180cm、東西

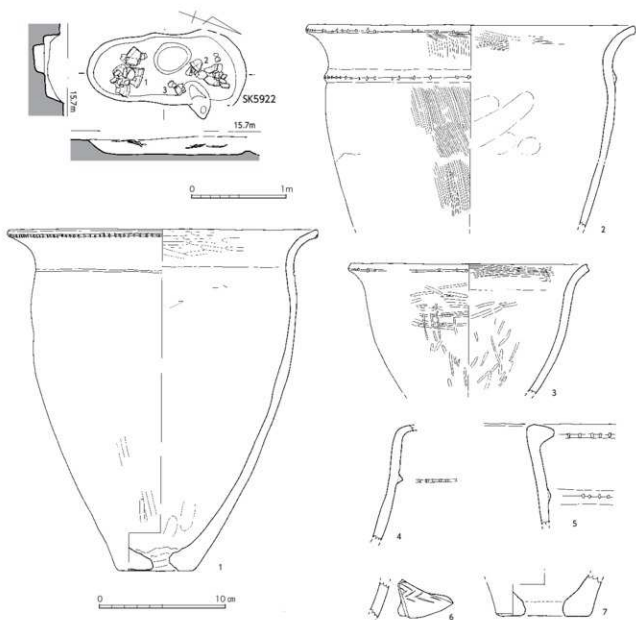


図 87 SK5922 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

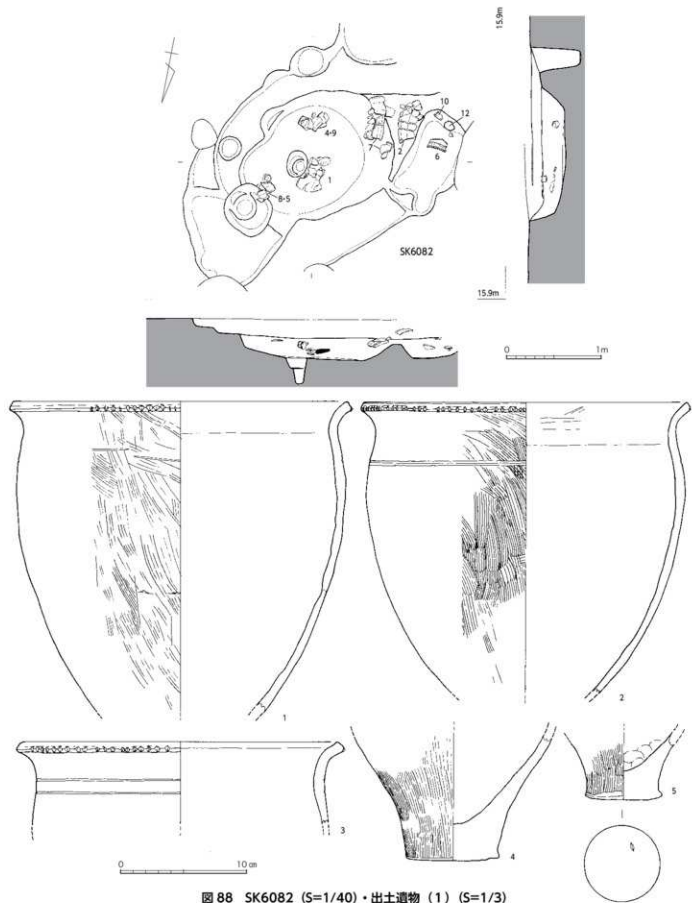


图 88 SK6082 (S=1/40) · 出土遗物 (1) (S=1/3)

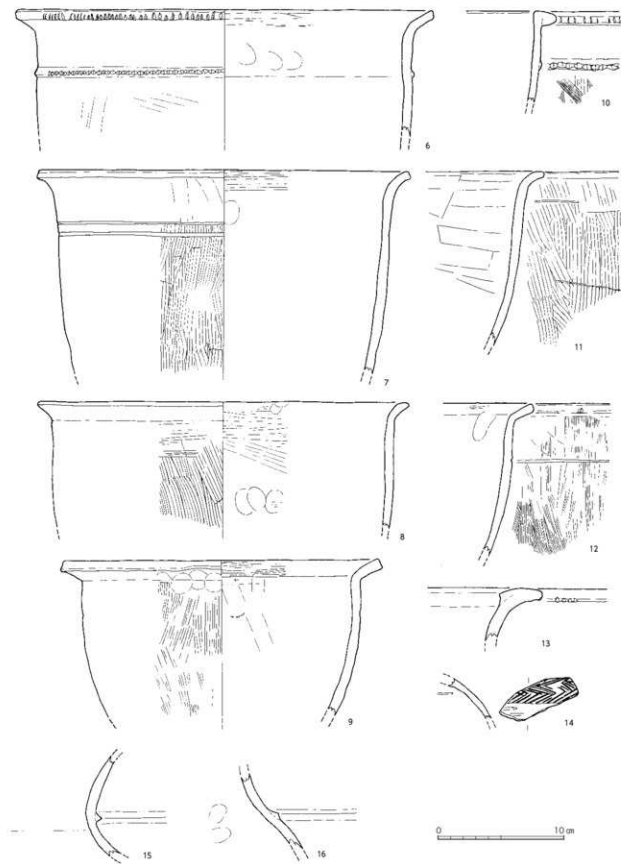


图 89 SK6082 出土遗物 (2) (S=1/3)

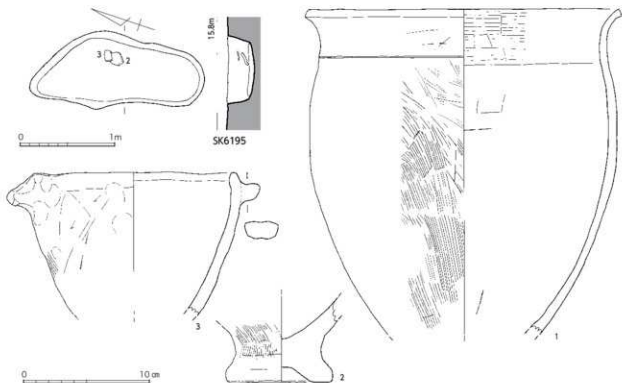
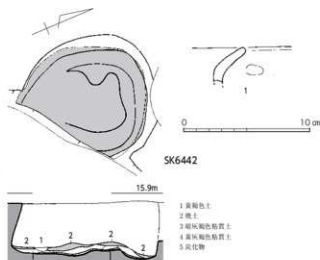
軸長 285cm以上、深さ 45cmを測る。全体を面的に掘り下げていくと、底は西と東で2つに別れる。本来は別々の遺構の可能性もあるが、まとめて掘削している。ただし、遺物はいずれも前期で、明確な時期差は認められない。遺物は甕が主体で、床面から5～10cm程度浮く。

**SK6195 (図 91) No.67** 不整長楕円形の溝状で長さ 185cm、幅 80cm、深さ 30cmを測る。土器片が1箇所にまとまって出土した。1は外反する口縁で口唇部を面取りし無刻目の甕、2は甕底部。3は口縁直下に平面半円形の突起を左右対称2箇所に添付する。胴下部は2次焼成で赤変する。

**SK6442 (図 90) No.54** 径 120cmの円形土坑で深さ 60cmが残る。壁は直またはフラスコ状を呈す。SD3050に切られる。床面には薄く炭化物が広がり、粘質土を挟んで厚さ 2～6cmの焼土が全面に広がる。遺物は少なく小片のみ。1は外反する口縁部で器面は摩耗する。類似する遺構から前期か。

**SK6706 (図 92) No.66** 径 120cmほどの円形の竅穴で深さ 55cmほどが残る。埋土は焼土物を含む淡茶褐色粘質土で床には厚さ 5から 15cmほどの焼土が広がる。遺物は焼土から 20cm浮いた位置にまとまって出土した。1は外反口縁の甕。2、3、4は胴上部に沈線で無軸羽状文を刻む壺。5、6は2枚具の縁で無軸羽状文を施す。7から 11は粘土塊。ほかの遺構でも出土したものと同様である。

**SK6715 (図 93) No.68** 長楕円形の竅穴で長さ 146cm、幅 70cm、深さ 30cm。SC6528の床面で検出した。 **図 90 SK6442 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)**



**図 91 SK6195 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)**

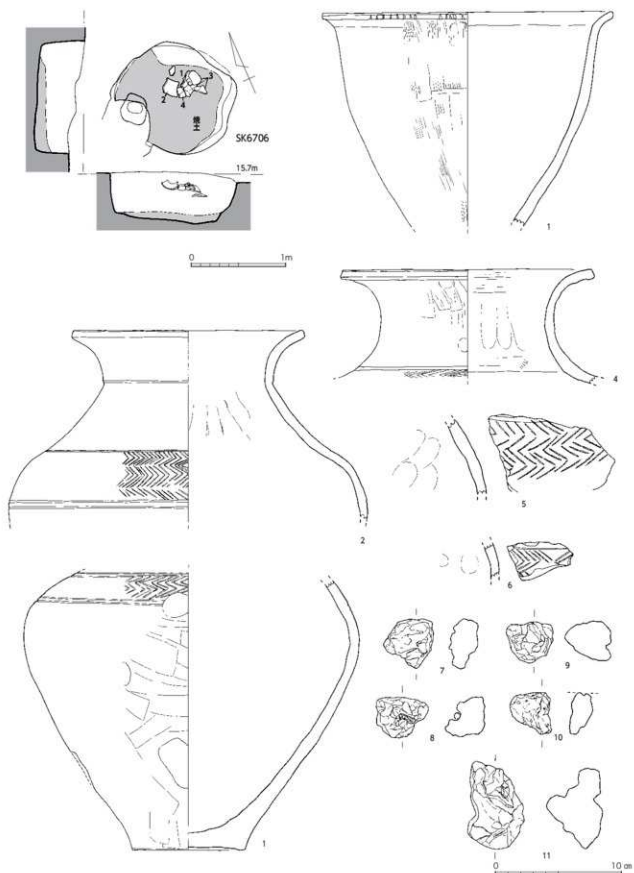


図 92 SK6706 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

南側の段部は別遺構の可能性がある。床面に接して外反口縁の甕1が横倒して出土した。

**SK6759 (図 94) No.67** 平面楕円形の土坑で南側を大きくSK6769に切られる。長さ108cm、幅80cmほどで深さ18cmが残る。西側から大型の土器片が出土した1は甕で1/5から、2は壺で1/2からの復元。SK6769からは中期中頃の土器片が出土した。

**SK6897 (図 95) No.67** 大型の方形竪穴で南東側をSD3700に切られる。SC6327の床面で検出した。南北350cm、東西320cm、深さ25cmが残る。南西端の曲がりか遺構隅の可能性がある。中央部のピットはいずれも60cmほどの深さがあるが、SP6903、6906が特に深い。遺物は少ない。1から3は埋土出土で1は外反口縁の甕、2は山形文を線刻する壺、3は甕底部。1、2は前期でも古いが2が前期後半か。4、5はSP6906出土で4が外面肥厚の壺口縁部、5は甕底部。破片だが前期前半の土器が集まる。

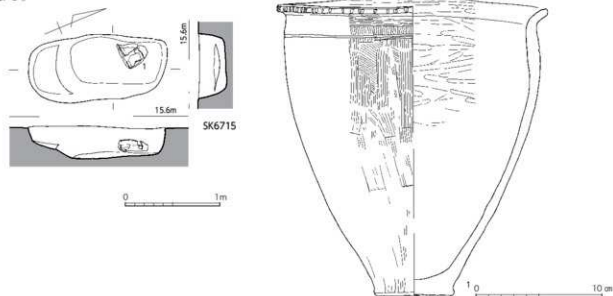


図 93 SK6715 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

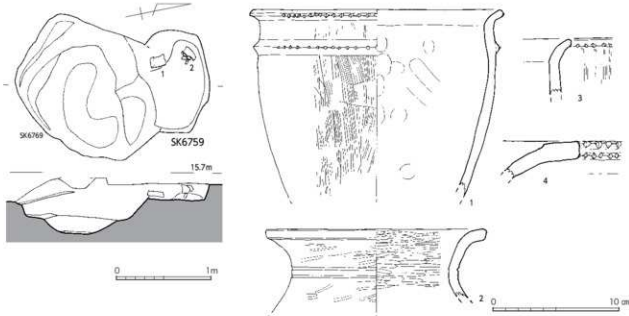


図 94 SK6759 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)



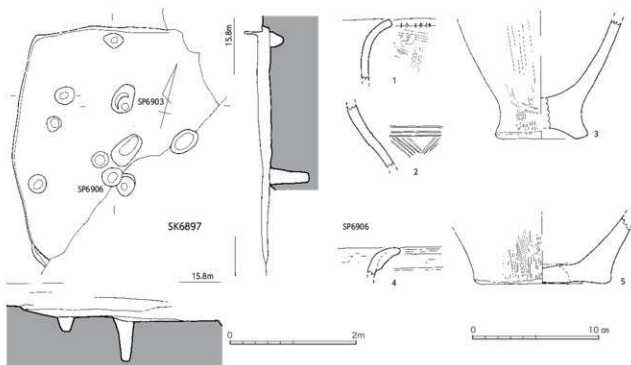


図95 SK6897 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3)

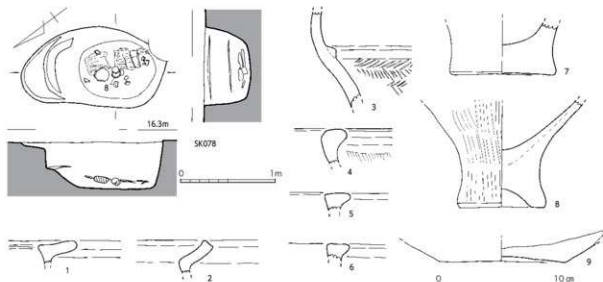


図96 SK078 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

## 2) 弥生時代中期

**SK078 (図96) No.2** 不整楕円形で平面 152 × 84cm、深さ 52cmほどである。埋土は焼土、炭粒を含む黒褐色粘質土で下部に炭化物が面的に広がる。遺物は8、9が床面出土である以外は埋土出土。前期末から中期初頭の土器が主体で、須玖1式の1、2は混入の可能性か。

**SK081 (図97) No.1** 溝状の深めの土坑で長さ 270cm、幅 55cmほどで西側に向かって深く 42cmほど残る。埋土は黒褐色土。遺物は前期から中期初頭の土器を主に出土した。埋土に汲田式の破片がある8は丁寧な研磨仕上げの石鎌または剣。9は石包丁。図273-205 扁平片刃石斧も出土している。

**SK186 (図98) No.1** 溝状の土坑で西端付近は下の遺構と埋土を区別できず掘り過ぎている。長

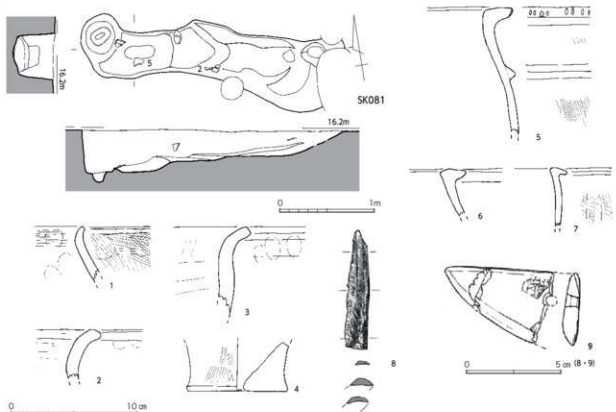


图 97 SK081 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3・S=1/2)

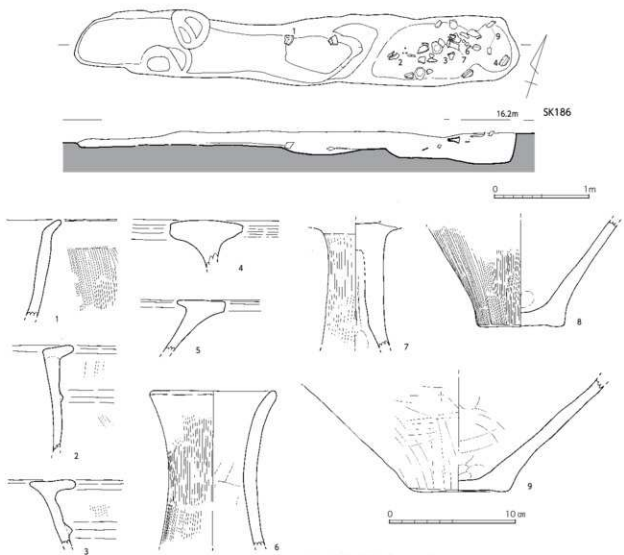


图 98 SK186 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

さ 462 × 幅 72cm ほどで底は東側が深く 30cm ほどでくぼみ状となり、中央にもやや深めの箇所がある。  
**SK191・SK249 (図 99) No. 3** SK191 は平面不整形の弧を描き、SC322、試掘トレンチに切られる。トレンチの南のプランも同じ遺構であれば長さ 310cm 幅 260cm 以上の規模で深さ 20cm ほどが残る。北側のくぼみの底に厚さ 1cm ほどの黄色粘土があり、床面の一部が赤変する。くぼみ外際東には支脚 6 が正立、南では 7 が横倒して出土した。遺物は 1 から 7 で須玖 1 式の破片を主とする。

SK249 は SK191 に切られる平面方形の竪穴で東西 420cm、南北 200cm を確認し、深さ 15cm で SK191 より 5 から 10cm 浅い。埋土は黒褐色土。須玖 1 式の破片が出土した。8 から 11 を示した。

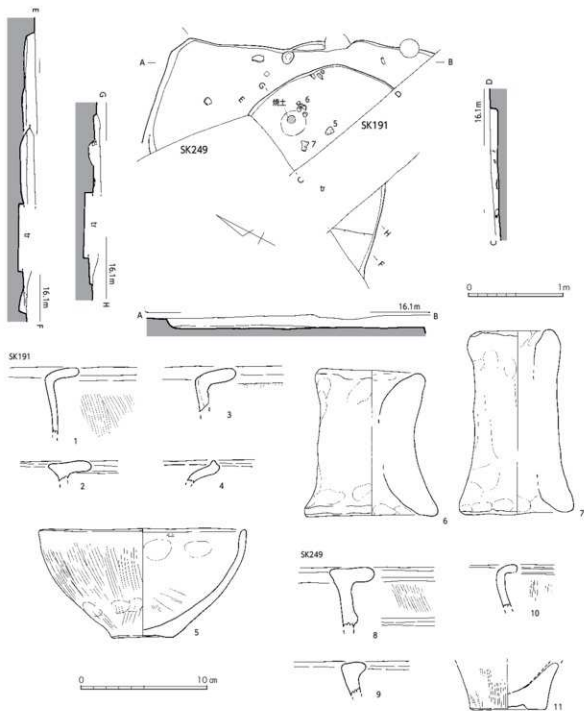


図 99 SK191・SK249 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3)

**SK261 (図 100) No.12** 長楕円形の土坑で、長軸 265cm、短軸 185cm、深さ 105cmを測る。埋土は暗褐色～黄褐色シルト土を主体とする。遺物は 3 箱出土。1～3 は甕、4 は泥岩製の石剣である。

**SK856 (図 101) No.23** 平面 280 × 190cm の略長楕円形、深さ 60cm ほどのやや大型の竪穴で床は南側が段を成して深い。焼土面等はない。覆土および壁際上部で遺物が出土した。1 から 3 は甕、4、5 は底部で 5 は底中央を打ち欠くが孔にはならない。6 は石包丁で丁寧な研磨。中期後半。

**SK1400 (図 102) No.13** 平面長楕円形の竪穴で 220 × 160cm、深さ 80cm を測る。西半を SC322 に切られる。壁上部はすり鉢状で下部で段をなす。底はくぼみがあり一定しない。埋土は灰色から暗

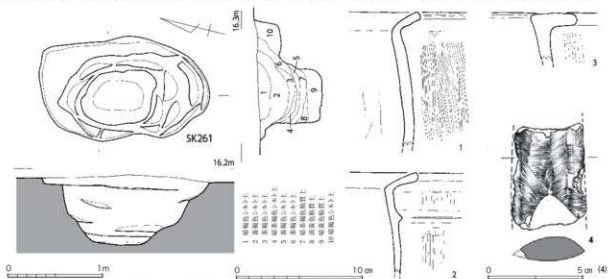


図 100 SK261 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3・S=1/2)

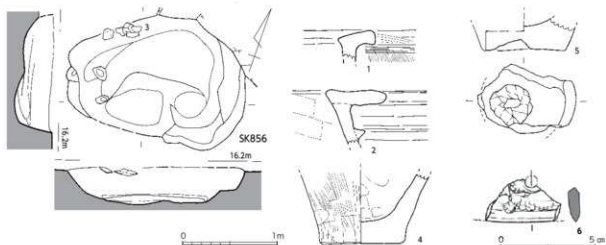


図 101 SK856 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3・S=1/2)

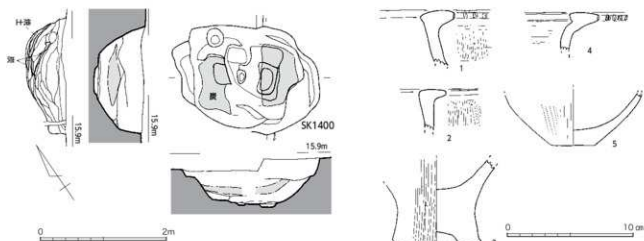


図 102 SK1400 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3)

褐色の粘質土が小単位で重なり焼土粒、炭粒を含む。中位と下位に炭化物の広がりがあり、下位は全面に広がり上に焼土が乗る。弥生前期から中期前半の遺物が覆土から出土した。1から3は甕とその底部。4、5は壺。ほかに焼粘土塊数個等がある。中期前半。

**SK1517・SK1811 (図 103) No.4** SK1517は溝状の遺構で幅40cm、深さ24cm、延長3.4mを確認した。ピット等に切られ端部は不明。埋土上部で須玖1式を主とする遺物出土している。1から3は甕、4は小型の脚部で赤色顔料を施す。5は甕の底部。中期中ごろ。

SK1811はSK1517に切られる大型の堅穴で長さ300cm、幅190cm、深さ35cmを測る。埋土は砂粒を含む暗灰色を主とし、下部には東側よりに炭化物が広がり、その下の床上で遺物が3か所にまとまって出土した。東壁添いには遺物の下にも炭化物の広がりがある。6から8、10は床面から出土し図示した。他は埋土下部出土。13は砥石。中期初頭。

**SK2866・SK1574・SK1547 (図 104-106) No.14** SK2866はSC1173の床面で検出。平面楕円形で長さ230cm、幅150cm前後、深さ70cmが残る。東壁の中央部はSK1574と切り合い、SC1173の東壁とも重なりプランを確認できていない。西壁掘を中心に床より2、3cm浮いた状態で板状の炭化物がおかれる。板状の幅は広い部分で30cm、厚さは5mm弱である。これより5cmから10cm浮いてやや大型の土器片が出土した。埋土は灰褐色粘質土を主とし、炭化物を含む。10、11は甕、12、13は壺。中期前半。SK1574は平面楕円形と考えられるがSC1173、SK2866に切られ東半分が残る。幅150cm。長さ147cm、深さ40cmが残る。南壁落ち際には外反口縁の甕1が横たわる。埋土は暗灰褐色粘質土を主とし、全体に炭粒を含む。中位の9層から下は暗褐色、灰褐色の粘土、シルトが細かく重なり、下部の20層では炭化物、焼土の小片を特に多く含む。1は南壁上端でつぶれた状態で出土した甕で2/3が残る。刷毛目調整が摩滅。2から4は埋土出土。2は口縁内面肥厚した壺。3、4は逆L字口縁の甕、5はその底部。6は蓋か。中期初頭。

SK1547 SC1173とSC918の間の限られた範囲で確認された溝状の遺構で幅75cm、深さは10cmで東側はくぼみ状に20cmほど深い。甕7が横たわって出土した。SK1574に切られると判断したが不確定。中期初頭。SK1534はこの南で検出した長方形の土坑で長さ110cm、幅85cm、深さ45cmほどで床が狭い。埋土は暗灰褐色粘質土で下層は焼土ブロック、灰黒色粒多い。中期前半の遺物が少量出土。

**SK2010 (図 107) No.16** 長楕円形の土坑で壁はすり鉢状で長さ150cm、幅120cmほどで深さ45cmが残る。東側をSC1800に切られる。北壁の上部に張り付いて遺物がまとまって出土した。1から6は甕で小ぶりの逆L字状。7は壺の底部か。埋土から焼けたイノシシの骨片1点が出土した。中期初頭。

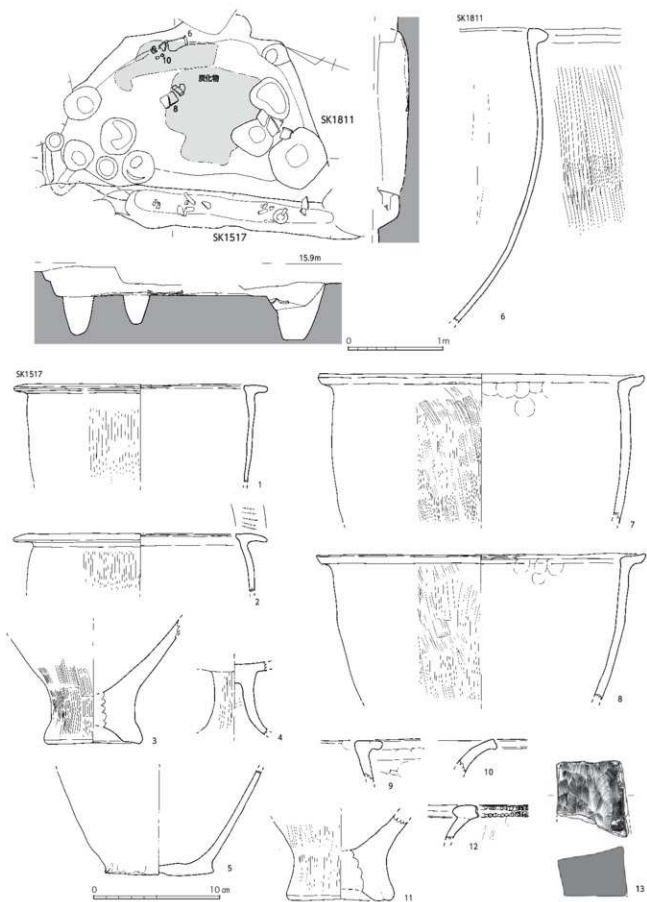


图 103 SK1517・SK1811 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

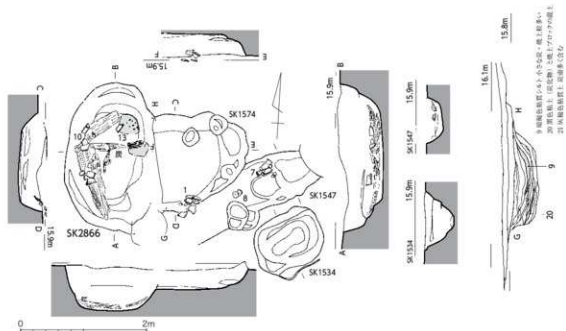


图 104 SK2866 · SK1574 · SK1547 · SK1534 (S=1/60)

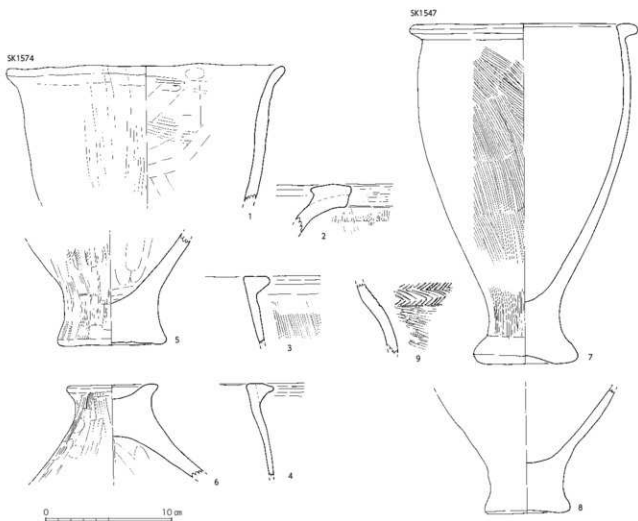


图 105 SK1574 · SK1547 出土遺物 (S=1/3)

SK2866

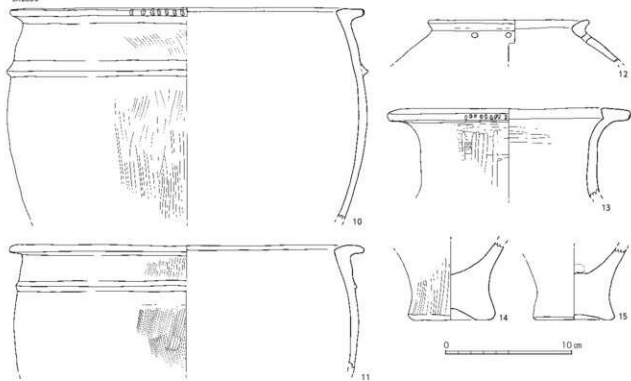


圖 106 SK2866 出土遺物 (S=1/3)

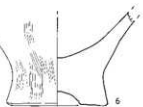
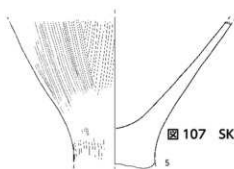
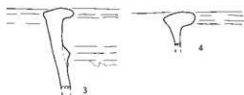
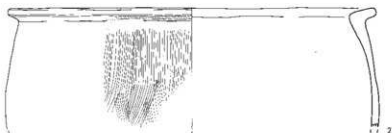
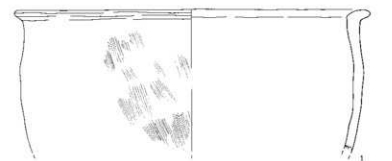
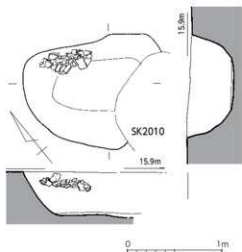


圖 107 SK2010 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)



**SK2021 (図 108) No.16** 平面楕円形で195×132cm、深さ51cmの堅穴で、SC2035の床面中央で検出した。断面すり鉢状だが壁に大小の段があり一様ではない。床上から斜面に10～25cm大の礫が入る。地山は礫層には達しておらず、意図的に入れられた可能性がある。遺物は小片のみ。1は無形壺片、逆L字口縁の甕。中期前半。

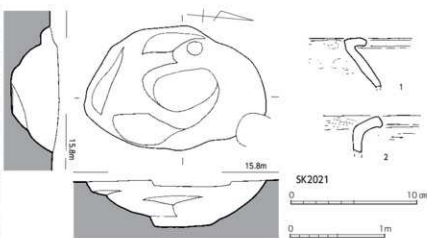


図 108 SK2021 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

**SK2035 (図 109) No.14** 溝状の長楕円形の土坑で長さ400cm、幅130cmほどで、底は東側が高く、西端が最も深い。最深で95cm。最上部に炭化物の広がりがみられた。埋土は黄灰褐色粘質土を主とし比較的均一で焼土、炭粒を含むが散漫である。遺物は上部から中位にまとまりがあった。1、2は甕で西側出土、3は大型の壺胴部で東側から出土。埋土上部で黒曜石の微砕片が多く出土した。

**SK2036 (図 109) No.14** 楕円形の土坑でSK2035に平行する。長さ190cm、幅125cm、深さ70cm。埋土は黄灰褐色粘質土で灰色粘土や褐色粘土のブロックを多く含む。中位に炭化物が広がる。遺物は破片で床近くで比較的多く出土した。4から6は甕。7は投擲で長さ4.2cm、幅2.4cm。8は玄武岩製の磨製石斧片。

**SK2051 (図 110) No.6** 不整長楕円形で長さ380cm、最大幅235cm、最大深さ75cmを測る。SC2007に切られる。南東側に緩やかに落ちる。埋土下層は炭と焼土が20cm程度堆積する。底から20～30cm浮いた付近で須玖1式の甕2が出土した。1は磨製石鎌か石剣で、成形後丁寧な研磨を加え横断面凸レンズ状に仕上げる。2～11は甕、12～14は壺、15は鉢である。

**SK2147 (図 111) No.18** 不整楕円形の堅穴でSC2013に切られる。長さ210cm、幅130cm、深さ100cmが残り、底は北側に寄り狭い。埋土下部は粘性が強く炭が多く混じる。中位から下部にややまとまって遺物が出土したが、籠く取り上げが困難なものがあった。1から3は小さな逆L字形の甕。5は鋤形口縁の壺で口縁下端に刻目を施す。6は石包丁で片面が剥がれる。7は扁平片刃石斧で横断面長方形に仕上げる。器面風化。中期前半。

**SK2148 (図 112-114) No.17** 西側が広がる不整長方形の堅穴で長さ260cm、最大幅160cm、深さ65cmを図る。中位に甕を主とする遺物が密に出土し、つぶれた状態のものも多く見られる。1から18は甕で小ぶりの逆L字口縁。19から21は壺で20は内外面に赤色顔料が見られる。22は汲田式片。23は蓋。24は支脚。25は柱状片刃石斧で丁寧な研磨で仕上げる。26は板状の砥石。25、26は埋土出土。

**SK2180 (図 115) No.18** 径130cmほどの不整形の堅穴で深さ30cmが残り、底は長方形を呈す。SC2013に切られる。床面から石包丁4が出土した。遺物は少ない。1、2は逆L字口縁の甕と鉢。3は甕の底部。4は丁寧な研磨で仕上げる。

**SK2183・SK2877 (図 116-118) No.6** 平面楕円形で、長さ120cm、幅75cm、深さ35cmを測る。SC2007に切られる。上層を中心に甕を主体とする遺物が密に出土する。1～6は甕、7～9は壺、10は太型蛤刃石斧である。

SK2877 SK2183に切られる楕円形の土坑で、残存長100cm、幅75cm、深さ35cmを測る。床面から

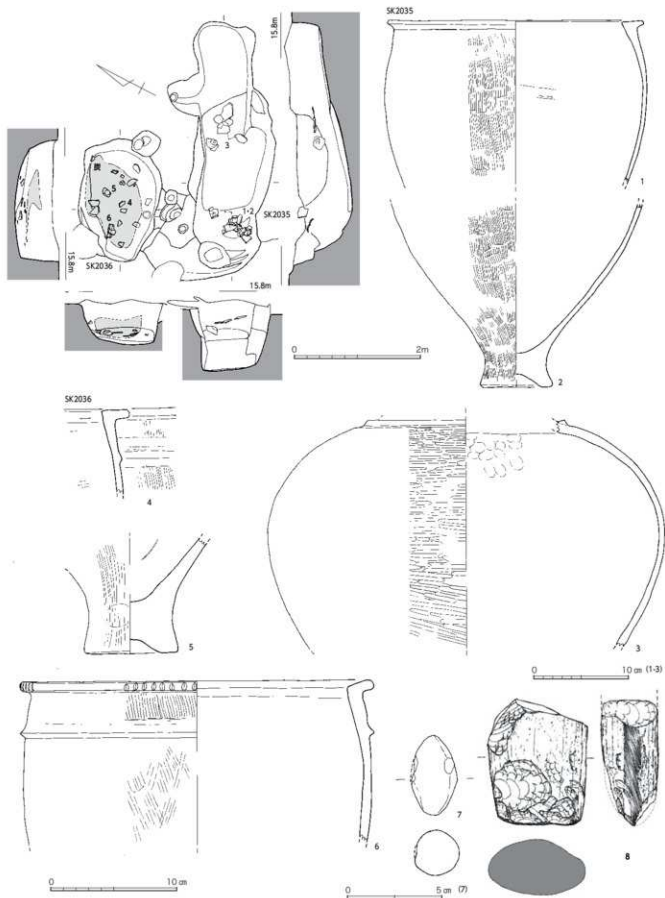


图 109 SK2035・SK2036 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/4・S=1/3・S=1/2)

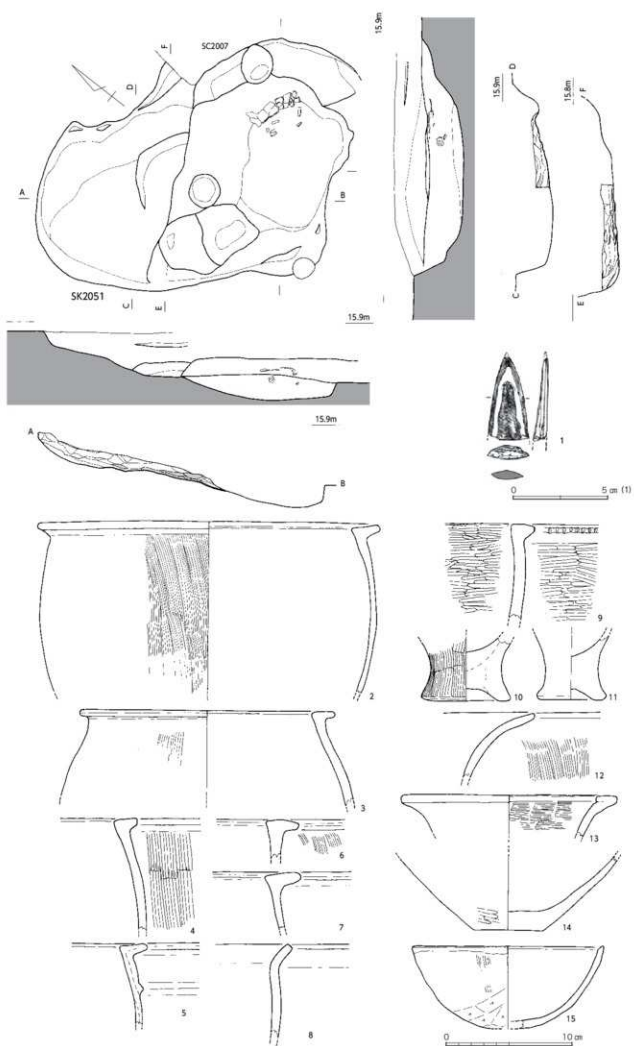


图 110 SK2051 (S=1/40) · 出土遺物 (S=1/3)

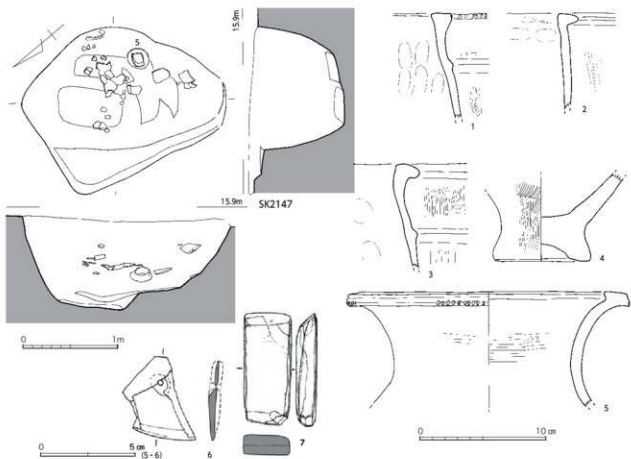


図 111 SK2147 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3・S=1/2)

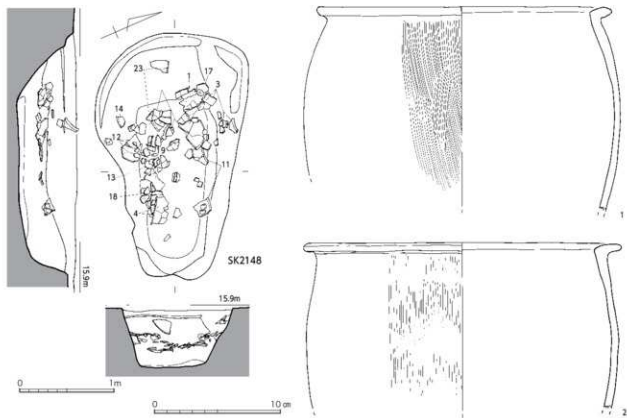


図 112 SK2148 (S=1/40)・出土遺物 (1) (S=1/3)

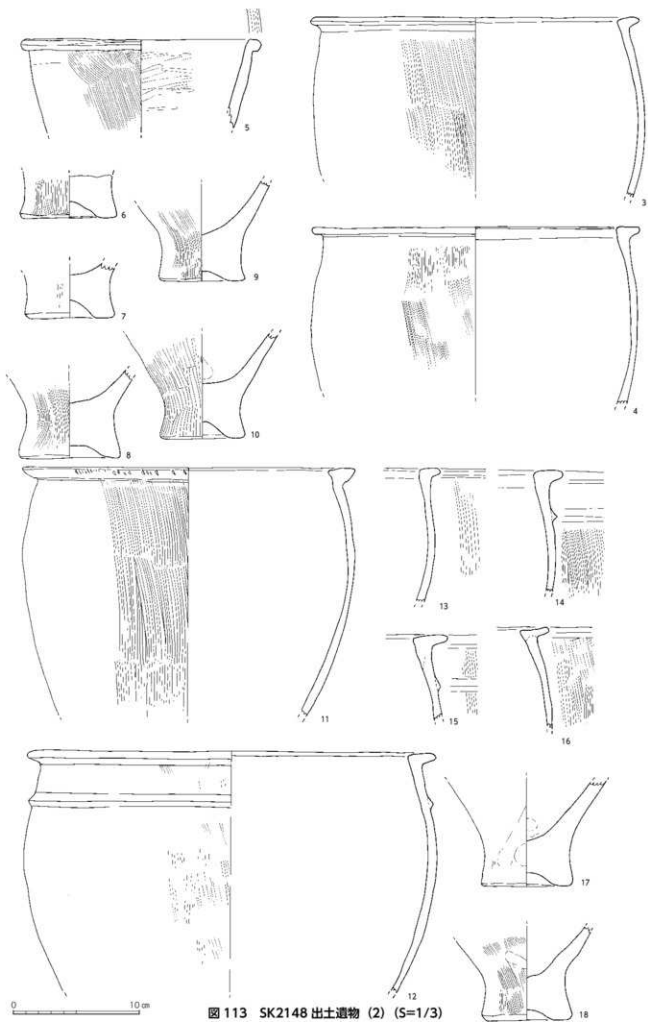


图 113 SK2148 出土遗物 (2) (S=1/3)

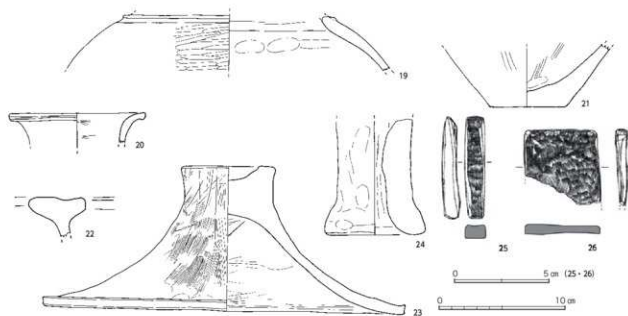


図 114 SK2148 出土遺物 (3) (S=1/3・S=1/2)

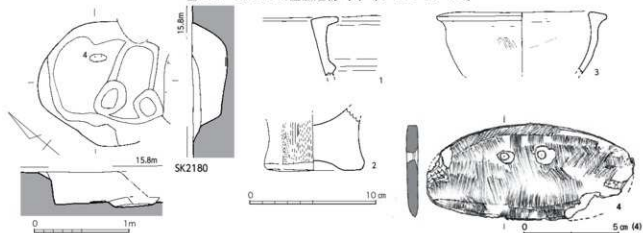


図 115 SK2180 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3・S=1/2)

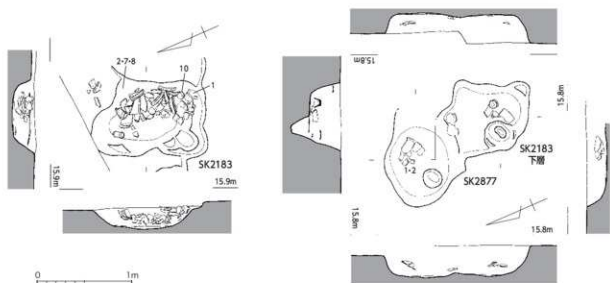


図 116 SK2183 上層、SK2183 下層・SK2877 (S=1/40)

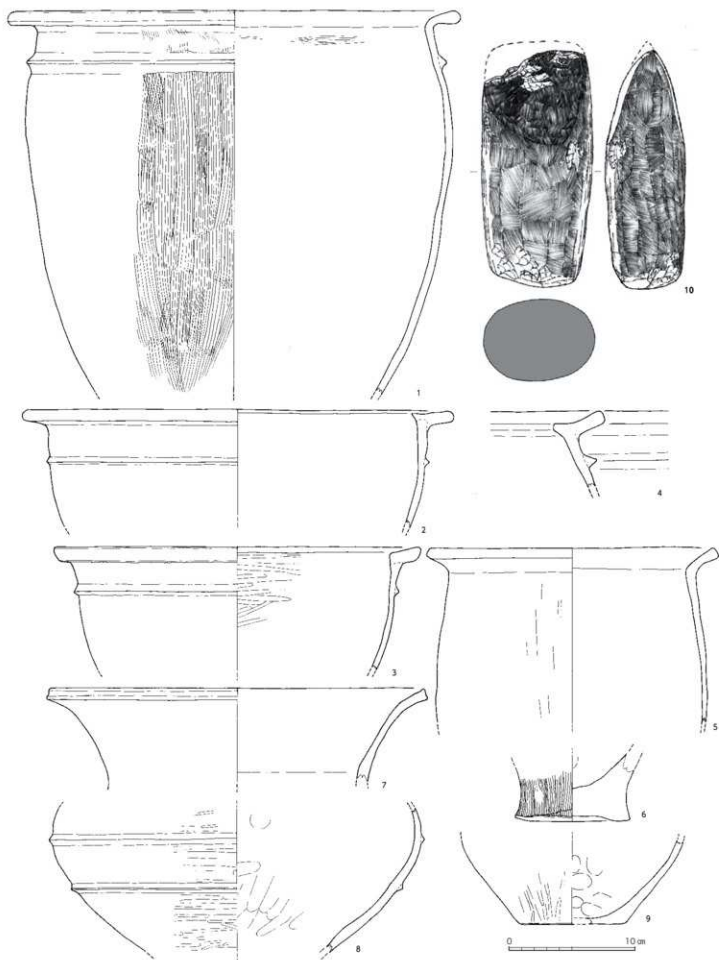


图 117 SK2183 出土遺物 (S=1/3)



図 118 SK2877 出土遺物 (S=1/3)

10cm程度浮いて甕1と壺2が出土した。甕1は底部に穿孔を施す。前期。

**SK2291 (図 119) No.25** 溝状の長楕円形の土坑で長さ450cm、幅167cm、深さ57cmを測る。埋土上部は暗褐色～黄褐色の粘質土で下部は粘質が強い。遺物は床近くで底部を上につぶれた状態で出土した甕4のほか須玖1式古段階の土器が出土した。1、2は壺、3から7は甕。8は玄武岩製の石斧片で丁寧な敲打、研磨を加える。中期前半。

**SK2292 (図 120) No.15** 平面長楕円形の土坑で長さ150cm、幅85cm、深さ67cmが残る。底から15cm

ほど浮いた位置で甕2が出土した。つぶれた状態というより底を上にして捨てられた状況と考える。1はその下から出土の甕の破片で1/3が残る。3から7は埋土出土の小片。8は完形の器台。中期前半。  
**SK2318 (図 121) No.7** 平面楕円形の堅穴で南西側はSP2238と切り合いプランがわからない。北東側に段があるが、これも別遺構の可能性もある。中央部で長さ110cm、幅70cm、深さ50cm。床面よりやや浮いて甕1の大型の破片が横倒して出土した。1は1/3からの復元。口縁部を揃んで成形し、横なではせず指頭痕が残る。中期初頭。

**SK2394 (図 122) No.35** 不整楕円形の堅穴で、西側はSK5670に切られる。北側はSK1602との切り合い関係が不明で同一遺構の可能性もある。南側で幅145cm、深さ40cmが残る。南側では床から10cm上のレベルで傾斜に沿って炭化物が薄く広がり、その上に焼土が5から7cmの厚さで広がる。土層を示した範囲から南への広がりは確認を行っていない。東壁にも薄く焼土が見られたが一連のものかは不明である。遺物は破片のみで埋土から須玖1式までの甕の破片1～6が出土している。SK5670からはやはり須玖1式の甕7が出土している。

**SK2571 (図 123) No.6** SC2007、2300の床面で確認した。SK2051を切る。平面不整円形で210cm×215cmの規模で深さ64cmが残る、断面は小さな段を伴うすり鉢状を呈す。床面およびやや上では広い範囲に炭化物が広がる。埋土上部は灰褐色の粘質土。

**SK2606 (図 124) No.6** 方形の土坑で平面90×80cm、深さ32cmが残る。SC1990の下で検出した。埋土は黄褐色粘質土で須玖1式の甕片1から4が出土した。

**SK2777 (図 125) No.25** 平面略円形で、径90cm、最大深さ50cmを測る。床面から10～20cm程度浮いて甕・壺を中心とする遺物が出土した。1～4は甕で1～3は逆L字状の口縁、5・6は壺の底部である。

**SK3095 (図 126) No.43** 平面楕円形プランで、長さ120cm、幅105cm、深さ20cmを測る。南西側は一段深くなる。埋土は暗褐色土で、床面から甕・壺の破片が出土した。1～4は甕、5は壺である。



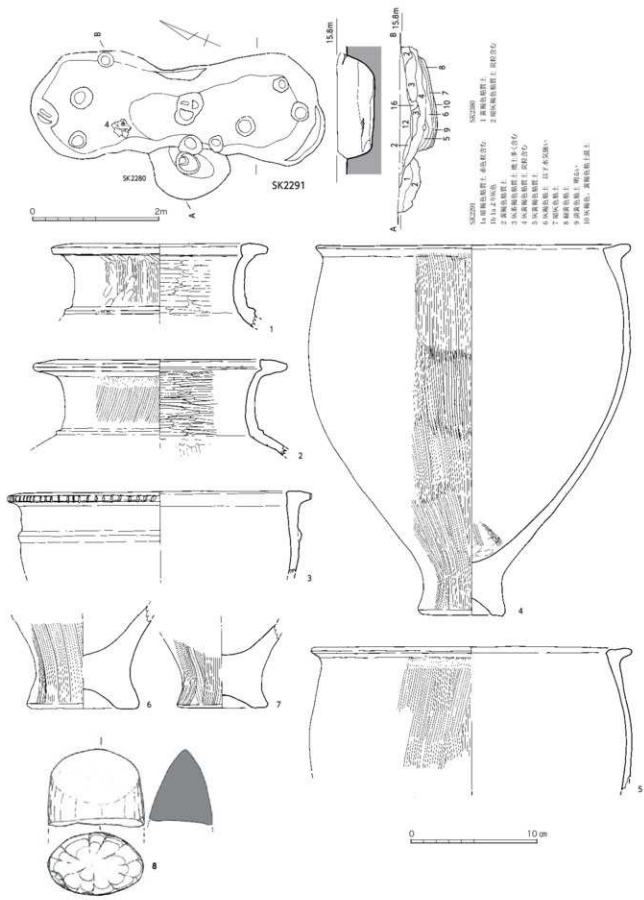


图 119 SK2291 (S=1/60) · 出土遺物 (S=1/3)

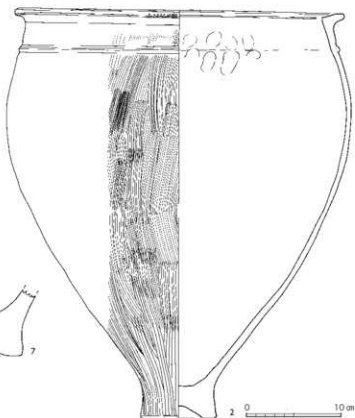
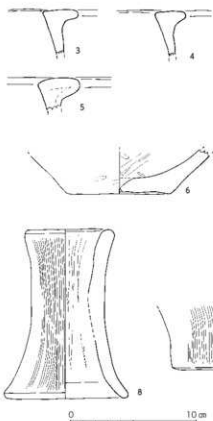
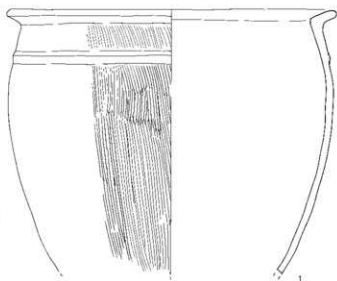
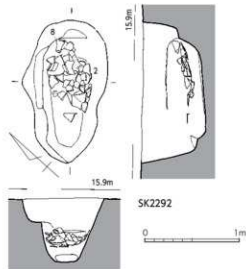


図 120 SK2292 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3・S=1/4)

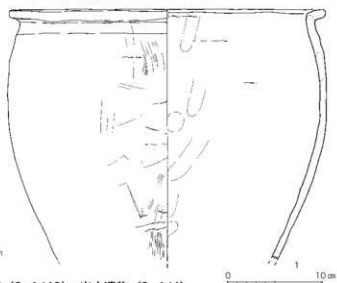
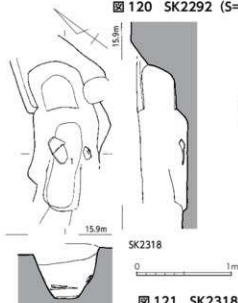


図 121 SK2318 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)

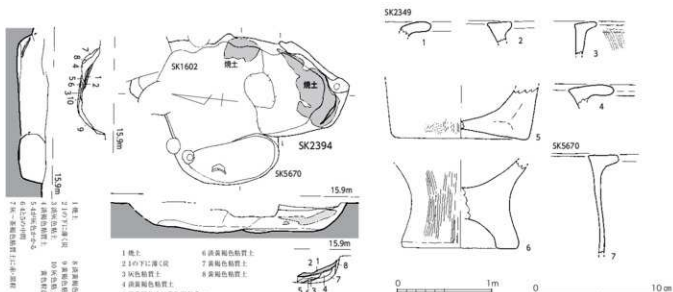


图 122 SK2394 (S=1/40) · 出土遺物 (S=1/3)

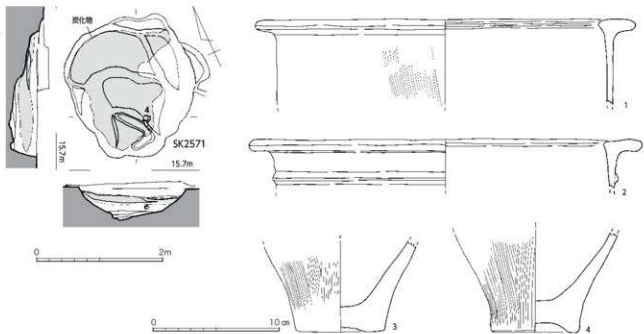


图 123 SK2571 (S=1/60) · 出土遺物 (S=1/3)

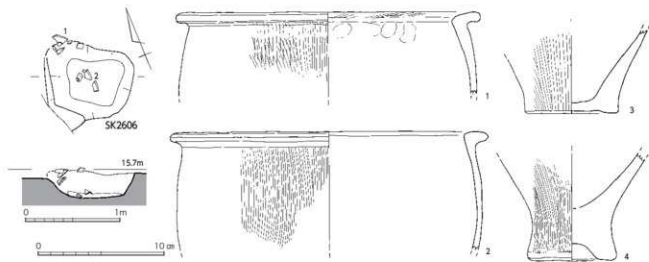


图 124 SK2606 (S=1/40) · 出土遺物 (S=1/3)

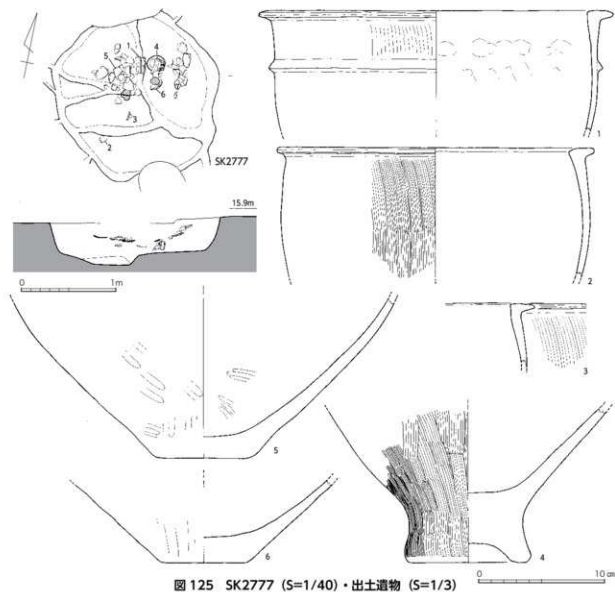


図 125 SK2777 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

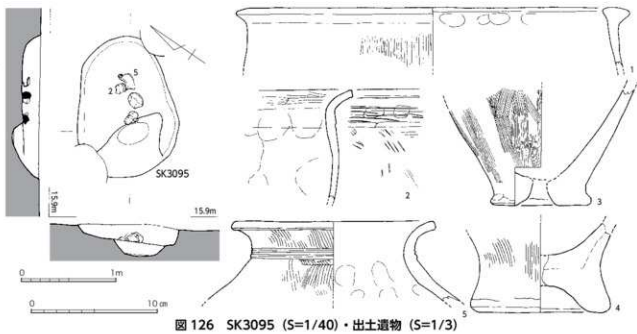


図 126 SK3095 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

**SK3437・SK6066 (図 127) No.44** SK3437は長楕円形の土坑で長さ300cmほど、幅140cm、深さ70cmを測る。東側には段差がある。段差から西は別遺構の可能性もあろう。埋土上部は焼土粒を含む灰褐色粘質土に黄色土ブロックが入り、下部は暗灰褐色土に炭化物を多く含み、底には炭化物がたまる。これより下は掘り過ぎている。遺物は中期初頭の土器片が出土している。1～4は甕、5、6は壺、7は甕の底部。

SK6066 径170cmほどの円形の土坑で深さ40cm。壁は直に近く急である。中位から下の埋土は焼土に黄褐色土が被る。土層を確認できていないが、中央は上部まで焼土があり、焼土に黄褐色土が被る状況が想定できる。黄褐色土には焼土混じりブロックが入る。遺物は中期前半から中ごろの土器が出土した。8から10は甕、11は壺、12は長頸壺か。埋土から陸獣片が出土している。

SK3437と6066は切り合いがあり、3437が切るように掘ったが遺物、図、写真から6066が切ると考えられる。

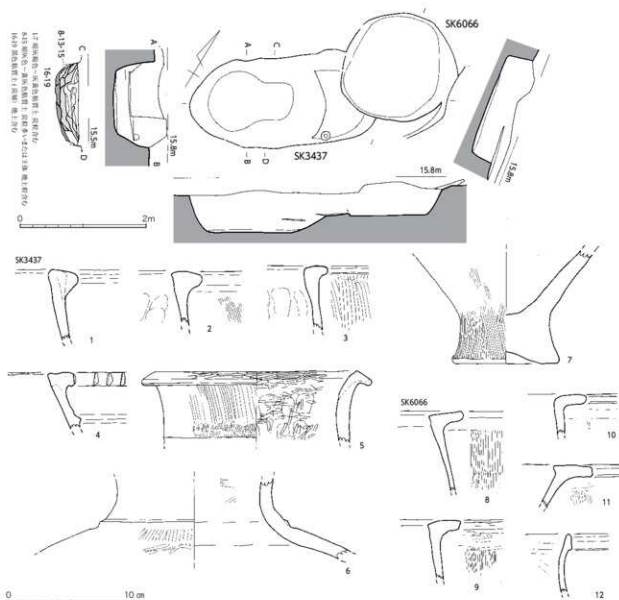


図 127 SK3437・SK6066 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3)

**SK3687 (図 128) No.51** 長さ 235cm、残存幅 60cm、深さ 10～15cmを測る。西側を SD3700 に切られる。北東側の床面で甕、器台を中心とする土器がまとめて出土した。1～4は鋤形口縁の甕、5～7は器台、8は蓋、9は砥石である。このほか、玄武岩製の蛤刃石斧片、鉄製刀子が出土している。

**SK4166・SK4189・SK4191・SK5686 (図 83・129) No.35** 前期の SK4133 を切る SK4166 周辺では、中期前半の遺物が出土する長方形の上坑敷基が長軸の方向をほぼ同じにする。まとめて取り上げる。SK4166 は 160 × 150cm、深さ 20cm、埋土は暗褐色粘質土。SK4189 は 180 × 120cm、深さ 22cm、須玖 1 の古手の土器片出土。SK4191 172 × 110cm、深さ 20cm。中期前半の遺物が少量出土した。SK5686 120 × 80cm、深さ 15cm。埋土に焼土ブロックが広がり、4 層上には薄く炭化物が広がり、そこに炭化材が見られる。南東隅で径 17cm ほどの薄手の鉢が出土。中期初頭甕片出土。

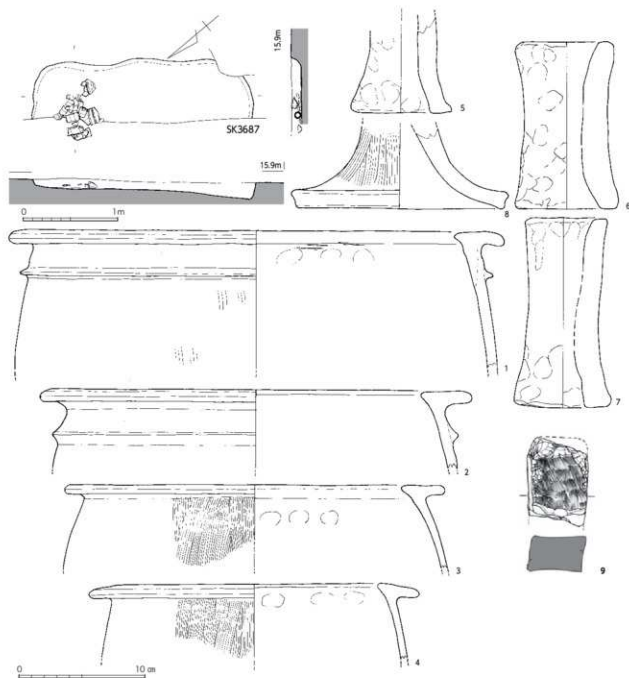


図 128 SK3687 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

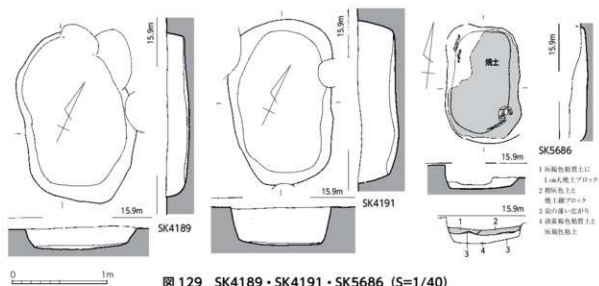


図 129 SK4189・SK4191・SK5686 (S=1/40)

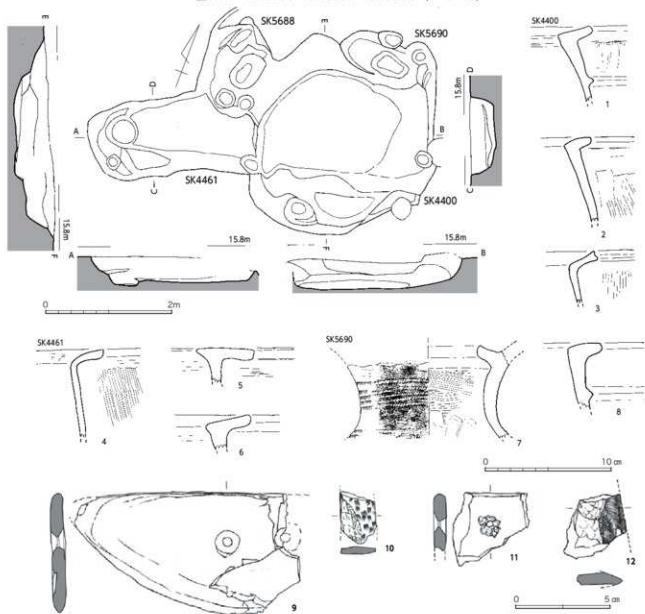


図 130 SK4400・SK4461・SK5688・SK5690 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3・S=1/2)

**SK4400・SK4461・SK5688・SK5690 (図130) No.46** SK4400は平面不整形円の大型土坑で径3m、深さ50cmで壁は東側以外はすり鉢状である。覆土は暗灰色の砂まじりでやや締まりがない。遺物は多いが小片である。前期から須玖1の古い段階の甕がある。1～3に示す。石器は9、10が出土した。9は半月形で風化が激しい。ほかに石包丁片2点がある。他に太型蛤刃石斧(図272-170)がある。ここで切り合い関係のある遺構に触れる。

この西側にはSK4400が切るSK5688とこれが切るSK4461がある。SK5688は南北に長い楕円形の平面が想定され、SK4461は東西に長い楕円形である。SK5688は時期が不明だが、SK4461は中期中ごろの甕片4～6が出土し、SK4400より新しい。いずれかの切りあいを誤って認識していた。SK4461は長さ170cm以上、幅95cmほどで、黒色～黒褐色粘質土を埋土とする。板状鉄製品出土。

SK5690は北側の楕円形の小土坑で長さ80cm、幅45cm、深さ28cmほどである。切りあいは不明。SK4400と同様の中期前半の古手の土器片が少量出土している。その中で7は壺の1/4片で外面は研磨した器面に板状工具または貝殻で上部に5条、下部に2状の横線を刻む。内面には突帯が巡り、下部は刷毛目調整。器面は淡橙色。8は須玖式の甕。11は石包丁片、12は石剣か。

**SK4623 (図131) No. IV 4** 平面楕円形で、長さ85cm、幅45cm以上、深さ15cmを測る。床面で焼土の広がりを確認した。遺物は小袋1つで、丹塗の口縁破片などが出土している。

**SK4952 (図131) No. IV 4** 平面方形で、長さ150cm、幅80cm以上、深さ25cmを測る。下層～床面に焼土、炭粒の広がりを確認した。遺物は外反口縁の破片等があるが、小片で明確な時期を捉えきれない。

**SK4975・SK4991 (図131・132・133) IV 6** 南北軸長320cm、深さ55cmを測る。下面でSK4991を検出した。1は

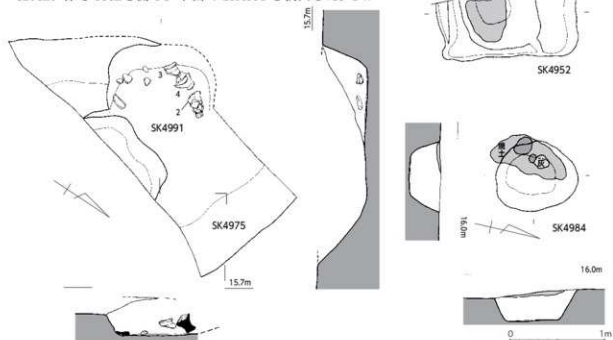


図131 SK4975・SK4991・SK4623・SK4952・SK4984 (S=1/40)



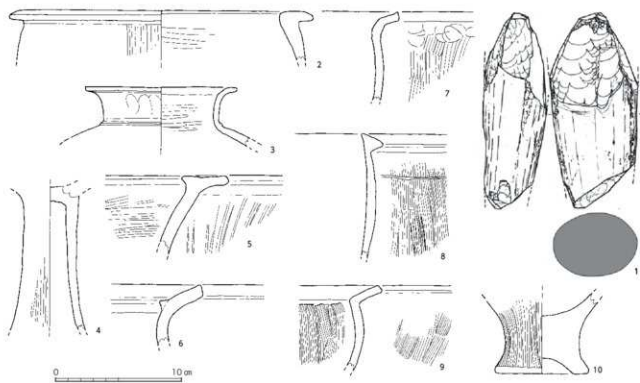


图 132 SK4975 出土遺物 (S=1/3)

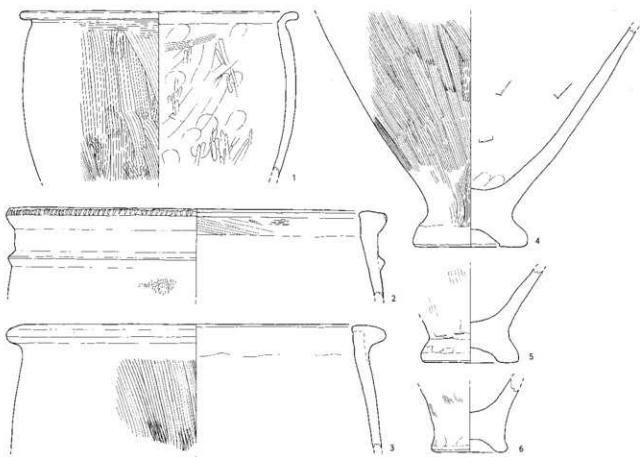


图 133 SK4991 出土遺物 (S=1/3)

玄武岩製の太型始刃石斧である。2・7～10は甕、3・5・6は壺。6は内面に突帯を示す。4は高坏である。SK4991は平面楕円形で、長軸長110cm、深さ50cmを測る。床面から10cm程度浮いて甕を主体とする土器がまとまって出土した。

**SK4984 (図 131) No. IV 5** 平面楕円形で、南北軸長85cm、東西軸長75cm、深さ60cmを測る。上層に炭、焼土が広がり、炭化米を含む。遺物は鋤形口縁の甕破片、上げ底の甕底部などを含む。小袋1つ分出土。

**SK5513 (図 134) No. 62** 平面略楕円形で、南北軸120cm以上、東西軸長150cm、深さ40cmを測る。掘り下げの際、上層はSK5514と同時に掘削している。1は壺の口縁～頸部で、内外面に磨きを施す。2～4は甕で、2は上・中層、3・4は下層からの出土である。

**SK5677 (図 135) No. 46** 長方形の土坑で南北2.3m、東西2m、深さ25cmが残る。SK4197に切られる。東側の浅い部分と南端の間にプランのずれがあり遺構の切りあいの可能性がある。遺物が東側の床面と同じレベルでまとまって出土し、同レベルで一部焼土が広がる。遺物のレベルが遺構の床面で、深い部分は別遺構か。1、2は壺で1は刷毛目調整で注ぎ口があり脚付きか。3から7は甕、9は高坏。10はピットSP5719出土の磨製石剣。遺構の切りあいは未確認。

**SK5684 (図 136) No. 46** 長方形プラン竪穴で長さ430cm、幅230cmで深さ20cmが残る。SC4144に切られる。床面はほぼ平坦で建物の一部の可能性もあろう。遺物は埋土から須玖1式までの破片が出土している。1から3は甕の小片。切り合い、遺物から弥生中期前半。

**SK5900 (図 137) No. 46** 丸みをおびた方形の竪穴で東西225cm、南北190cm、深さ110cmを測る。SC3637に切られる。埋土は上部は灰茶褐色、黄褐色の粘質土が厚めにたまり、中位からは黄褐色土を挟んで灰白色粘土、灰茶褐色土が細かな単位で堆積する。後者には炭化物和焼土の粒を含み底に炭化物が薄くたまる。南壁、底近くに焼土粒を多く含む層がある。遺物は甕1が中位に堆積の方向に沿って破片が出土した。1は径の1/4が残り未接合片がある。2は片刃石斧の刃部で床面近くの埋土出土。3は磨製石鏃で床面出土。

**SK6197 (図 138-140) No. 53** 平面隅丸方形で東西軸長210cm以上、南北軸長240cm以上、深さ45cmを測る。SD3700、SC3760の下面で検出した。中位から床にかけて、甕を中心とする遺物がまとまって出土した。1～32は甕、33は粘土塊か。34は器台、35は壺の底部である。

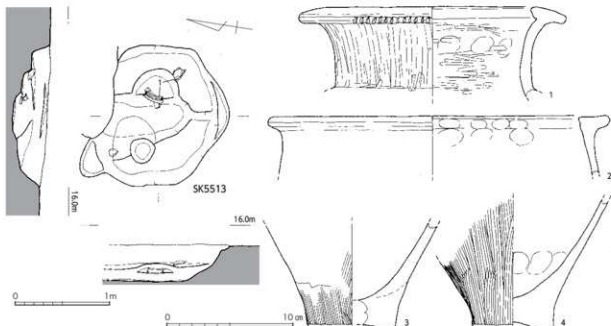


図 134 SK5513 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

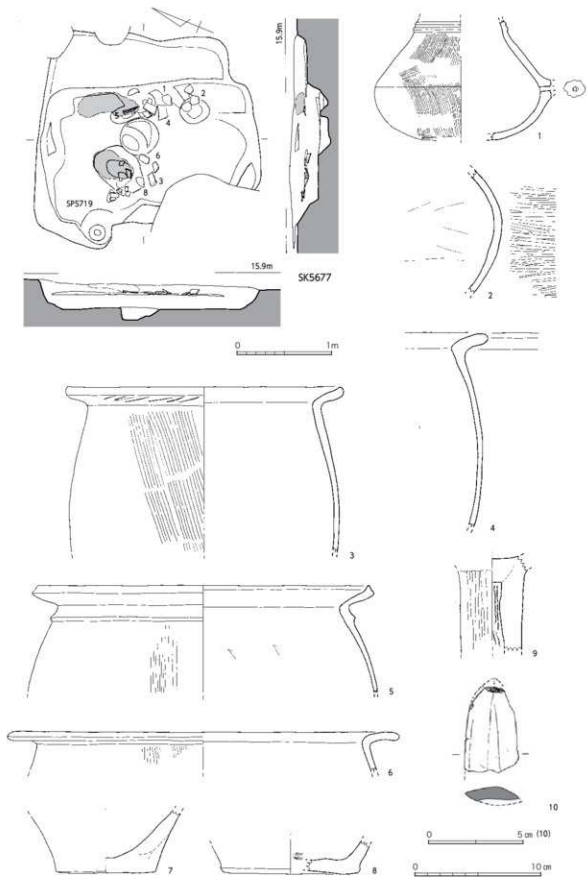


图 135 SK5677 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

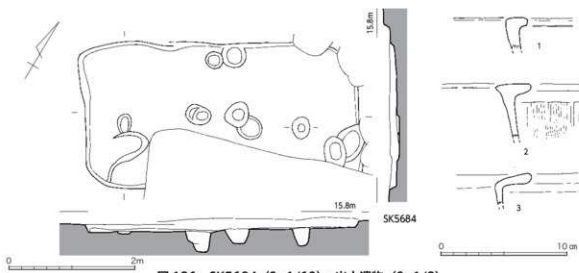


图 136 SK5684 (S=1/60) · 出土遺物 (S=1/3)

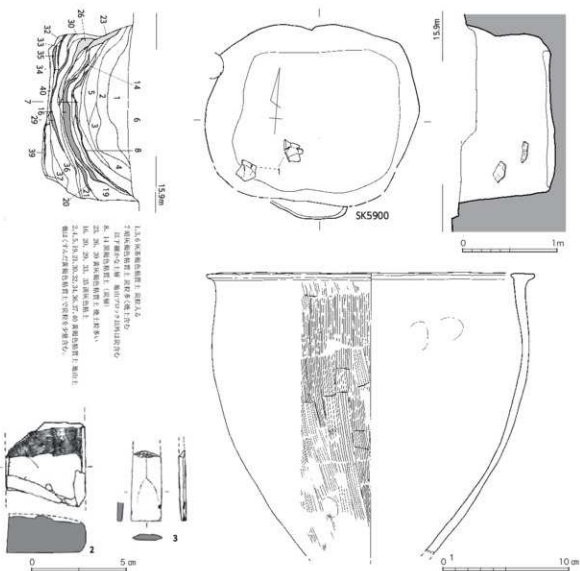


图 137 SK5900 (S=1/40) · 出土遺物 (S=1/3 · S=1/2)

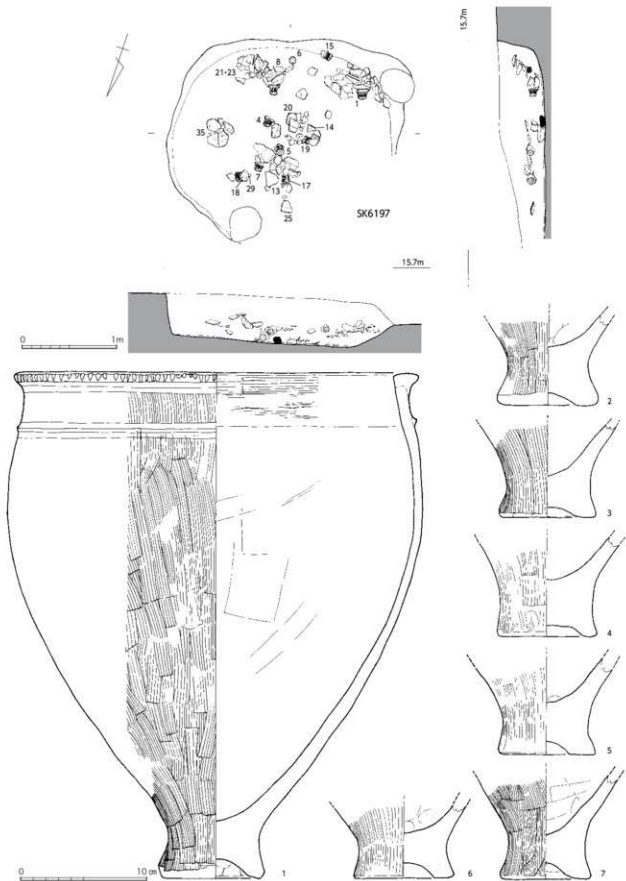


图 138 SK6197 (S=1/40) · 出土遺物 (1) (S=1/3)

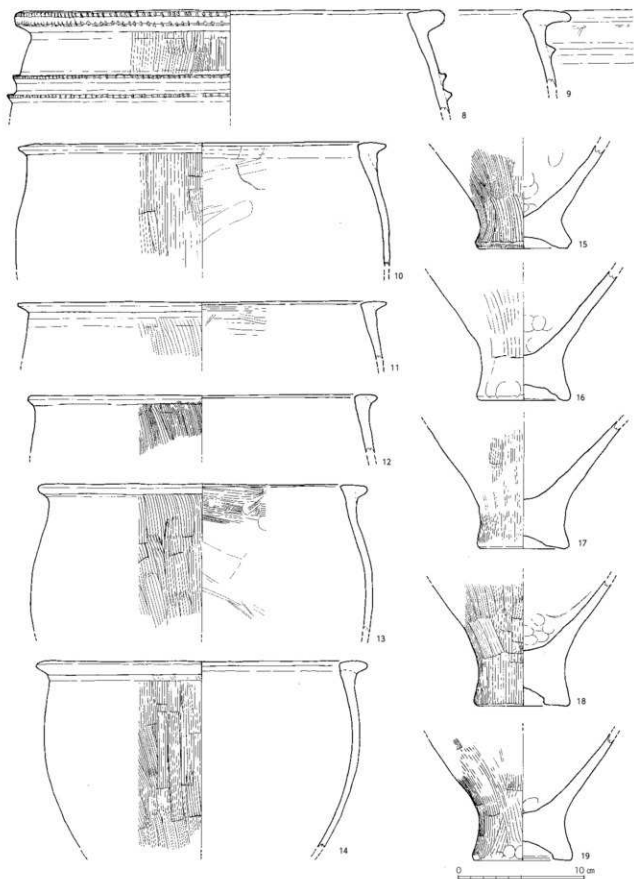


图 139 SK6197 出土遺物 (2) (S=1/3)



图 140 SK6197 出土遺物 (3) (S=1/3)

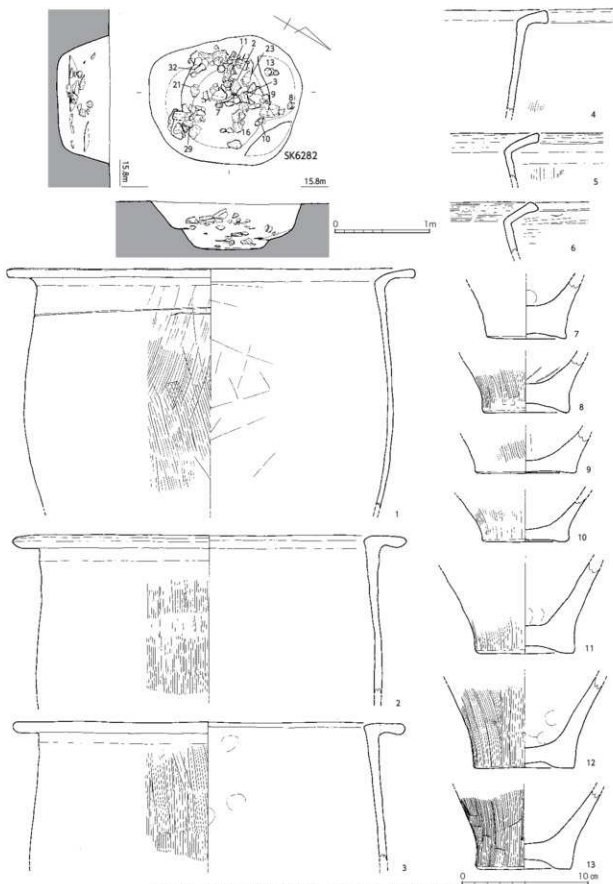


图 141 SK6282 (S=1/40)・出土遺物 (1) (S=1/3)



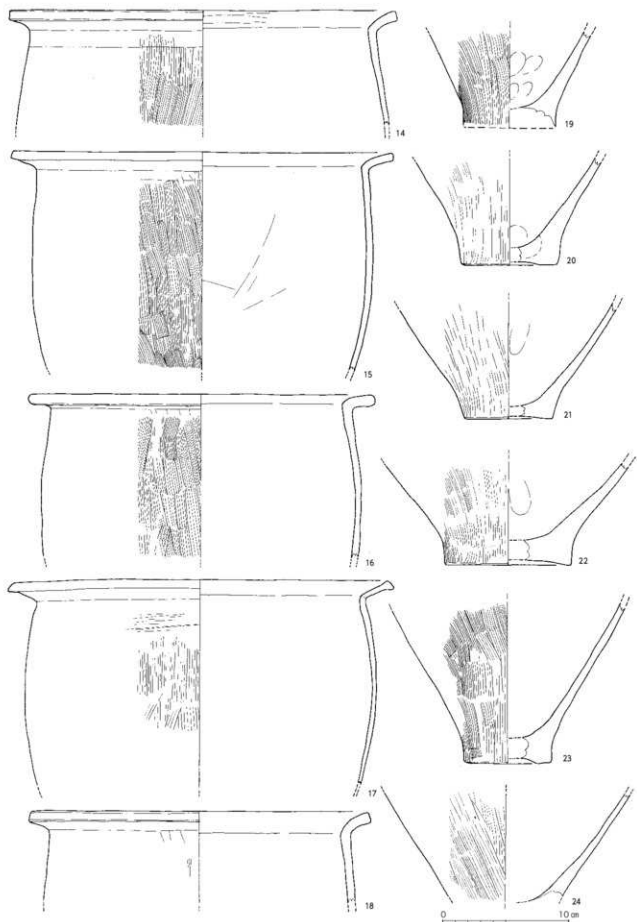


图 142 SK6282 出土遺物 (2) (S=1/3)

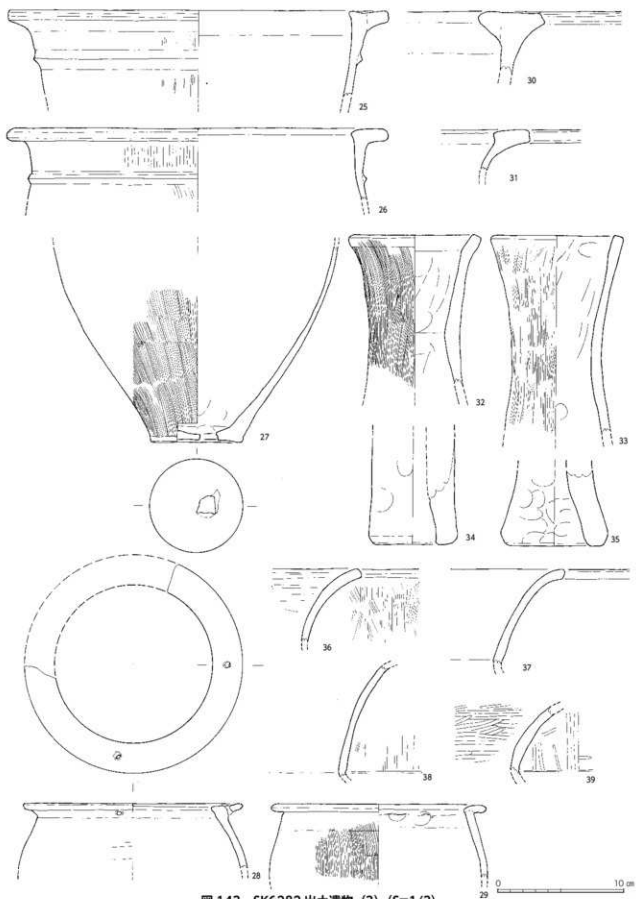


图 143 SK6282 出土遺物 (3) (S=1/3)

**SK6282 (図 141-143) No.66** 平面楕円形で長さ160cm、幅135cm、深さ45cmを測る。上層から底にかけて、甕を主体とする土器がまとめて出土した。遺物は掲載分のほか、薄パンケース2箱分出ている。1～30は甕、32～35は器台、31、36～39は壺である。このほか、緑泥片岩の石鍾が出土した。

**SK6330 (図 144) No.78** 平面長楕円形で、長さ140cm、幅45cm、深さ65cmを測る。床面で蓋1が出土した。2～9は甕、10は壺である。

**SK6605・6604 (図 145) No.76** 溝状の遺構で、長さ300cm、深さ20cmほどで、接する6604とともにまとまった遺物が出土した。1は外反口縁、2、3は小ぶりの逆L字状口縁の甕、4は蓋。中期初頭。

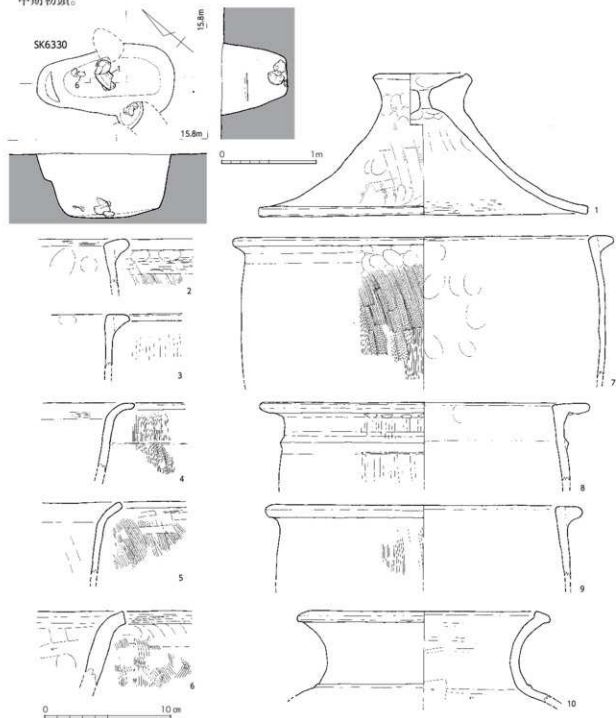


図 144 SK6330 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

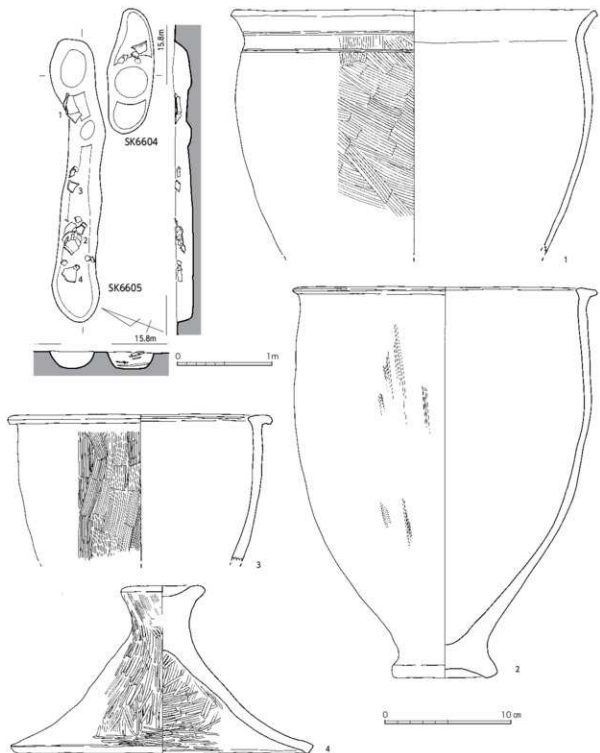


図 145 SK6605・SK6606 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

SK6660 (図 146・147) No.77 平面長楕円形で、長さ 190cm、幅 90cm、深さ 35cm を測る。床面から 10cm 程度浮いて甕を中心とする土器がまとも出土した。1～19 は甕、20～23 は壺である。  
 SK6754 (図 148) No.57 円形から隅丸方形の土坑で平面 250 × 230cm、深さ 40cm。SD3050 に切られる。暗褐色粘質土の埋土から遺物片が出土した。1、2 は壺で外面研磨調整だが刷毛目が残る。3 から 6 は甕。5 は外反口縁で混じりか。4 は胴部 1/3 が残る。中期前半。  
 SK7023 (図 149・150) No.62 平面楕円形で長さ 140cm、幅 125cm 以上、深さ 25cm を測る。西側

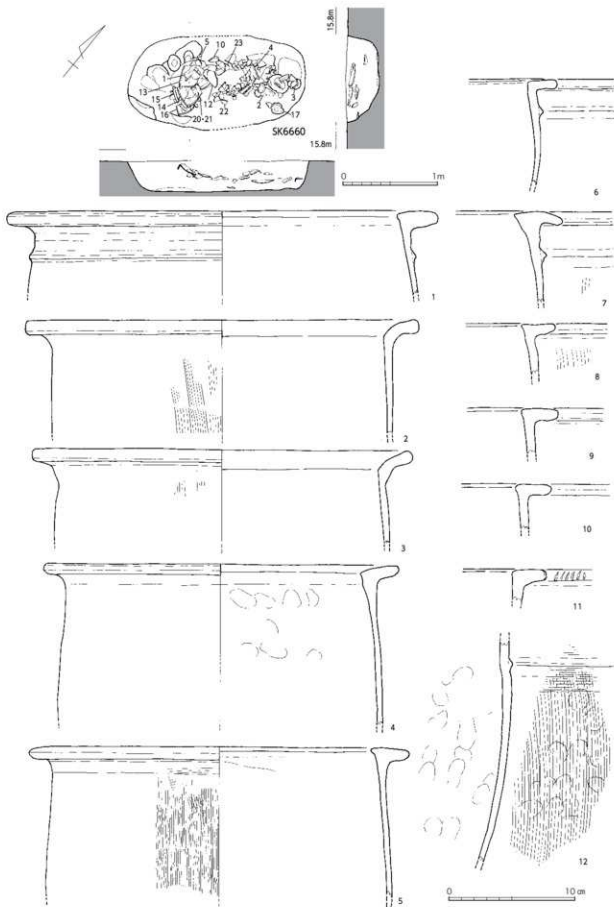


图 146 SK6660 (S=1/40)・出土遺物 (1) (S=1/3)

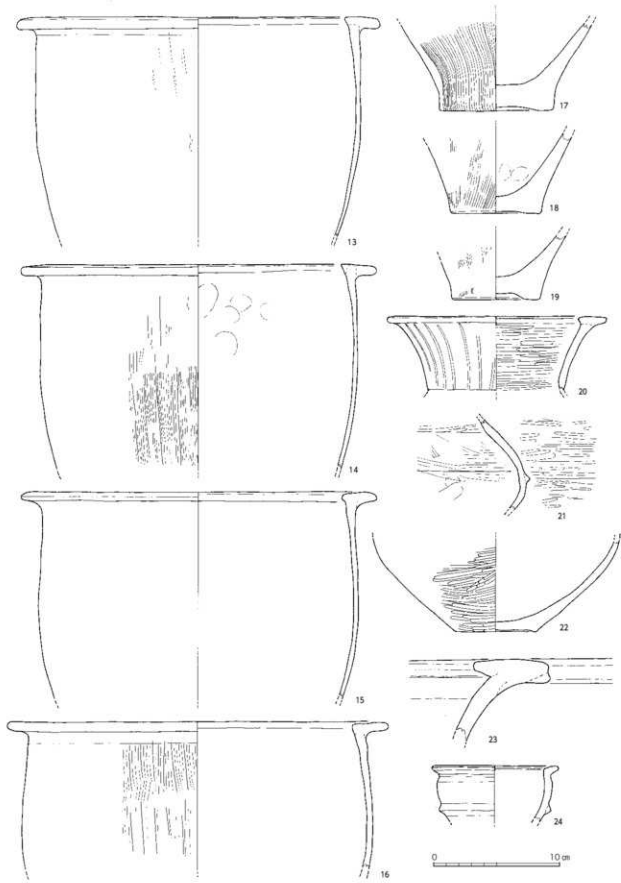


图 147 SK6660 出土遺物 (2) (S=1/3)

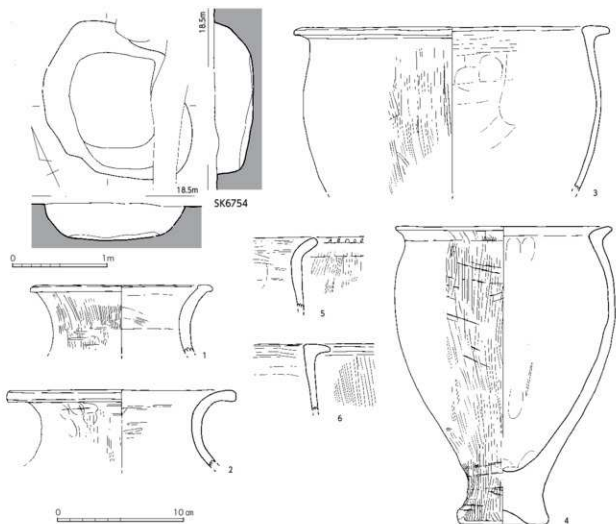


図 148 SK6754 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

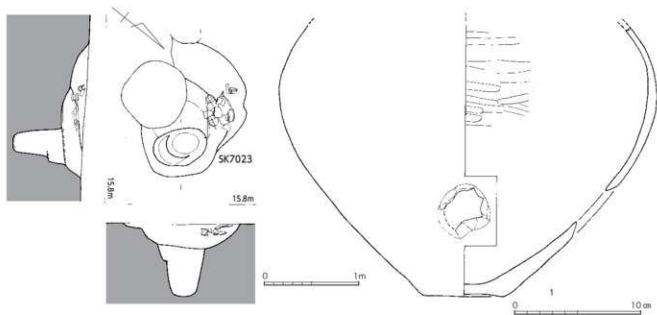


図 149 SK7023 (S=1/40)・出土遺物 (1) (S=1/3)

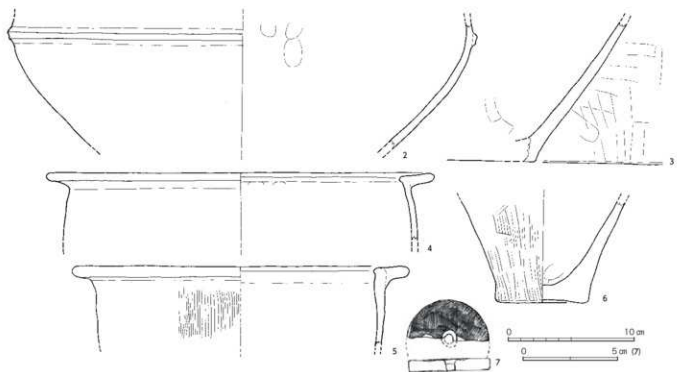


圖 150 SK7023 出土遺物 (2) (S=1/3・S=1/2)

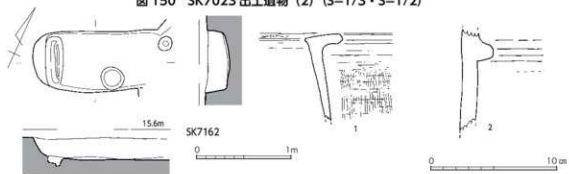


圖 151 SK7162 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

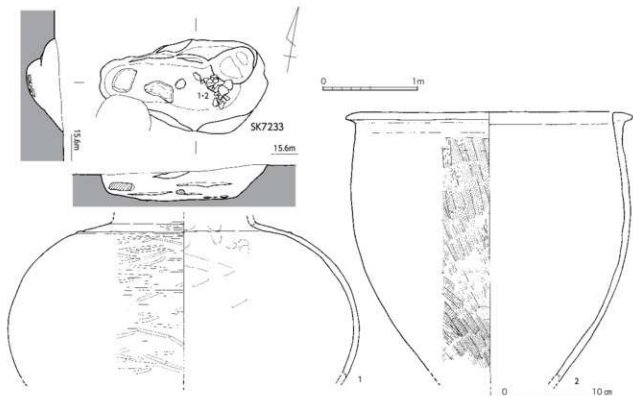


圖 152 SK7233 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)



の壁際付近で甕・壺を主体とする土器のまとまりがみられる。1～3は壺、4～6は甕、7は粘板岩製の紡錘車である。

**SK7162 (図 151) No.61** 長方形の土坑で東を SC5362 に切られる。長さ 140cm が想定され、幅 65cm、深さ 25cm が残る。床は平らで西壁際に木口痕状の掘り込みがある。木棺墓の可能性から示した。周囲に墓はなく判断できていない。遺物は少ない。1、2 は埋土からの出土で須玖 1 式の甕と大型器種の胴部突帯部である。

**SK7233 (図 152) No.62** 平面長楕円形で、長さ 175cm、最大幅 80cm、深さ 30cm を測る。床面付近で壺 1、甕 2、大型砥石が 2 点出土した。

### 3) 弥生時代後期

**SK4957 (図 153) No. IV 4** 平面方形で南北長 70cm、東西長 40cm 以上、深さ 34cm を測る。西側は調査区外へのびる。床面から 20cm 浮いて、くの字口縁の甕 1 が出土した。

**SK2478 (図 154) No.26** SC7259 内東端で確認したビット状の土坑で弥生後期の遺物が出土した。SC7259 を切ると考えられる。平面 67 × 40cm、深さ 80cm を測る。遺物は複合口縁の壺 1 が検出面付近で出土した他は、埋土からの出土。図示した他にくの字口縁の甕、器台などがある。

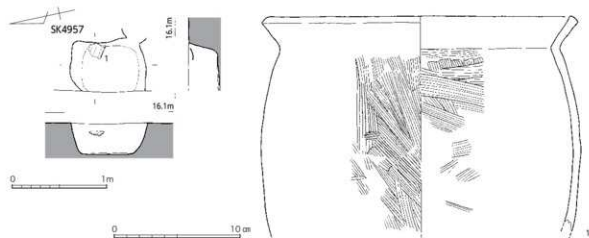


図 153 SK4957 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

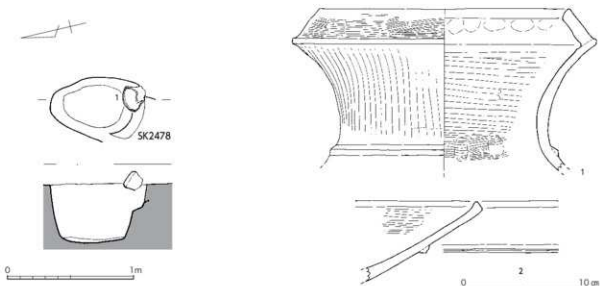


図 154 SK2478 (S=1/30)・出土遺物 (S=1/3)

(3) 溝

1) 弥生時代中期

**SD1046 (図 155・156) NO.41** 溝状の遺構で北西側は外に伸びる。延長6.7mを確認した。深さは中央部で75cm、北東・南西端は100cmほど深く、南西端の立ち上がりは急で、溝というより土坑的である。幅130～170cm。南西端は南東へ曲がるが底が浅く、別遺構の可能性もある。調査時はL字状の平面プランを確認して掘削した。埋土上部は黒褐色から暗褐色の粘質土で焼土粒、炭粒を含む厚い単位の堆積である。下部は炭層を挟んで灰色、灰黄褐色粘土が細かい互層を成す。遺物は中期初頭の甕を主に出土した。2が中位でつぶれた状態で出土した以外は大型の破片である。1～6は甕、7、8は壺。9は太型蛤刃石斧の基部。中期初頭。他に扁平片刃石斧片、石鏃片がある。

**SD2293 (図 155・157・158) NO.15・26** 溝状の遺構で延長12mほどを確認した。幅120～200cmで、東側が最も深く50cmほどで、西へ次第に浅くなる。埋土は東側で上部は暗褐色土で中位に炭層が薄く広がり、下層は灰褐色粘質土を主体とする。炭層から下を下層として遺物を取り上げた。A-B断面付近では黒曜石の微細破片が集中する部分があった。遺物は東部では炭層上、西部では中位の暗褐色土に多い。1～25は下層、26～31は上層の出土。前期末から中期初頭の甕、壺がある。31は扁平片刃石斧。東側には長軸方向と同じにするSK2035、1574など中期初頭の遺構が連なる。

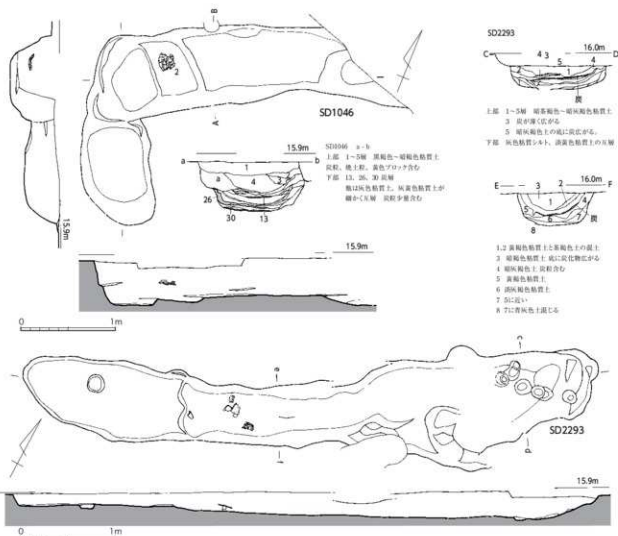


図 155 SD1046 (S=1/60)・土層 (S=1/40)・SD2293 (S=1/60)

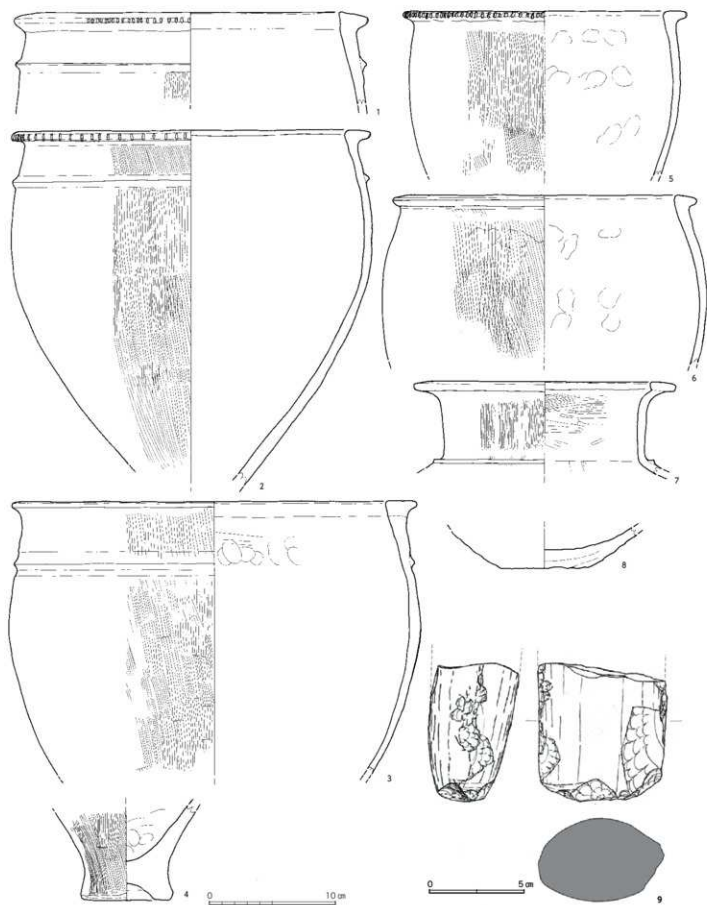


图 156 SD1046 出土遺物 (S=1/3 · S=1/2)

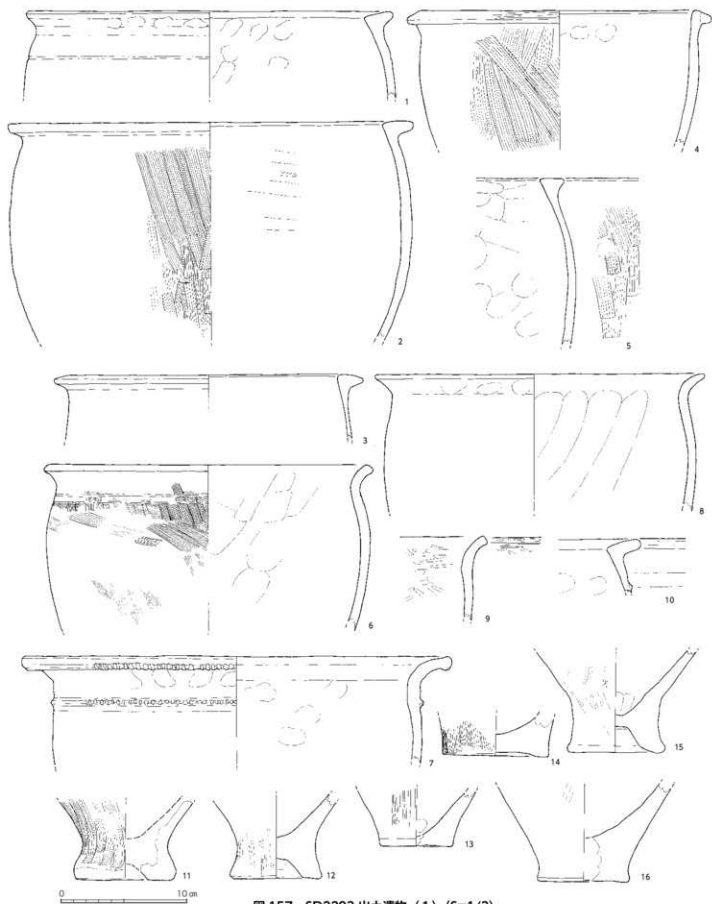


图 157 SD2293 出土遺物 (1) (S=1/3)

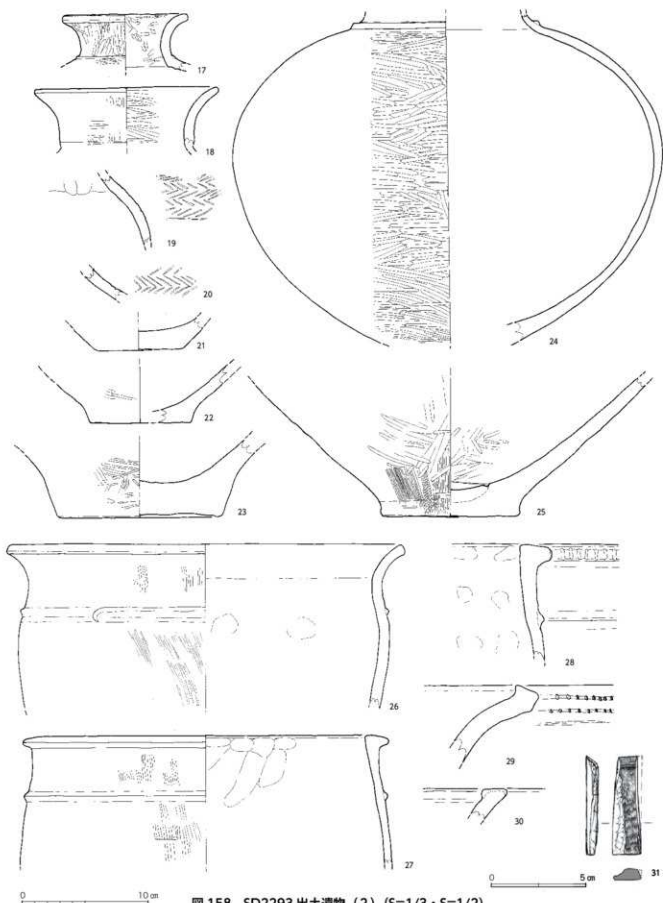


图 158 SD2293 出土遺物 (2) (S=1/3 · S=1/2)

**SD2105 (図 159-161) No. 8** 調査区南東端を北東-南西に横切る溝状の遺構で弥生中期の遺物が出土した。調査区東壁、南壁で土層をみることができる。東壁土層の3b~3h層が溝状にたまった粘質の堆積で、標高14.8mを底に南側へ立ち上がる。この下に続く6層は6a層がシルト質である他は砂礫層で、6a層は3層と同様に南側に立ち上がりが見られる。3、6層は北側の地山である8層とは不整合でその境が連続することから一連の堆積が想定される。6層の砂礫を主とした堆積の最終段階の窪地であるSD2105に3層の粘質土が堆積した状況と考えられる。3層の中でも3e-3g層で中期後半の遺物がまぎって出土し、SX2881として取り上げた。1~5は壺、6~8は甕、9は器台、10は鉢、11は壺の底部、12は高坏脚部。中期中頃。6d層でも中期の土器片が少量出土する。南側の隣接地の確認調査では礫層中から弥生土器が出土しており一連の堆積の可能性もある。

SX2880 SX2105に近接して弥生中期前半の土器が遺構検出面上に密集して出土した。土器は幾重にも重なり、東壁外へ続く。この集中箇所の床面は東側へ傾斜し、その中心は調査区外と想定される。遺物の集中は東壁の5b層に対応し、これを埋土とする堅穴が存在した可能性もある。1~9は甕、10は器台、11、12は同一個体の大型の壺で倒置でつぶれていた。中期前半。

**SD3480 (図 162) No.42** 溝状の遺構で弧状を呈す。幅60cm~100cmと北側に広がり、深さは30cm~40cmで北側がやや深い。南北両側を古墳時代の遺構に切られ275cmを確認した。長く続く溝ではない。遺物は須玖1式までの甕の大型片が多く出土した。大部分は床より20cmほど浮いている。

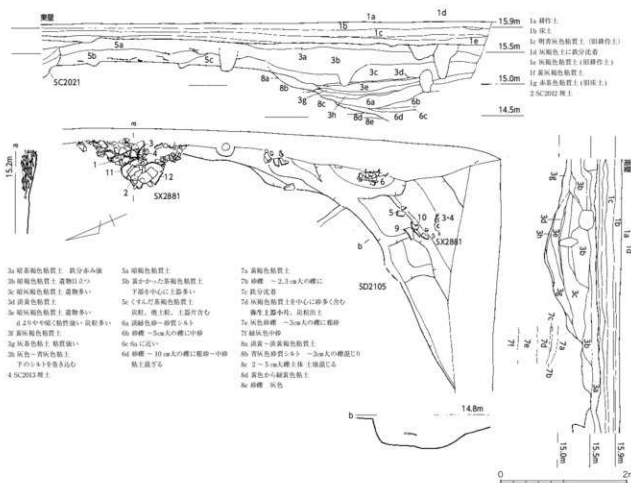


図 159 SD2105・SX2880・SX2881 (S=1/60)

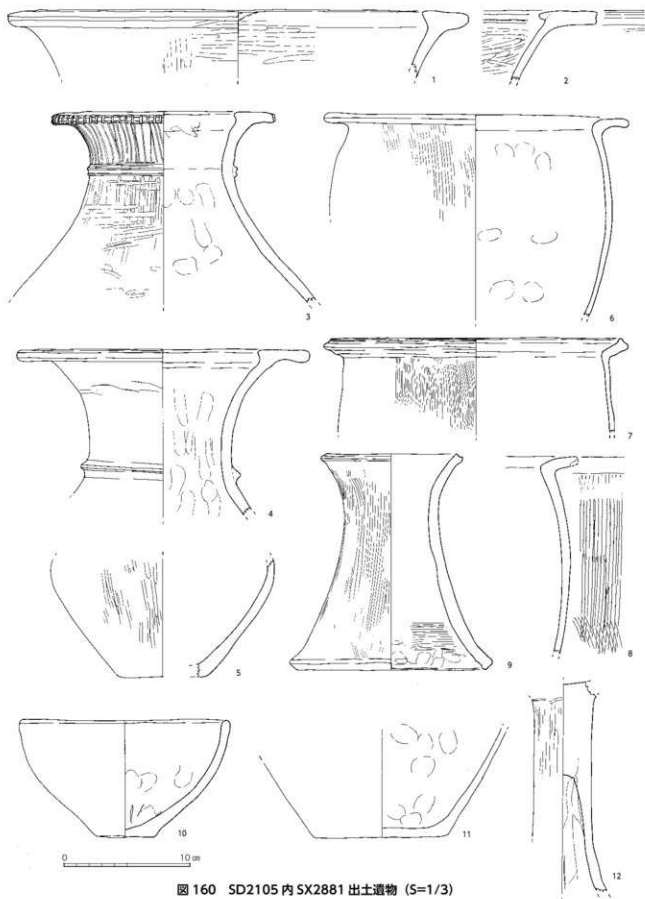


图 160 SD2105 内 SX2881 出土遺物 (S=1/3)

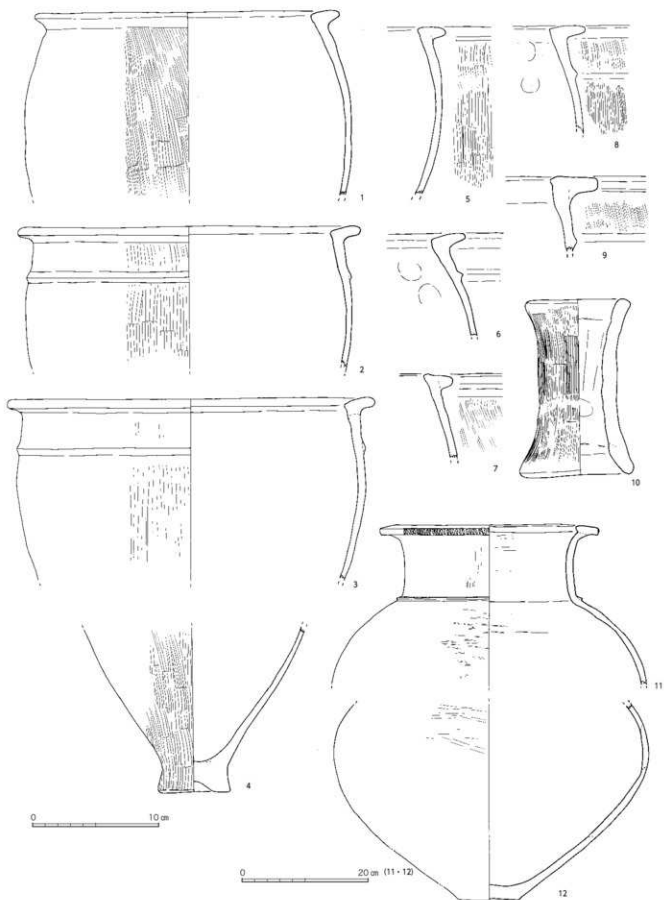


圖 161 SX2880 出土遺物 (S=1/3 · S=1/6)



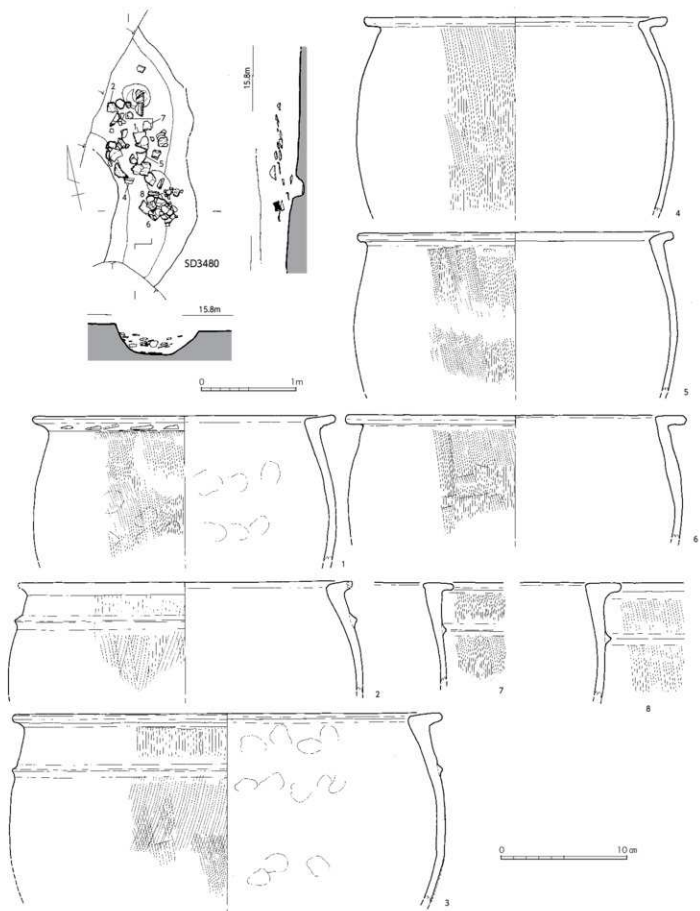


图 162 SD3480 出土遺物 (S=1/3)